

後には兵政の兩權を握りて世襲し諸侯王の如くなる之を藩鎮といひ朝廷制する能はず
 春日大明神
 藤原氏の氏神なり
 猜忍—疑深く殘忍なるをいふ
 其臣—日置九郎
 上西入道—義重のこと
 八幡殿—八幡太郎義家

一後三條院は英主にて、藤氏の權を奪ひ給へり。頼通は宇治に引籠り、教通は春日大明神の神徳も今日盡たりとて退出せらる。白河鳥羽二法皇、院中にて天下の政を聞給うて、藤氏の權益々輕くなれり。されども是より武士を御寵愛なされしより、武家天下の權を執に至れり。彼を奪て此に與へ、其實は却て皇室の大害を生ぜらる。藤原の信西と、清盛父子義朝父子、三家會合して王綱をば微塵と成たるなり。
 一頼朝は猜忍の人なり。同胞骨肉を害し己が枝葉を絶て、北條氏天下を奪ふの基を開く、智と云ふべけんや。平家亡びざるに兄義平の妻を悉せんとし、其意に従はずとて、其父新田義重勲氣を蒙れり、不義甚し。されども其臣の美服せるを怒て、小刀を以て其袖口を切裂れたるは、開國創業の人の儉素の道を天性に得給へり。
 一足利の義兼は頼朝と連壻にて、北條の親み深し。上西入道は頼朝と不快なる故、兄の家なれども勢なし。足利は和田合戦にも、北條に黨して戦功あり。源家亡びて後は只足利のみ八幡殿の後胤なりとて、北條家にては尊敬尤甚し。當時迄は氏族を重ぜし故、北條は源氏の郎黨被官なりとて天下の權を執れども、將軍を奉じて其執權たるのみ。其勢ゆるに天下の人も足利氏を各別に重き事に思ひなせり。後醍醐の御時、尊氏

被官—下につく官

朱全忠—唐の國を奪ひ梁の太祖皇帝となりし人

各別の功も無れど、義貞正成の上に立ちたる事、數代氏族の勢にて如此。故に其天下を奪へるも甚易し。太平記を讀む人、此始末をば知らざるなり。
 尊氏の家は、時々は四位にて左馬頭に進めり。
 一尊氏は仁義の心なく、兵畧も拙なく、武勇も薄し。然し反復變化無窮の惡智ありて武勇兵畧に長ぜる人も勝こと能はず。他人は守る處有が故に窮する所あり。尊氏は心に仁義なく守る處なし、故に反復轉變して窮する所なし。若し人の臣たらば無類の惡臣ならん。人の上に立つ故に天下を有つ事を得たり。己が反覆不實なる故に、諸臣の反覆不實に怨み怒る心毫もこれ無し。其量寛弘ならずと云ふべからず。直義師直の惡事を爲は、尊氏の意を受けて其命を受るには非ず、尊氏は惡名を避て其利は己に收む。小島のすさびに見えたる、天子を崇敬するなどの事は、朱全忠の涕を垂て昭宗の馬を牽けるに同じけれど、何となく誠しやかにて、姦雄とも見え難し。兄弟とも女色に耽らず。只此一事も古今武將の及ばざる所なり。何か不凡の人にて名狀は爲がたけれども、善人には非ざるなり。
 一後醍醐反正の時、處置を失ひ給ふ故、天下の武士失職の恨あり。一人首唱の人あれば、

時行—北條
次郎
沛然—勢よ
き形容

天下群起して之に従ふの勢あり。誰にても宮方に弓を引く人あらんにはと思ふ時故に、時行などにさへ與黨多し、况や尊氏一代の英物にして名家の子なり。天下之に従ふは時の勢なり。義貞正成智勇あれども沛然の水を防ぐに同じ。
一信長は猜忌頼朝より勝れり。其殘暴は頼朝の所不爲なり。佛法を破るは英明に似たれども、其實は殘忍の心の所爲也。一向の徒を救給ひて信長を殺したまへば、天道の所不與昭明なり。猜忍の二字にて遂には其身を亡し給ふ。聰明秀出の處は有れども、局量の狭小なるは遙に諸將に劣れり。

字—のき

一梶尾の明慧の泰時に教へし、天下を亂るものは、欲の一字にて、此欲種々の名相をかへて天下を亂ると云ひたるは、誠に要言不煩と云ふべし。色荒禽荒甘酒嗜音峻宇雕牆及び神仙祈禱好兵黷武の類孰れか欲の名相を易へたる者に非ざるや。外面には名相の異あれども、只是一心の欲の千變萬化の色相をなすもの也。一身を亡し一家を敗るも、唯此一より起て無量の害をなすもの也。明慧が言は、明慧傳と、太平記第三十八卷にあり、知らずんば有べからず。
一邵康節の天津橋上にて杜鵑の聲を聞て、天子南人の王安石呂惠卿等を用ひられて、天

夫安樂先生
と號す康節
は其諡號な
り宋代の學
者にして其
學派を百源
派といふ

怨懟—共に
うらむこと
悖亂—もと
りみだる

下を亂るべきを悟りたるは先識の妙なり。さて其時に天下將治時は地氣自北而南。天下將亂時は地氣自南而北。と云ふことを言へり。少時は何の事とも心得ざりしが近き比其説を辨知せり。春夏の陽氣にて萬物は生長すれども、陽氣は亂れがちの者なり。春は地氣發生して陰多く雨多し。幾程も無て梅雨の候となり、夏の炎暑となれば、迅雷暴雨畏るべきの形象を成せり。これ陽氣は亂の象也。秋冬陰氣になれば、地氣收て雲雨少なく、晴日多くして天氣和平なり。是陰氣は治の象なり。人も少壯陽氣の時は血氣脩らずして酒色に荒み、榮利に惑ひ、或は忿怒の念甚しく、或は怨恨の情深く、人と争ひ人と鬪ふ、是皆陽氣の成す處なり。衰老陰氣になれば、血氣の浮動やと静まりて、酒色榮利の念も忿怒怨懟の情も薄くなりて、心中自ら和平なり。是皆陰氣のなす處なり。酒を被れば心氣悖亂す。此一つにても陽氣の亂を知るに足れり。東南の風起れば天氣變動し、西北の風にては天氣牢く晴る。陽氣の亂、陰氣の治を知るに足れり。然れば地氣の自北而南するは、天下治平の象なり。自南而北するは天下亂亡の象なり。邵氏の言確然として信すべきこと也。さて又天下國家共に奢侈にて繁榮に見ゆるは、亂亡の徵なり。儉素にて鎮靜なるは治興の象なり。世の愚

凍餒—こり
えうゑるな
り

なる人は、奢侈繁華を目出度事の様に思ふは誠に天地の理に暗きが故なり。今にも上より奢侈を誘ひ綱紀を少しく弛べ給はゞ、忽に世は繁華に成るべし。これ以の外の惡事にて亂亡の基なり。近く是を知らんには、今人家に金を借りて多く賓客を招き享宴し、妓女を集めて歌舞を奏せば、其家はにぎやかにして、繁榮なるの形象を爲せり。されども是にて婦女の淫佚も生ずべし、醉客の喧嘩口論も起るべし。後は借金を債られて迷惑にも及ぶべし。一時繁華の形をなせるは、終年困厄の基をなさずや。世間の富貴繁華は全く是と同じ物なり。然はあれども三都などは繁華の餘潤にて活計を爲すもの多ければ、餘りに寂寥に過て、小民をして凍餒に及ばしめんも、仁人君子の所不_レ忍なれば、本を不_レ失して又別に處置も有るべき事ならん。

一今日にて天下第一の用たる者は金銀なり。されども金銀の事のみ主張せば、士氣鄙劣になりて利欲に而已走り、仁義の道は塗炭に陥らん。人に仁義の心なければ、唯利欲の心のみなり。人心利欲のみ熾盛なれば、父と君とを弑することも憚からず、是亂世の基を啓く。唯儉約を主張して困窮せざる様に計れば、仁義の道をも失はざるべし。一儉約を主張して奢侈を戒むべし、精勤を主張して怠惰を戒むべし、慈悲を主張して殘

疾病にして
—病氣危篤
にして

轅を北にし
て越に適く
—越は南國

忍を戒むべし、恭遜を主張して鬪争を戒むべし。國と家と此四つを以て治むべし。一今の世の人情を察するに、上の眠り目を窺て、竊盜を爲し、博奕を爲し、淫佚を爲し、奢侈を爲さんと云ふ心のみなり。綱紀法度少しくも弛ぶべからず。四民の惡心湧き上る子子蟲に能似たり。棒を以て打てば底に沈み、暫時あれば又湧き上る。時々嚴刑の加へらるゝは是棒なり。棒を用ふるは不仁の様なれども、四民をして其惡心を肆にせしめざるは、其天年を全うせしむる無量の仁なり。されども只今の勢にては、天下の惡民を制伏せしむる事甚だ難し。國家の善政に德化を加へ給はゞ、天下惡民の惡心も消滅すべし。

一元の太宗疾病にして脈已に絶たり。衆醫も術盡て爲すべき様なし。皇后の深く嗟き給うて、耶律楚材に問給ふ故、外には爲すべき術なし、唯非常の大赦を行はるゝのみと答へたり。早速に赦令を出すべしと皇后の命ぜらるゝに従つて、楚材是を奉行す。赦令出ると同時に太宗の脈復したり。慈仁の德天地神人を感動する、其速なること如此。今の人其家の富貴、其子孫の繁昌を願ひて姦智詐力を以て之を求るは、轅を北にして越に適くなり。愈行いて愈遠し。慈悲心上に復て、陰德陰功の上に求むべし。

一孔子曰、祭必享福。此理最妙なり。祖先は根本なり、子孫は枝葉なり。祖先を祭るは根本を培養するに同じ、枝葉繁茂せざることを得ず。風水の術すら效あるときは、祭祀の效、必然の理なり。

一鎌倉北條の滅亡せしは、正慶二年五月二十二日なり。兩六波羅は五月八日なり。三好松永將軍義輝を弑して足利氏の滅亡せしは、永祿八年五月十九日なり。故に義輝の歌に

五月雨か露か涙か杜鵑我が名を揚よ雲のうへまで

日州日向
守光秀

義昭將軍の後度兵を擧て信長を討んとして、京都を去て宇治の槇島に入り、遂に滅亡に及びしも、天正元年五月なり。信長の滅亡は、天正十年六月二日なれども、光秀の逆謀は五月に萌せり。故に日州が五月二十八日の夜、愛宕山の連歌の句には、
時は今天が下知る五月かな
と、五月と云ふべし。(六月二日も、五月の節ならん)豊臣秀頼の滅亡は元和元年五月八日なり。亡國は必ず五月なり。奇と云ふべし。然し是には自然の理あり、解すや否。頼政卿の生害も五月二十六日なり、正成の生害も五月二十五日なり、應仁の兵亂も元

年五月十六日なり。五月は可畏の月也。近時天明七年丁未の歲、打こはしと云へる騷擾も五月二十一日の夜なり。

一丙午丁未の厄歲たることは、洪邁の容齋隨筆に、漢高祖より南宋の淳熙丁未迄の事實を載せて、摠而言之。大抵丁未之災。又慘於丙午。昭々天象見於運行。非人力

之所能爲也とあり。其後三衢柴望丙丁龜鑑と云書を著し、橋李錢士昌又其續編を著し、周末より元末まで、兩年災厄の事實を詳載せり。合せて六卷なり。近時王士禛が

池北偶談にも、一條丙午丁未の事を載せたり。清朝にも此災厄を免れず。明を亡ほせし、流賊の張本、李自成張獻忠共に、萬曆三十四年丙午の生れなり。明の滅亡は崇禎

十七年三月十八日十九日は、歲は甲申なれども日は丙午丁未の兩日なり。北宋の滅亡は丙午丁未の兩年なり。周輝が清波雜志には、歐陽永叔、邵康節共に靖康丙午の滅亡

を先知せしにや、此後の丙丁には、我子孫蜀に入るべし、吳に入るべし、と記し置けりと有り。これ學問の效なり。

一史記に、申包胥曰。人衆則勝天。天定亦能勝人。と云ふは、これ小雅の詩に云ふ所の民今方殆。視天夢々。既克有定。靡人弗勝。と云ふに原づけり。陶尾張

小雅詩經
の篇の名

義隆—從二位兵部卿中納言
 村宗—美作守則宗の子
 政村—政則の養子
 政祐—晴政のこと
 義賢—之相とも之康とも云
 細川持隆—阿波勝瑞城主
 道室—輝虎の父

守晴賢入道全董(初名隆房)は、天文二十年九月朔日、其君大内介義隆を長門の大寧寺にて弒して、弘治元年十月朔日、毛利元就と嚴島合戦に打負て誅に伏せり。浦上掃部介村宗、永正十五年、七月九日、其君赤松政村の妾胡蝶と云へる女を奪て、居城備前の三石に據て叛逆し、大永二年九月十二日の夜、政村入道常印を播磨の室の津にて弒せり。享祿四年六月四日、細川高國入道常桓が大物崩れの時、村宗は高國に與黨し、政村の子政祐は、細川澄元を助て高國を破り、村宗誅に伏せり。三好豊前守義賢入道物外軒實休は、長慶の弟なり。天文二十一年八月十九日、其君細川持隆を弒して其妾小少將(岡本美作女、後大形殿と云)を奪ひ、其が腹に嫡子彦次郎長治を生めり。此時持隆の妻をも奪ふべけれども、小早川隆景の女故、毛利に攻められん事を畏て安藝へ返せり。永祿五年三月五日、畠山高政と和泉の久米田合戦に打負て實休誅に伏せり。其前夜
 草枯す霜は旭に早解けて因果はめぐる小車の跡
 と云ふ歌を夢みたりと云ふ。天正五年三月二十八日、持隆の子掃部直之(長治と同腹也)長治を別宮に攻めて是を誅せり。長尾六郎爲景入道道室は、永正六年春其君上杉

可諄—房能の兄
 長治—富山城主

野干—狐類
 彝倫—人の踐むべき道

民部大輔房能(越後守護)を越中雨溝にて弒す。關東管領上杉顯定入道可諄越後に往て長尾の黨を追討す。其翌年六月、長尾爲景高梨攝津、長森原にて顯定と戰て顯定を弒す。天文七年四月十一日、越中の椎名肥前守泰種(松倉金山城主)神保安藝守長治と千壇野の合戦に打負て、爲景誅に伏す。應仁の亂後より、元龜天正に至りて、君父を弒逆する者、國として是なきは無し。予曾て亂賊傳を作て此を詳記す。今斯に擧る處は、其最も倬然として人々耳目に存する物なり。此時足利の將軍は京都の在住も叶はずして、江州の朽木谷に蟄居せらるゝ勢なれば、誰ありて弒逆の人を征討する者も無れども、昭然たる皇天、下に臨で赫たること有るが故に、全姜實休浦上長尾の類、數年を経ずして皆天誅に罹りたり。愉快なること也。永正十五年七月十一日、三浦新井の城、北條早雲に攻滅さるゝ時、城主義同入道道寸兼て落ば落延べけれども、明應三年九月、養父時高を弒せし天罰にて天命此に盡果たりとて、息荒次郎義意と共に自害せり。惡人なれども天命を知りしは優しきこと也。されども如此の人情なれば、虎狼野干の世界にて、人道は盡果たるに、東照神君の御神德にて、天地再び清明にして、彝倫再び次叙せること、その御功德の大なる、我

邦にては開闢以來聞かざる所なり。

一 大内義隆の佞臣は、相良武任、上杉憲政の佞臣は、菅野大膳、上原兵庫、今川氏眞の佞臣は、三浦右衛門、武田勝頼の佞臣は、長坂鈞閑、跡部大炊。天其國を亡さんとする時は、先づ此一種の人物を生じて、賢臣をして其口を閉しめ、其君をして其愚妄を肆にせしめて、然後亡之。されば此佞幸の臣は、其國の妖孽、慧孛よりも大なり。恐るべきの甚しき者也。人君たる者、人を知らずんは有べからず。

一 大織冠鎌足公は、春日大明神の御子孫には有れども、蘇我蝦夷入鹿を誅せるの功にて、子孫四百年天下の權を秉り。忠仁公昭宣公よりは、畧天下を領するの勢にて御堂殿に至て極れり。我東照神君は、保元平治より天下兵亂の世界となりて、殊に應仁の亂後よりは、虎狼の世界となりしを、四百餘年の亂を平け給ひて、如此太平無事、鼓腹凱樂の世界と成し給へり。その功德の高きこと、豈鎌足の比並する所ならんや。

一 數百年の創業の君は、漢祖光武、唐の祖宗、宋の祖宗、明の太祖、皆一時の亂を平け天下に大功あり。故に其子孫數百年天下を有ち給へり。曹操劉裕などは、征伐の大功

妖孽—わざはひ
 慧孛—慧星に同じ孛は星なり
 忠仁公—良房
 昭宣公—基經
 御堂殿—道長

房玄齡—字は喬孫、唐太宗の功臣なり

斬焉—さつばりときりたやす形容

程には子孫長久ならず。隋の文帝は周の外戚にて天下を奪うて功德なし。陳を滅して天下混一にせしのみなり。故に房玄齡は主上無功德、有天下と云て其天下の永久ならざること兼て知たり。天下を有つの長と不長とは天より其創業の人の功と徳とに報ずるの厚薄なり。

一人道は子孫相續、血脈連綿する處のみ大切のことなり。近世は養子と云ふこと盛になりて、此道自ら明ならず。善惡吉凶の報も人一代にては分難し。故に夫子も積善之家、必有餘慶、積不善之家、必有餘殃と、家と云て人とのたまはず。此理自ら明白なり。祖先と子孫とは、一株の樹なり。幾枝幾叉にわかれても、松は自ら松也。梅は自ら梅なり。故に祖先の善惡、子孫の吉凶を成せり。さて浮沈あり榮衰ありとも、血脈相續する内は、生氣未息の樹なり。世に斬焉として子孫なき者、多く富み榮るものなり。此は祖先以來の生氣此にて盡果る故、一旦に榮華を發す。人道の不幸なる此上は無きこと也。是を吾家にては増上寺方丈の富貴と云ふ。いかほど富貴なりとも貧民の父子相續には遙に劣れり。世に諸天を祈て富貴を求る者は、子孫の富貴を吾一代に引上る故、子孫は必ず斷滅すと云ふ、源平盛衰記に載せたる、清盛の吒祇尼天

黎烝—庶民

の法を修せしなどは是なり。覺束なき様なれども、極めて有るべき理なり。子孫なき者の富貴なると同じ事なり。此等の富貴は俗眼よりは是を見れば福慶と思ふべけれど、君子は此を觀て天下第一の不幸とす。唯慈仁の心を本として人を愛育し、天の冥鑒に負かずして子孫永久を願ふこと、上一人よりして下黎烝に至るまで此道によらずんば有るべからず。

一大抵世人を見るに、薰然として慈愛の心ある者は、必ず子孫あり。残忍刻薄の者は、必ず子孫なし。是また知らずんば有べからず。

一命定於有生之初の説は、尤の様なれども甚だ教に害あり。百歳の壽相ある者は、百歳以前には他人之を撃ても刀にて傷くることも能はず。自ら屠れども刀腹に刺すことと不能ならんには、定るとも云べし。斫れば斫殺すべく、衝けば衝殺すべき時は、百歳の命も縮むべし。縮む理あれば延す理も無ては不協ことなり。尤も縮るは易く延すは難し。難易の違は有れども無とは云べからず。人惡を積めば天其鑒を奪ふ故に、惡業増長して公には刑殺に遇ひ、私には災厄病疹を得て命を縮む。善を積めば天其衷を誘むる故に、明智日に開て災患を退け康寧を得、壽も延ぶべし。されば人の所爲

肆妄に—何も考へず妄りに

家の子郎黨—家來眷屬

にて命は變動すべし、一定するには非ず。例へば百兩の金、費し用ひて終には無なるべきも、肆妄に用る時は、暫時に盡き、惜で緩く用ふる時は盡る事遅し。國家の運命は、又人壽よりは延し好き理あり。政治の善惡、君徳の吉凶にて長くも短くも成べきものなり。命を一定不移ものとし得る時は、萬事天に委て人事を盡さざるに至る、甚だ教に害ある言なり。又道にも妨ある言なり。實理に似て實理には非ざるなり。

一諸國の武士、東鑑に出たる國々の御家人幾十幾人、國士幾十幾人と是あるも、元龜天正の比まで國々に城館を持ち、在々に在名を稱して住居せり。近比の儒者の云へる土著の士なり。千石二千石を領するもの、在住して此ある時は、武備も具り其領の百姓を家の子郎黨にする故に、兵卒も乏からず、千石二千石も領する者、後の山に建こもる時は、誠に一國の動亂なり。守護國主は替れども此地士は替らず、實に地より生出て繁茂せる大木なり。北條時代北條の一門、足利時代足利の一門の外は、守護國主も多くは肥後の菊地、薩摩の島津、豊後の大友、肥前の小貳、周防の大内、伊豫の河野の類にて、數百年の領主なり。甲斐の武田、信濃の小笠原、常陸の佐竹小田などにて知るべし。國主は將軍の下知に背き、地士は國主の命を用ひず、天下の争亂

止むことなし。然るに足利の末世より信長秀吉の二代を経て、西國の人は東國に移り東國の士は西國へ趣き、其地士も何と無く、東西に漂泊して今は諸國の城下に住居する者は、五百坪か三百坪の屋敷に住し、江戸にある時は、五間か三間の長屋に居住し、武備も乏しく郎黨も少なく、威も無く勢もなく、町人と同様にて百姓には遙に劣れり。これ武士の根を斷て鉢植となしたるなり。故に昔の地植生茂大木に對すれば、鉢植武士とも名付くべし。鐵砲渡來よりして此利器にて武勇の角を折き、鉢植にて武士の勢を碎き給へる故に、如此太平の世界とは成たるなり。今にも昔に復して武士を土著せしめば、又々足利時代の争亂は眼前に出で來るべし。然るを近世土著を悦ぶ儒生あり。此は足利時代の事をも辨せず、又御當代太平の基をも不辨して只武士の武備乏しきを憂て此説を爲せり。實は其文旨笑ふべきの甚しき事なり。

一學問の功は天道を知るの一事にありて、古今の治亂成敗を詳にすれば、天道自ら明白なり。世の學者は天道を不知、大概其見解、如所謂天道是耶非耶など云ふの上に出ること不能。夫子も君子畏天命、小人不知天命而不畏。とあれば、今の學者は小人の學なり。

寥廓—空虚
と同じ、ほ
からかにし
て大なるこ
と

一後世の人の心にては、天は空虚寥廓にして、無知無爲にして人事と相渉ることなく、人は自ら人、天は自ら天なりと。是より機智競ひ起り、權術日に甚しく、天下の萬事皆人の智力にて致すべく、治を圖るの君も徒に法制禁令を詳にして人事の防となし、之を己の徳に本づけ、之を天の意に求ることを不知、哀むべきの甚しき也。後世の人には曹操司馬懿等の奸智深き人は無し。されども數世を経ざるに、劉放、孫資が燕王宇を拒て仲達を都へ召きし一事にて、魏の天下は亡たり。夕陽亭にて荀勗が賈充へ女を太子の妃にすべきと教へたる一言にて、晉の天下は亡びたり。是にても悟るべし。智力窮する所ありて、天の禍を下す、智術防慮の外に出て如何ともしがたき事を、弛吉逆凶、福善禍淫、維天之命、於穆不已。盡未來際に涉て、此道此命絶え滅するの理なき時は、人は智力を棄て唯徳を是修めて天意に負かざるより外になすべきの理なき也。

人事を盡して天命を待と云へば、智力も棄つべきには非ざれども、智力を宗とする者は、道德の尊きを知らずして、之を務めず。走て機智權謀に趣く。戒めずんば有べからず。

召誥一書經の篇名

妍媸一妍は美なり媸は醜なり

一神は正直の頭にやどる

心さへ眞の道に叶なば祈らずとも神や守らん

と云ふなど、皆能く道に叶へり。左傳に、神聰明正直而一也とあり。小雅に、正直是與神之聽之。式穀與爾。とあり。人心の正直なる處は、鬼神と一體なり、己の鬼神と天地の鬼神と相應和するの理あり。これ福祿を享る處なり。人心私欲膠々擾擾たる時は、遠く鬼神と隔たる。祈れども福なし。人は己を正し心を明にせば、祈らずして鬼神の福を得べし。召誥に云ふ、王其德之用。祈天之永命。夫子丘之禱久矣。とのたまひしは此事なり。されど愚不肖の人も、神佛を祈る時は、先づ身も敬し心も清らかなれば、大善事と成して、非謗すべからず。

一人心私欲の拵ひなき時は、善善惡惡の心、昭々明々として、明鏡の妍媸を分つが如し。これ四端の是非之心。知之端也。と云へる者なり。さて私欲に拵はるれば、是非善惡、混淆、錯謬、至らざる處なし。今日の事には私心雜りて、正人君子も己に害あれば毀り、佞邪の小人も、己に利あれば譽む。是非毀譽信するに足らず。古の人には譽ても利なく、毀ても害なし。私欲都て盡く、此時本心昭明なり。されば三國志を説

大雅一詩經の篇名
彝一常なり
懿德一美しき德

けば、千人は千人、萬人は萬人、曹操仲達の惡を惡み、立德孔明の善を善す。これ大雅に、民之秉彝。好是懿德。と云ひ、周易に、我有好爵。吾與爾縻之。と云ひ、孟子に、天爵良貴。人心之所同然。と云へる者、皆是なり。これ道の大本なり。

一有徳の君子は、舉天下是を賞嘆感服し、有罪の惡人は、舉天下是を指斥非謗す。一人二人の事には私あり。舉天下の心一同に如此は、天理の公然なり。先づ人心と云ふものを知るべし。これ己のなせる者に非ず、又吾親のなせるものにもあらず、自然の生にて天造の物即ち天なり。されば天下の人の善と服するは、天の善と宣ふ也。天下の人の惡と斥するは、天の惡と宣ふなり。是臯陶謨の天命、天討、天聰明、天明畏、泰誓の天視天聽とは此事なり。是亦此道の大本なり。

一人智力を奮て、天下の事皆智力にて爲すべしと思へり。可笑可笑。臨終の日に至て、今一日生んと思ふとも、天の許さざれば半時も生き延ること不能。見つべし、吾此一身さへ自由なるべき者に非ずして、天の所_レ有也。况や外物に於てをや。天に任せ命に任せずんば有_レべからず。

一孔孟の言は人事に切實なり、治道に切實なり。試に小學の外篇を讀むに、諸名賢の言

無津涯—津
は渡し場涯
は水際なり
水のはてし
なきをいふ
伊川—程頤
を呼ぶ稱

一行皆人事治道に切實にして千萬世の模範なり。唯二程の言は往々荒渺にして如無津涯、人事にも治道にも切實ならず。これ孔孟の言と同じきや不同や。伊川の易傳は治道人事に切實にして、經解ありてより以來、此書の如き大義理を説き出せるは無し。敬服すべきこと也。

先考—亡き
父

聖賢の言は節用而愛人。省刑罰。薄稅斂と、其人事治道に切實なる事如此。一吾家三世殺生を戒む。これ佛法を信するには非ず。禮記に、諸侯無故不殺羊。士無故不殺犬豕とあるにて、聖人の意も是を好み給はざることを悟るべし。吾子孫たるものは、永く是を守るべし。戒殺の文は、焦竑筆乘に載せたる一篇極て詳悉なり。反覆玩味すべし。天子諸侯は多く人を養育せらるゝ徳にて、禽獸などを殺すの罪も乗除すべけれ共、匹夫は人を養育することも少なく、天地の間に何の功德もなく、唯物命を害して罪を作る事以外の悪事なり。同氣相求。同類相應。物命を害するは殘忍の心なり。我此心あれば、天必ず是に應ずるに殘忍を以てす。故に殺生を好む家は、天必ず其子を殺して此に報復し給ふ。天道好て還すの其一也。吾先考東岩先生の殺生を禁じ給へる宿功にや、吾兄弟に痘難なし。又吾兄弟の子皆痘難なし。瘡瘡の治療

冠履轉倒—
冠と履とを
轉倒して用
ふる事

に此より要なるは無し。難痘を得たるの日、良藥も效なし、祈禳も無功。されば平日此を戒めて彼を救ふべし。さればとて、世に人を遇する事は不仁甚しくして、唯殺生を禁ずる者あり、是は冠履を轉倒するの人なり。一忍の字、堪忍容忍と云へば美德にて、殘忍忮忍など云へば惡徳なり。世其故を詳にせず。忍はこらへると云ふ字にて、善心の發するを押し怵ふれば惡となり。惡心の發するを押しこらふれば善となる。美衣腴食せんと云ふ慾起るは惡なり、此を押しこらふる故善となる。卒暴に忿怒を發するは惡なり、此を押しこらふる故に善となる。物命を害するは慘むべきことと、惻隱不忍の心發するは善なり、夫を押しこらへて殺す故惡となる。物を偷むは恥かしきことと羞惡不爲の心起るは善なり、夫を押しこらへて偷む故惡となる。善心の發は不可忍、惡心之發は忍ばざる可らず。季氏陪臣を以て天子の禮を僭す。羞惡の心發せざるには非ず、夫を怵へて爲るときは、弑父與君も忍て爲すべきの人也。古人は魯君の季氏を容忍することと思へり。故に三國志晉書などに皆人を容の事と用ひ來れり。集註范祖禹の説までも同様なり。然らば季氏を評するに非ずして、魯の朝廷を議するなり。孔子謂季氏の義に切ならず、唯集註謝上蔡の

粗糲—粗食
は玄米な

謝玄—肥水の戦に秦の符堅を破りし人
履屐の間—細微の間と

解實に聖意を得たり。

一 忍事敵^{てきすさいせい}災星^{さいせい}と云ふは司空圖の句なり。其味深長なり。人は無量の欲心を押し

へ押しこらへ、妄意の怒を押しこらふれば、夫にて如何なる災厄も消滅すべきことなり。

一 汪信民、人常咬^{かみ}得^え菜根^{さいこん}則百事可^{べし}做^{なす}。と云しも味最深長なり。人は衣服居住よりも

飲食の淡泊を第一に心得べし。粗糲を常とすれば、身に病なく、家に難なく、子孫に

福あり。さて己の身、貧を厭はざれば節義も立べき也。

一 裴晋公の雞猪魚蒜逢^{ほう}著^{ちやく}則喫^く。生老病死時至^{すなはちゆく}則行^{ゆく}。と云へるは達人の言なり。其胸

中洒々落落^{さくさくらくらく}一物を芥滯^{かいたい}せざるを覺ゆ。

一 一粒の米一寸の紙も大切にすべし。米粒寸紙を粗末にする人は、必ず天罰を蒙り身を

亡ほし家を滅ぼす人なり。是吝嗇に非ず、小量に非ず、天物を暴殄せざるの大道なり。

古より大功業を建る人は、竈豪にして浮氣粗心の人には非ず。謝玄は三萬の兵にて符

堅の八十萬を打破り、晋の宗社を存せしが、郗超の其平日履屐の間にて不^ふ失^{しつ}其任^{にん}

と云ふ處にて、其必定勝利を得べき事を知りたり。郭子儀は、安史の亂を戡定して、

滅びたる唐の宗社を中興せし程の大功臣にて、汾陽王に封ぜられ、二十四考の中書

いふ意
郭子儀—唐の名臣なり

樽節—抑制
すること

令なり。されど年中外より來る書牘の上包の紙を綴て小册として、日々の日記を付け

給へり。王曾は、凝然不動。八九分の地位の人と云ふ。丁謂を打取て、仁宗の太平

を開きたる大功の人なり。されども書簡の末の空紙を集て人に贈り物となしたり。特

に儉素の徳のみに非ず、無用の費を厭ひしなり。是にて大功業を立て大事を作す人は、

粗心の人には非るを悟るべし。

一 老人の傳へたるに、人は身を立てんと思ふには、苦しと思ふ事を務め成し、苦しと思

ふ家に立入るべし。夫にて身は立つ者なり。面白しと思ふことを成し、面白しと思ふ

家に立入れば、夫にて身は亡ぶと云へり。極めて奇特の妙言なり。

一 恭儉の二字は、聖徳の本なり。されども江戸には仕事師、きほひ等云ふ卑賤の者多く

て、夫れが風習士君子にも移り、果ては學者までにも及びて、恭儉遜讓は拙き事の様

に思ひて、傲然として倨驕なるを、氣象高き人と悦び、儉約樽節は小量なる事の様

に思ひて、侈然として放肆奢華なるを氣象豪なる人と悦ぶ。聖人の惡み給へる、不遜爲

勇の類、學者の常態となりたり。聖經を談じて論語の一句をも不辨、惡むべきの甚

しきなり。

酒の—原本のまゝ

敗家人—家を滅す人

一舜は隠惡而揚善。夫子の惡み給へるも、惡稱人之惡者。孟子も言、人之不善、當若後患。何などの類、人の惡を掩ふの事を教へ給へり。莊子好言、人之惡謂之讒。とありて、左傳に世亂則讒勝とあり。人を誹謗することを好むは末世の人情なり。何某なる者あり、和歌の達人にて、國學に詳に詩文をも能せり。一時の才人なり。されども好て人を非り人を罵る、一生の能事は人の惡を稱揚し人の不善を言ふのみを事とせり。遂に死して子も無く一代にて消失せたり。又一畫師あり、書をも能くし詩文を略解せり。畫家には奇特なる人なり、酒の嗜で酔て歌舞し、洒々落落可愛の人の人なり。世態にも老練して人情にも諳悉せり。されども是も好て人の惡を云ふ。恒言に、人の惡事を談すれば、蒲焼を食ふ味ありと云ふ。彼れ一男子あり。英才にて詩文を能くす、年有らば名を成すべきに、惜かな、夭折せり。人を非謗する天譴免れ難し。可畏の至り也。

一戸障子を閉るに一寸残し、草履木屐を踏散らして脱ぎ置く人、皆敗家の人なり。

一周易、豫の六三に、吁豫悔。遲有悔。諸本吁に作て唯吁など解せり。姚信が本には、

吁に作て旦日と云へり、可笑こと也。吁の字にて日たくるまで、樂むと云事也。是

流連—居つづける

報施—むくいほどこす
姦軌—わるだくみ

は第二交目に樂處を去るに不終日とあるに對して、日たくるまで樂む人は後悔あるを云ふ、妙絶の御教なり。人は酒宴、遊觀、伎樂、玩好、何にても心に樂しと思ふ事は、其場を早く去るべし。うかくと何までも流連すれば、遂には身の大害を生じて後に至りて悔ること多し。樂事樂處は早く去る者と心得れば、先づ一生人は無難なるべし。

一農工商三民の功は、眼前に現出して人々知る處なり。士の功は何か知れがたき様なれども、天の果報ありて安坐して衣食するは如何なる事ぞと問ふに、天下に士なくして三民而已ならば、人欲放肆にして力の強き者は弱き者の財寶を奪取り、婦女を淫掠せんに、何人か此を制せんや。此惡心を肆にすること不能は、士と云者の捕へ誅すると云ふ理あるを以て、捕へざるも誅せざるも、畏服して天下は治れり。天子諸侯の國天下を有たるも、士の此功を本とせり。されば士は此功を以て安座して衣食をなすは天の報施なり。さて士の一字は寇賊姦軌を制する刑官の稱なるに、一統に士の稱となるは、此功を本とせるにや。今の世の士は、三民の邪欲を制する事能はざるのみか、先づ己より竊盜姦軌をなすは、本意を失ふの甚しき也。

天譴—天罰
に同じ
澹然虛靈—
澄みてくも
りなきこと

一孟子に、治_{をさめらる}於_に人_{もの}者_は。食_を人_を。治_{をさむ}人_者。食_{はる}於_に人_{天下}之_の通_{つう}義_ぎ也_と。是_はは君子_とと小人_とと相_あもちの義_ぎを云_ふ。又_{つう}通_じ功_を易_を事_を。以_て一_あまるを_をな_なざるを_をた_らず。可_べからもつて_をさ_さむくに_を爲_す國_と云_ふ。是_はは四_あ民_を相_あ養_をの理_をを云_ふ。荀_{じゆん}子_しには、相_あ生_を相_あ育_をと云_ふこ_とを數_を々_を言_をへり。飲_{いん}食_{しよく}、衣_い服_{ふく}、宮_{きやう}室_{しつ}、器_き用_{よう}、農_{のう}工_{こう}は是_をを_を作_をり、商_{しやう}賈_がは是_をを_を通_{つう}じて人_々を以_て天_{てん}地_ちの間に_に生_{せい}活_{くわつ}するこ_とを_を得_をたり。吳_ご服_{ふく}屋_やな_などの大_{たい}厦_かを成_{せい}したるも、世_せ間_{けん}の_の人_をを_を養_{やう}ふなり。士_しは君_{くん}の祿_{ろく}にて自_{みづか}ら_ら養_{やう}ふ様_{やう}なれども、薄_{はく}祿_{ろく}の_の者_をは何_{なに}か器_き什_{じふ}を_を作_をて妻_{さい}子_しの_の養_{やう}育_{いく}を爲_をすときは、天_{てん}下_かの御_ご家_け人_{にん}も世_せ間_{けん}の_の人_をを_を是_をの_の養_{やう}ふなり。一_{いつ}體_{たい}世_せ間_{けん}の_の萬_{まん}人_{にん}にて、世_せ間_{けん}の_の萬_{まん}人_{にん}を_を養_{やう}ふ、千_{せん}古_こ此_こ道_{だう}に_に易_かること_を無_なし。是_を相_あ生_{せい}相_あ育_{いく}の_の道_{だう}にて、仁_{にん}者_{にん}人_{にん}也_と。二_に人_{にん}爲_を仁_{にん}。仁_{にん}之_の大_{たい}用_{よう}如_{ごと}此_こもの_のなり。されば人_{にん}たる_の者_をは、假_かにも相_あ生_{せい}育_{いく}する_の道_{だう}を_を忘_{わす}るべ_から_らず。相_あ育_{いく}の_の道_{だう}を_を忘_{わす}れて、人_{にん}を_を欺_{あざむ}いて自_{みづか}ら_ら己_{おのれ}を_を立_たて_てと_と欲_ほする_の者_をは虎_こ狼_{ろう}の_の心_{しん}にて、本_{ほん}心_{しん}の_の仁_{にん}を_を失_しひ_ひたる_の者_をなり。天_{てん}譴_{けん}の_のが_がる_べか_らら_らず。一_{いつ}人_{にん}の_の本_{ほん}心_{しん}は、澹_{たん}然_{ぜん}虚_{きよ}靈_{れい}なり。親_せへ_へ接_{せつ}すれば_は孝_{かう}心_{しん}を_を生_{せい}じ、子_しへ_へ接_{せつ}すれば_は慈_じ心_{しん}を_を生_{せい}じ、兄_{けい}へ_へ接_{せつ}すれば_は悌_{てい}心_{しん}を_を生_{せい}じ、弟_{てい}へ_へ接_{せつ}すれば_は友_{ゆう}心_{しん}を_を生_{せい}じ、君_{くん}へ_へ接_{せつ}すれば_は忠_{ちゆう}心_{しん}を_を生_{せい}じ、民_{みん}へ_へ接_{せつ}すれば_は恕_{じよ}心_{しん}を_を生_{せい}ず。仁_{にん}者_{にん}人_{にん}也_と。仁_{にん}字_じ从_ら人_{にん}从_ら二_に人_{にん}爲_を仁_{にん}。接_{せつ}する_の處_{ちよ}の_の人_{にん}にして_は其_{その}名_なを_を異_{こと}にし、其_{その}用_{よう}を_を異_{こと}に_にすれども、其_{その}本_{もと}は_は一_{いつ}心_{しん}而_に已_をなり。是_をを_を仁_{にん}と云_ふ。是_をを_を吾_{わが}道_{だう}一_{いつ}以_{つら}貫_ぬく_レ之_{これ}と云_ふ。

恕心—思ひ
やる心

桑弘羊—武
帝に仕へ財
政を司りて
名ありし人
字文融—玄
宗に仕へ天
下の農を奨
勵して軍需
に充つ
豐亨豫大の
時—天下太
平にして盛
に樂むべき
時
寒酸儒生—
貧しき書生
紹聖—年號

一漢文帝宋仁宗など恭儉の世に、理財の臣あることを聞かず。武帝奢侈にして桑弘羊の如き者は出たり。玄宗奢侈にして王拱字文融の如き者用ひらる。奢侈なるが故に財用乏し。此に於て理財の臣用ひらる。大抵天下の治は恭儉を本として仁義を主張し、務て天下の民の利欲の横流を防制すること也。然るを上財用に乏うして利欲を以て政となす時は、下は盡く賊心を生ず。此故に武帝の時は盜賊諸國に蜂起し、玄宗の時一宋の徽宗の時に、蔡京童貫王黼など用ひられて、今は豐亨豫大の時也。然るを儉素なことを云は、寒酸儒生の陋見也とて一向に不用。事々侈大を事として丁謂王欽若が眞宗の欺きし故智を用ひたり。眞宗は太祖太宗の後を承て朝に君子多く國運も隆昌なる故に、何の害も無れども、徽宗の時は王安石執政の後、天下の士風盡く壞れ、哲宗の紹聖以後は朝廷盡く小人の棲家なり。然るを如此の横議を立て天下の國是となせし故、遂には二帝夷狄の虜となり、中國夷狄の棲家となれり。奢侈の畏るべき事如此。

苑圍—庭園

露臺—屋根
なき臺

玉清舊地—
昭應宮

一孝文本紀贊云。孝文皇帝即位二十三年。宮室苑囿車器服御。無所增益。有不便弛以利民。嘗欲作露臺。召匠計之。直百金。上曰。百金中人十家之產也。吾奉先帝宮室。常恐羞之。何以臺爲。身衣弋絺。所幸慎夫人衣不曳地。帷帳無文綉。以示敦朴。爲天下先。治霸陵。皆瓦器。不得以金銀銅錫爲飾。因其山不起墳。南越尉佗自立爲帝。召貴佗兄弟。以德懷之。佗遂稱臣。與匈奴結和親。後而背約入盜。令邊備守。不發兵深入。恐煩百姓。吳王詐病。不朝。賜以几杖。辟臣袁盎等。諫說雖切。常假借納用焉。張武等受賂金錢。覺。更加賞賜。以媿其心。專務以德化民。是以海內殷富。興於禮義。斷獄數百。幾致刑措。烏呼仁哉。(漢書)

仁宗本紀贊云。仁宗恭儉仁恕。出於天性。一遇水旱。或密禱禁廷。或跪立殿下。有司請以玉清舊地爲御苑。帝曰。吾奉先帝苑囿。猶以爲廣。何以是爲。燕私常服澣濯。帷帶袞綯多用繪純。宮中夜饑。思饜燒羊。戒勿宣索。恐膳夫自此戕賊物命。以備不時之須。大辟疑者。皆令上讞。歲常活千餘。吏部選人。一坐失入死罪。皆終身不遷。每諭輔臣曰。朕未嘗嘗人以死况敢濫用

惻怛之心—
思ひやる心

霍光—字は
子孟前漢の
名臣なり

辟乎。至於夏人犯邊。禦之出境。契丹渝盟。增以歲幣。在位四十二年之間。吏治若媿情而任事。殘刻之人。刑法似縱弛而決獄多平允之士。國未嘗無嬖倖。而不足以累治世之體。朝未嘗無小人。而不足以勝善類之氣。君臣上下惻怛之心。忠厚之政。有以培壅宋三百餘年之基。子孫(神宗)一矯其所爲。馴致於亂。傳曰。爲人君。止於仁。帝誠無愧焉。(宋史)

一開國創業の主は自ら各別のこと也。繼體守文の君は、文帝仁宗の恭儉を模範となすべし。此心にてあらんには、天下は久安長治にして亂亡の期なからん。武帝は恭儉に反して、天下騒然として亂れたり。霍光の功にて、昭帝の時武帝の惡法を盡く變じ給ひ、宣帝又中興の良主故に漢室十二代を経たり。神宗王安石を用て仁宗の政事に反し仁宗を仇讎の如くにせり。安石常に文帝を誹謗す。此は文帝に託して仁宗を嘗る也。新法の行はるよ、天下騒然として亂る。元祐の皇太后司馬光、呂公著を用ひて、一旦は神宗の惡法を盡く變し給へ共、哲宗徽宗皆神宗の子故、紹聖元年より章惇用ひられ、安石の法安石の黨再び用ひられ、北宋の天下は亡びたり。是にて文宗仁宗恭儉の尊きを知るべし。

肅敬一つし
しみ敬ふ

韓琦一字は
稚圭才文武
をかれ宋代
の名相なり
范仲淹一字
は希文兵事
にて韓琦と
並稱せらる
靖康建炎一
年號なり
西夏契丹一
夷狄の名

漢文帝、宋仁宗、明孝宗、三帝の陵前を過る人は、今に肅敬尊崇すと、清人の記載に見えたり。徳義の人を感じる千百歳の下如此。難有ことなり。宋人仁宗を詠ぜし詩に、桑麻不擾歲頻登。邊將無功吏不能。四十二年如夢覺。春風吹淚過昭陵と、當時の事實を説盡せり。

一韓琦、范仲淹は、趙元昊を打滅すの志あれども、仁宗は早々講和を許して兵を罷れたり。各別の高手段なり。安石用ひられて邊隙を啓き、遂に靖康の滅亡を馴致せり。是にて仁宗の明知を知るに足れり。されども靖康建炎にて和議を講ずるは、仁宗の西夏契丹を御するの理とは相違せり。
一奢侈も治世の道具なり。高直なる雜人形も、高價なる瑇瑁の櫛笄簪も、金銀なくては買ふこと不能。豪富の家の金銀を奢侈華麗のものにて引出して、貧賤の者の潤澤となれば、是皆金銀融通の道にて、是を制禁せらるゝは小器より起ると云ふ。世に此見解の者多し。是は山下廣内の説の餘唾にて、以の外の惡説なり。奢侈華麗なること天下の有用ならば、聖人何ぞ恭儉を苦口して人に示されんや。論語を見よ、夫子は恭儉とあり。夫子の雅言を見よ、與其奢寧儉とあり。儉則固寧固とあり。周

取られば一
「取るは憂
し取られば
人の數なら
ず捨つべき
ものは弓矢
なりけり」

易にも行過乎恭、用過乎儉とありて、三百八十四爻、萃の用大性の外、一語の侈大を好むなし。二篇可用享。孚乃利用。論東隣殺牛。不如西隣禴祭。實享其福。皆儉の用を云ふ。孝經の謹身節用、論語の節用而愛人、孰れか儉に非ざらん。左傳に云、儉徳之恭也。侈惡之大也。二語已に説盡せり。されども經傳を讀むにも及ばず、一部の平家物語の開卷の一語を知れ。奢る者久からずと。奢の一字、國天下に在ては國天下滅亡の種子なり、一家に在ては、一家滅亡の種子なり、一人に在ては、一人滅亡の種子なり。さて高價高直なるもの、數萬金を貯て五兩十兩の金は貧家の十錢二十錢にも同じき人は是を買ふ時は、金銀融通とも云ふべし。左には非ず、豪富の人は是を買へば、貧家も競て之を買ひ、衣服器玩まで豪富の人は是を服用すれば、困窮の家も之を服用し、果ては心得ありて是は不宜ことなりと知る人までも、取らねば物の數ならぬなど云ふ勢になりて、據所なく衣服を美にし、器玩を飾るに至る。今は瑇瑁の價は黄金よりも高し、服妖の類なり。奢るに手張て困窮す。困窮せざるも、手張れば人を恵み、人を調こと不能して人情薄し。節用愛人の四字に全く背戾す。困窮の極は種々無量の惡心を生じて刑網に觸るゝに至る。其源を尋ねれば奢侈よ

刑網に觸る
刑罰を蒙
むる

り起る。されば人情を厚し、風俗を正しうせんと欲する時は、奢侈を嚴禁するより先なるは無し。

山下廣内は名和長年の後胤なりと云ふ。余江戸に来る日は、其二子皆七十有餘の老翁にて軍學に達練せり。兄は孫子轉用と云ふ書を著し、甲越の二流を一部の書に集む。弟は軍學に神道を兼たり。皆頗る心得ありて、只人に非ざれば、廣内もさる者なるべし。然れども金銀を湧物なりとして奢侈の者を禁すべからずなどの説は、不學にて聖意を不知に出たり。其孫元直は余が門人にてありしが、自害して家亡ぶ。

一人道の第一は、孝の一字にあり。人子たる者は、孝道を念々忘るべからず。新唐書の孝義傳を見よ。親に孝ある者は、不可思議の奇瑞感應あり。唯此一徳最も天地の神明に感通すと見えたり。されば世の孝心の人は才藝も智術も無れども、思ひ寄らざる發達榮昌のある者なり。余亦二人の非人を知れり。盜賊には非れども粗賊に類せる程の者なり、然るに二人共に賤民なりしが、皆一時に發達して頗る金銀にも富たり。さて此兩人平生の所行一事の人道を得ること無きに、天道不可思議也と疑ひしに、能々聞正せば、二人とも老母に孝心なり、是にて疑團氷釋せり。富貴を不願人は無し。富

貴を願ふの志あらば、假にても可し、僞にても可し、唯孝道を盡すべし。富貴を願て、孝道を爲し、假に僞に孝道を爲せと云ふは、怪き様なれども、天性純孝の人は世間に幾も無し。中下の人を導くに至誠と云ふとも、其所までは至り難かるべし。されば富貴を願ふ心より入るとも、孝心を盡さんは、不孝には萬々まさるべし。

一人は心に惡念を生ずれば、此一念既に天地の鬼神に棄られて、禍を得るの種子を種ゑたるなり。善念を生ずれば、此一念己に天地の神明に與せられて、福を享るの種子を種たる也。大小遲速は其事に隨ふなり。さて假令福を願の私心より入るとも、孝道は人道の第一にて、是を行へば可と云ふことを知て勉ても行へば、此念己に天地の神明を感動するに足れり。此念の生ずる、己に天地神明に福せらるゝ也。福を得ざるの前、既に福を得たりと知るべし。仁人者正其誼、不謀其利、明其道、不計其功、

など云へるは、大賢君子の事にして、今日の人を導くの方には非るなり。一善と福とは同類なり、惡と禍とは同類なり。同氣相求、同類相應ず。善を爲ば福あり、惡を爲ば禍あり、同氣相感する自然の理なり。何を以て善と福と同類なりと云ふや。父に孝なれば父喜び、君に忠なれば君喜ぶ。善は人の所喜なり、福も人の所喜なり、

歸命頂禮—
佛の前にひ
れ伏して餘
念なくすが
り頼むこと
歎羨の心—
人をうらや
む心
環堵の室—
方一丈の室

これ同類に非ずや。何を以て惡と禍と同類なりと云ふや。父に不孝なれば父惡之、君に不忠なれば君惡之。惡は人の惡む所、禍も亦人の惡む所、是同類に非ずや。古人吉凶の二字を以て善惡となし、禍福となす。其一なるを知るに足れり。然らば惡を爲して福を願ふは、火に就て冷を求め、水に入て煖を索るに同じ。必無の理なり。此理を知れば、善念の生ずるは已に天地鬼神に福せられたると云ふ理明なり。佛者は能く妙理を解したり、佛を有難しと歸命頂禮するは、もはや佛の光明に迎へ取られたる也と云ふ。召公曰。王其德之。用祈天之永命。夫子曰。丘之禱久矣。祈禱せずして祈禱せり。解すや、否。

一幼なき時、老母より傳はりし古歌に
餘所にのみ見てや止なん葛城の高まの山の峰の白雲
此歌の意を觀得せる故にや、幼より歎羨の心うすし。又亡友吉田學生の友人の歌とて傳へし、
かくてしも棲めば董の花にさへ憂を忘るよ蓬生の宿
此歌の意を玩味して、多年環堵の室に安んず。家累多くして家狭し。實に容膝の處も

茅茨不剪采
椽不剡—宮
殿の極めて
質素なるを
いふ
岐山—山名

無けれど、今日まで夫に安することは別に一説あり。藤田子定の言に光國中納言の桃源の御隱宅、予が草堂に少し廣き様なりと、十五年前に云ひし故に、造作せんと思ふ度に、子定の言を思ひ出して且やみぬ。

一鳩巢小説を讀みしに、鹿島大明神へ鳳凰來れりとて、四方八面きらくと玉の如く光りしと云ふ、新井白石の話を載せたり。此鳳凰は漢の武帝、唐の玄宗、宋の眞宗、徽宗などの世に出でては時めく鳳凰ならん。聖人の御世には覺束なし。堯舜の土階三等。茅茨不剪。采椽不剡。時に出て、文王の卑服をめされし時に鳴於岐山たるは、きらく光る玉の如き華麗なる物には有まじ。白石は一體修大を好み華麗なることを悦ぶは、此一條にて著明なり。一代の英物なれども、聖人の大道を知らず。

一忍の一字にて金錢を積む工夫は盡たり。先づ心に美食を欲する欲生ずるも忍んで堪へ美服を欲する欲生ずるも忍んで堪ふ、是は善忍なり。さて人を賑ふべしと云ふ仁心の生ずるも忍んで堪へ、交際の禮を缺くは羞しと云ふ義心の生ずるも忍んでこらふ、此は惡忍なり。善惡に拘らずして、唯一箇の忍の一字を守れば富なり。古人も忍は不育の本と云ふ、さるが故に長者子なし。

一儉は夫子の宣る節用愛人の義なれど、末世儉を主張すると、人々皆吝嗇になりて、己に私するの欲のみ熾になりて、慳貪甚しく、奢侈の風の猶人を恵み人を賑ふの氣習ありしには遙に劣れることと爲る。奢侈の美なるには非ずして儉の方を失ひたるにて、不徳甚だし。とかく儉は自ら己を節約にして成るべきだけは人を賑ひ恵む事なりと心得べし。

儉嗇よりして人々仁恵うすく、人恵心すくなくして、困窮の者多し。困窮の極、人皆惡事を爲して刑罔に罹る。是にては奢侈の弊と同じ事になるべし。心得らるべき事なり。

一人は愷悌人情に近きもの君子の人なり。人情に遠き者は惡人なり。辨姦論に安石の惡を知りしも是なり。溫公荆公共に飲酒を好まず、二人他人の家に往きて主人の強て酒を勧めれば、溫公は強て一盃を擧ぐ。荆公は何と強ひても盃を把らず。溫公是は予が介甫に所不及なりと云へども、實はこれ溫公は愷悌人情に近く、君子長者の風を失はずして、安石が人情に遠き、宋の宗社を亡ほすべき氣習已に此に逗漏せり。人君など唯堅固なる人を悦び給はば安石復出づべし。

惠心—他に
惠む心

愷悌—和ら
ぎ樂しむ
溫公—司馬
光
荆公—王安
石
介甫—王安
石の字
宗社—宗廟

社禮

隱曲偏私—
依怙蠱負
治大國云々
—老子の語
にして小鮮
は小魚小魚
は其まゝ烹
る故に國を
治むるに煩
雜のことを
爲すべから
ざるをいふ
蕩々—廣大
の貌
匡正—共に

一人君の徳は、慈仁を本心となし、表は威嚴なるべし。慈仁を本とせざれば、臣民愛戴の心なし。威嚴を失へば、臣民畏敬の心なし。人臣の徳は、忠信剛直を本心とし、表は柔順恭遜なるべし。柔順恭遜ならざれば、世を涉ること難し、忠信剛直ならざれば事あるの時用を爲し難し。

一政は簡約なるを尊び、公明正大を宗となすべし。假にも煩擾なるべからず。隱曲偏私なるべからず。治大國—卿烹小鮮とは簡約のこと也。論語には可也簡なりと云ふ。無偏無黨王道蕩々たりとは公正の事なり。論語には公則民悅と云へり。

一吾子孫門流の者に、王公の師範たる者もあるべし。末世人情の薄偽邪惡なるを怒らば、刑罰を峻にして一時を匡正するの念生ずべし。是以ての外の僻事なり。刑罰は表を嚴にして民の惡を懲すは、聖人の仁心なり。されども其實は慈仁の心を宗として、成べきだけは寛宥なるべし。刑罰を峻にすれば、無程世の亂を生じて國運を縮むべきこと必定なり。此義に暗ければ聖人の徒には非ざるなり。又吾子孫門流には非ざるなり。一左傳に亂國多制とあり。政の簡なるは治世の良法なるを知るべし。又三辟之興皆叔世也とあり。刑法の盛なるは、末世衰亂の事なるを知るべし。昔天正十二三年の事なり。

たゞすの字
なり
三辟—夏殷
周三代の刑
法
叔世—末の
世澆季の世

冠冕—かん
むりなり首
領の義

り、遊方の僧の小田原の城下を過ぎて制札を見て、北條家運命も末になりぬ、滅亡に程あるまじと高聲に言りたり。巡察の足輕此を聞いて大に怒り、捕へて奉行所へ引出し、如何なる事にて斯は申したりやと詰りしに、さればとよ。我は四十年前氏康公の御代、この御城下を通行せしに、町の制札五六箇條に過ぎりしに、今御城下の制札四十餘箇條に及べり。左傳に亂國多制とあれば是亂亡の徴なり。怪み給ふこと勿れ、と云へり。奉行も理に服して放ち遣りたり。程も無く天正十八年四月朔日より圍を受け、七月七日には氏政氏堯切腹して、氏直は亡虜となり、五代八州を領せる繁榮も、一時に滅亡したり。さて此僧は道理に明にして先識の智、感服すべし。此時代は儒生は無き故に、僧徒のみ儒學ありて此等の僧も有りし者なり。

一我邦にて、儒者にて上達し天下の政に預りしは、皇朝にては、吉備大臣、菅丞相、武家天下には大江廣元、新井君美、唯四人のみなり。儒學をなす者は心細き事なり。されども儒者も侮るべからず。菅丞相の御子孫は、加賀能登越中の三州を領して今は諸大名の冠冕なり。廣元の子孫は、一時は中國の十州を領し、今も周防長門の二州を領せり。積善の餘福天道の與する所を見るべし。是にて儒者の爲に氣を吐くに足れ

清談—清雅
なる空談
文墨風流—
詩文を樂み
紙墨に親し
むこと

質實—質素
にして實用
を尙ぶ

り。
一學問變じて老壯放蕩の流となる。天下の一厄なり。身を脩め天下を治るの術は講ぜずして、無用の虚無清談となる。范甯が王弼何晏の罪は桀紂にまさると云ふは、知言なり。再變して文墨風流の事となる、又天下の一厄なり。齊の東昏、陳の後主、隋の煬帝など、華奢風流の極なり、身を害し國を滅すに至る。後世風流の好才子は、南唐の李後主、宋の徽宗なり、皆亡國の虜となれり。今の世にても貴人の學問風流に流るれば、學問の用は無くて奢侈の媒となる。故に目出度ことは無し。恐るべきの甚だしきなり。

一百年前までは、學者質實にて、皆有用の學を爲したり。近時物茂卿の徒より、學問皆空詩浮文に流れて經義道學など講ずる人少し。此二十年以來は、學問益々浮薄にして、書畫文墨にのみ走り、風流を以て學問となす。恐るべきの甚だしきなり。有志の人は嚴戒せざるば有るべからず。

東山の義政は、我邦にて風流人の冠冕なり。此にて風流好事の害を悟るべし。
一古書畫古器物の類、少しは古を考ふるの證になる事有れども、夫は萬に一にして骨

敦一器の名
彝一宗廟の
常器なり又
酒を盛る器
なりといふ

董家の欺を昭て彼が腹を厭しむるのみ。北宋の時、唐畫と鑒定せるもの、宋の絹にて和買の印あるにて知りたること、陳鵠が耆舊續聞に見えたり。博古圖に徽宗の時の愚臣共、某の鼎、某の敦某の彝など名付て、人を欺きし事洪邁の容齋隨筆に二條まで辨駁して其偽を明白にす。古書畫古器の信用するに足らざるを知るべし。尙書にもてあそべはものをうしなふこころを玩物喪志と、聖人の大戒なり。又器非用古惟新あるにて、書畫器物の名理に害あるを悟るべし。然るを近年は奢侈の餘習にて、學者學問して書を讀み義理を講ずる事は得知らず、唯書畫古器を好み、筆硯文房の具を集て學者の態を裝飾し、無學不文にて藝苑へ濫入し、學者文人の名を冒さんと欲す。學者も其徒に化せられて書の一葉を讀むにも不及、讀みたりとも文字を校するには過ぎず、何等の義理何等の妙所ある事も不知して、是は宋板なり、是は古寫本也など云ふ事になりて、典籍書畫器物と一様の玩物となり、學問も風流好事茶人古董の部類となれり。さるが故にや、此二三十年來は、學者學問を業とはせずして、書肆古董を業とする者多し。惡むべきの甚だしき也。宋版の漢書を王元美錢謙益など高價に購りし事見ゆれど、是は學者の習氣にて好事の害也。宋の孫之翰の名石硯を不買こと、墨客揮犀に見え

卓然一秀で
たる貌

たり。李格非文叔が季廷珪の名墨を不買こと墨莊漫錄に見えたり。皆古の賢士の卓然として不惑もの也。さて器物を玩弄して時日を費し金銀を費すもの、其本源を尋れば、幼少の時、物を玩弄せる餘習の老ても猶存するにて、實は幼き心のもてあそびを不念なり。老成の君子より此を見れば可笑の甚だしき事也。されども、唯もてあそびにて日を消する而已ならんには、辨斥にも及ばざれ共、相率て天下華靡奢侈の大海をなす時は、辨明せずんば有べからず。舉天下此惡習に染む時は、吾此言門流にも及ほし難し。唯吾子孫たる者は、古書畫古器物を以て人の欺を昭ふべからず。又人を欺くべからず。有用の學を爲して、此無用の徒に交るべからざる也。

梧窓漫筆 卷上終

梧窓漫筆 卷下

一人々頭かしらに戴いたきたる、天と云ふものあり。天子は、天下を能く治め給ふ。これ天より命いのちぜられたる處なり。諸侯しよこうは、一國いこくを能く治めたまふ。これ天より命ぜられたる處なり。卿大夫けいたいふ、士しは、上は君を輔佐ほさし、下は三民を撫育ぶいくす。是天より命ぜられし處なり。農工商賈こうしやうこの三民も、其各おのの家業かげふを務つとむる、是天なり。此理このりを知れば、左傳さでんの邾文公ちのぶんこうを知命をと云いしも、明白ぶんぱく分曉ぶんけうなり。さて醫者いしやは、其業けふに精明せいめいにして、世人せじんの病患びやうくわんを能く治むる、是天也。儒者じゆしやは、何を以て天命てんめいとするや、學がくを講かうじ、道を明にし、天下の人の惑まごひを解ときて、天下の惡を戒いましめ破やぶり、天下の善ぜんを勸すすめ導みちびく事、是天より命ぜらるゝ處にして、頭に戴いたきたる天なり。されば、善を勸め惡を懲こらして、天下の久安長治きうあんちやうちを助たすくこと不能たすして、詩酒沈湎ししゆちんめん華奢風流わしやふうりうに陷おちて、人の家にては滅亡めつはうの助たすけなり、國天下にては、亂亡らんぱうの助たすけなる者は、儒者の名なを冒をかして、天道人道てんどうじんどうを亂みだる、國家の大蠹たいそ賊そくなり。聖世せいせいの戮りくを免まぬれ難がたし。

精明—精通
すること

沈湎—酒に
溺るゝなり

伊尹周公
伊尹は湯を
佐け周公は
武王成王を
佐けて天下
を治めし人
扁鵲倉公
共に支那古
代の名醫な

一醫者の病を治すると云ふこと、人々皆知る。儒者の病を治すると云ふことは、世人こ
れを解せず。一醫者は身體の病を治するのみ、外科なり。儒者は心の病を治す、内科な
り。心の本體は混然たる至善、道の本源、徳の區域なり。然るに、心に百病ありて
其因は唯一なり。一とは何ぞ、一欲なり。是吉益爲則が云へる、萬病一毒なり。欲の一
毒、種々の名相を變て、四百四病とはなれり。喜怒哀樂も欲の變相なり。欲を得れば、
喜び樂み、欲を失へば、怒り哀む。されば喜怒哀樂の類は、五勞七傷の内傷なり。
淫聲美色鮮衣珍食の類は、風寒暑濕の外傷なり。是を能く治め、人情を正し、人倫
を得せしむる、是儒者治療の効なり。内は己が病を治し。外天下の病を治す。是儒者
の職なり。伊尹周公は、扁鵲倉公なり。天下を治むと云ふも、法令制度も、實は天下
の人心を治むる也。天下亂ると云ふも、天下人心の亂れて、父を弑し君を弑するに至
るなり。然るに、今の世の學者は、人の病を治せざるのみか、人に淫蕩の病、華奢の
病を生ぜしめて、身家を亡ぼすに至らしむるは、醫の疾を治する事能はずして、人の
命期を促す者と、一同の戮民なり。
一天地の間に文字ある故は、事を記して後の世の勸戒となる爲のみ。されば詩歌の類ま

彫蟲篆刻
俗にいふ小
刀細工つま
らぬ技にい
ふ

鴟梟
鴟梟一ふく
るふ惡鳥な
り

でも、人の淫志を遏め、人の善心を導くこと、これ其用とする處なり。然るに、今
の世の詩と云ふ物は、楊雄の所謂、彫蟲篆刻の類にて、人の性情を正しうするの用
を爲しがたし。碁將棋などの間を消すると、同格の用なり、其能く成得たるも、人の
目を悦ばしむると、人の一笑を博するには不過、書畫と類を同うせり。然るに此流
の詩人、儒者と列を同うして、世には是を儒者なりと思へり。此類近年最も多し。初め
は明の李王七才子を悦べり。今は宋の范陸四大家を悦ぶ。其體は殊なれども、其無用
たるは一なり。さて其徒は茶酒遊蕩を事業となし。書畫器玩を玩弄し、貴游子弟、豪
富の少年を鉤引して、風流淫靡に趣かしむ。此が爲に身を破り家を亡ふ者、少からず。
故に世の篤實儉朴の人は、今の儒生を惡む事、博徒幫間などに同うす、儒者の不幸
なる此より大なるは無し。儒者なる者、今日の詩人ならんや。鴟梟を以て鳳凰となし、
鳳凰惡聲の鳥と云ふ、然るや然らざるや。
一今世の詩は、遙に俳諧には劣れり。

富貴より其身は卑き牡丹かな
此句を見よ。富而無驕。降挹退托の意言外に見はる。

何とせん身は風なりの柳かな

此句を見よ。柔順不爭。又不凝滯。物能與世推移。の意言外に見はる。

澁柿の靜に秋を送りけり

此句を見よ。莊子の無用の用。樸社の樹。其天年を全うする意。言外に見はる、今の詩人此見解ありや否。

一 李笠翁金聖嘆の惡行は、蕞鄉贅筆に詳なり。聖嘆の腰斬せらるゝ事は、秋坪新語

李笠翁金聖嘆
—共に清
の小説家な
り

に見えたり。學者此二家の書は、几案の前に近づけざるのみならず、門戸の内に入るべからず。

腰斬—腰か
ら斷ちきる

一 古今の相業。西京には、宣帝の魏相丙吉、東京には、袁安楊震、唐には、貞觀の房玄

刑

齡杜如晦魏徵、開元の姚崇宋璟張九齡、德宗の陸贄、憲宗の裴度、宋には、李沆、王

相業—宰相
としての事

曾、韓琦、范仲淹なり。明には、三楊一李をなど云ふとも、揚士奇の惡子を愛し、李

賢の賄賂を通ずるの類、名相とは云難し。唯孝宗の劉健、謝遷、相業頗る高し。

子房—張良
の字

一 漢には、張良、唐には李泌、明には劉基、同様の人物なり。されども子房を最も高し

とす。功業は小なれども、三代已下の人物は孔明を最第一とす。

一 古今人物の輩出せるは、春秋と、後漢の時なり。司馬溫公も後漢人物の多きを稱嘆せ

晦庵—姓は
朱、朱子の
ことだ

り。されども名賢の多きは、北宋を以て第一とす。晦庵の名臣言行録に載する處を見

鐵中錚々

て可_レ知。只言行録遺漏多し。北宋諸家の隨筆類を以て之を補はゞ、其全を得べし。

中倭々—錚

一 晋は羊祜の高徳、謝安の鎮靜一代の人物なり。南北朝には、一人の漢宋の人に比似す

は金聲なり

る人も無し。魏にては、高允の忠實、宋には、袁粲の見危致命の類、鐵中の錚々、

鐵倭中にて

備中の倭々なる者と云ふべし。實に濁亂の世界なり。

剛利なるも

一 宋齊の時、人主も令終少なし。其臣は宋文の謝晦傅亮徐羨之、檀道濟を枉害せしより、

のをいふ

宰相も大將も、多く族誅せらる。殺運、天地に充塞して、人々生を全うする事不能。

倭は好なり

我足利氏の中世より、元龜天正の時に至ると、同じ理なり。是れ天地の劫運殺氣、兩

備は凡備な

間に充塞して、人の免るゝ事を得ざる也。

り凡備中に

一 我邦にて、大織冠、天滿宮の相業も、記載詳ならず。小野宮の右大臣は、壽八十二、

て勝れたる

五朝に歴仕して、善き人には見ゆれども、是も詳なること知りがたし。藤原保則一人

をいふ

の事のみ、記載詳なり。されども、是は大員にも非ず。中古以來大賢と稱すべきは、

悉く誅せら

小松の内府に、北條泰時楠正成の三人而已なり。

る

大織冠—藤

原鎌足
小野宮の右
大臣—藤原
實資
疎濶—關係
少きこと
天地蓋載の
德—天地が
萬物すべて
を慈む徳を
いふ

一越前に幸若太夫と云者あり。今年初て其曲を聞きたるに、猿樂とは違ひ、極て不調子にて、今の世の人情には疎濶甚しきものなり。されども上より大祿を賜はりて、一族皆土著せり。予此を聞て天下泰平の故を悟りたり。如此不用の者にも、先祖以來の祿を賜ひて、一粒も減じ給はず、天下に如此不用の費夥しく有るべけれども、其まに措置かるよこと、是天地蓋載の徳と少しも違ふこと無し。如此の御大徳なる故、御世繁榮して、天下は久安長治なり。收斂刻薄の吏などの知る所には非ざる也。

一近世の學者は、初に史記を讀んで、戰國の山師共を見覺る故、先づ是にて豪傑氣象を生じて、自分の良心を失ひ、次に世説を讀て、魏晉の放蕩者共を見覺る故、是にて曠達の氣象を生じて、天分の良心掃地滅盡す。さて、これより學問益博にして字面を知り、故事を記し、吾は博識なりと、高慢の氣日々に長じ、世人を見て俗物となし、義理にも通ぜざる詩文を書き散らして、予は才子なり、予は博物なりなどと、倨傲不遜の惡心惡行のみ増長す。顔之推の家訓に戒めたること、今の世顔前に多く湧き出づ。予故に、今の學問にては、百卷讀ば、百卷だけ道に遠く、千卷讀めば、千卷だけ道に遠くなるよと、云ふことはこれなり。無學の人の貴きには非れども、學者の如く、

蒙を發する
—發はひら
くと讀む上
に蔽へるも
のを取去る
をいふ
途轍—轍は
車轍、たど
る道をいふ
狂簡—志大
にして事に
疎畧なるこ
と
狷介—高潔
を尙び人を
容るゝ量な
きをいふ

天分の良心を斷滅せざる故に、却て事に觸れて、良心發見の妙あり。學者は良心掃地せる故、天地の理にも暗く人道の理にも暗く、昧然たる昏愚の人なり。聖人の經言も其蒙を發すること不能、其迷復を復すること不能が故に、近來大博識と云へる人の行狀非人と同類なるにて、予言の偽らざるを知るべし。況んや其下なる者をや。此後の學者は、途轍を改て聖道を志すべし。さて、此まで惡學に染みたる者も、其本心に復すべし。

一學者は、愴慨激烈の氣象も無くては、事變に臨て無用なり。故に是れも有りたきことなれども、初より此に志あれば、血氣粗豪の氣のみ増長し、聖人溫良恭讓柔順の妙を得ること不能。或は狂簡の似せ者となり、或は狷介の似せ者となり、或は曠蕩の流となり、或は疎暴の人となり、要聖賢の道に入ること能はず。先づ氣象らしき事は惡行なりと心得て、君子長者の風を倣ふべし。

一文文山の云ふ。讀聖賢書。所學何事と、學者は、念々此語を以て、己に問ふべし。久しうして得る所あるべし。

一學者徹上徹下の病は、高慢の二字にあり。此心よりして親兄をも慢り、主人をも慢

文文山—宋末の忠臣文天祥

賈を買て球を返す—書を讀むも聖人の行を學ばず、文字のみを知りしにたとへたるなり
忍人—残忍なる人

り、長上をも慢り、世人をも慢り、多少の悪行皆是よりして生ず。果ては、世を渡る
こと成り難くして、天を怨み、人を咎むるに至る。不知や、己が學ぶ處は、文字の
みなり。其學積累の極に至るとき、書庫書厨なり。聖人の苦口して教戒なし給へる、
道徳には天地懸隔せり。看よく、論語の第一篇には何と有るや。曰、夫子、溫良
恭儉讓と、周易の坤の卦には、柔順利貞。君子所行と。謙の一謙四益迄、孰か今
の學者の反對に非ざるや。されば學者は、恭儉柔順を以て身を守るの本となすべし。
此の一事にても、己が學ぶ處は、賈を買て球を返したる事を悟るべし。

一放蕩亡頼の者は、多くは輕薄の少年なり、取るに足らず。さて世の中に堅固なる人と
云ふあり。刻薄残忍なる人にて、其薄情不實遠く放蕩なる者の下に出づ。大抵世の奸
佞邪智、人を讒訴する類の悪人は、堅き人にあり。堅く見ゆる人は、一體忍人なり、
油斷すべからず。王侯貴人などは、此一流の人の欺を昭ふこと必定なり。予は幼少
より四十年間、世間を漂泊せる故、人を知るの明智は無れども、善惡邪正は畧知りた
り。唯人は、溫和溫柔にて、堅き人にも非ず、放曠なる人にも非ざる人、敦篤にて實
情あるもの也。君子長者は、當に此一流の人より出づべし。

文帝武帝—前漢の皇帝
周亞夫—前漢の名將
霍光—前漢の名相
昭宣—昭帝宣帝
則天—則天武后なり
太宗—唐の太宗皇帝

神宗の王安石の欺を昭ひしも、堅く見ゆる處より誤られて、宗社の禍を生じたる
なり。

一曹操多智なれども、幕内に其子孫を亡す司馬仲達三馬一槽に食むの夢をなせり。仲達
多智なれ共、其國を亡ほす賈充の女、妬婦の腹に生せり。智力防慮の用を爲すして、
天に勝つ事能はざるを知るべし。文帝の陰德盡きざれば、吳楚七國を制する周亞夫を
生じ、武帝無道なれども天より霍光を生じて昭宣を立て、福祚綿延す。太宗陰德盡
ざれば、則天を諫むる狄仁傑を生じ、二張を誅する五王を生じ、韋庶人を滅す劉幽求
を生じ、立宗無道なれども、天より郭子儀、李光弼を生じて、天下中興す。一國一家
に取ても亦同じ。子孫綿連せんとは、智力の及ぶことにあらず。唯陰德陰功を積む
より外に爲すべきの術無し。陰德陰功は、慈愍の心にて人を惠み人を救ふより大なる
は無きこと也。是にて袁了凡が陰陽の學の、天地に功あることを知るべし。若し此理
を知らざれば、子孫は永代橋より墜て溺死すること分明なり。
一信長の残忍を見よ。甲斐の惠林寺にては、多く僧俗を焼きころし、荒木攝津が叛せる
を怒て、其人質の二百八十人を誅し、尼ヶ崎に籠りし、荒木が家老に見せんとて、其

黨を磔木に升せ、篋笠を著せて火にて焼殺す。苦くて身を動すを上總躍となづけたり。義景長政父子三人の鬪體を金だみとして元旦の祝儀に出したり。虎狼の、人に化したる者なり。

淫肆一女色を好むこと甚しきないふ

本領を安堵せしむ一領地を其儘に與ふること

東照神君一徳川家康

一秀吉の淫肆を見よ。信長の妹小谷の方を奪ふの心あり。信長の女氏郷の後室をも奪ふの心あり。(會津より上洛せざるを怒て、秀行を宇都宮へ封を移せり) 信長の姪小谷の方の女淀殿を妾として夫が腹に秀頼を生みたり。皆小人の上淫を好むの心なり。高野山を焼亡さんと謀りしに、木食興山に感じて此を赦し、薩摩の父子剃髮降参せしにて、三州の本領を安堵せしめ、正宗の磔木を持たせて上りしに感じて、米澤の本領を安堵せしむるの類、大度寛容の處は、信長とは格別なり。されども秀次の妻子を枉害し、朝鮮にて、晋州城中の六萬人を屠戮せしの類、殘忍ならざるに非ず。我東照神君の御行狀を見るべし。御一生、戰場にて人を殺さるれ共一人を枉害せられたる事無し。漢祖唐宗などの企て及ぶべきに非ず。古の聖人を除いて、誰か御徳義に比並する者あらんや。一烈祖成績に、我邦に武將ありてより以來、學を好み書を嗜み給ひしこと、東照神君の

如くなること無しと云へり。されば御當代天下を知し召て、學術大に闢け、學問文章遠く前代に勝ること、實は神徳の餘光の及ぶ處なり。讀書の人は、先づ此義を知らずんば有べからず。

一天には言なし。故に孔子は天何言哉。とのたまひ、孟子も天不言と宣へり。されども、能々考れば天に言あり。聖人の言は天言なり。凡夫の言とても、靈竅の自然より出で、毫釐の人欲に涉らざるは、即ち天言なり。況んや聖人の言は、天理の自然より従ふなり。身安くして家國全くし。聖言に違へば即天道に違ふなり。身亡びて國家亂る。大易の六十四卦三百八十四爻等、孰れか天言に非ざらん。吾不知。文王周公の言なりや。蒼々冥々の中、無聲無臭。不可測知のもの言なりや。孔子の宣ふ。君子畏聖人之言。小人侮聖人之言。と。天命を畏敬することを知る者、聖言を畏敬することを知らずして可ならんや。一周公曰、嗚呼厥亦惟我周太王王季。克自抑畏。と。周公二王の明德を説て、成王に教訓し給ふには、可説可語ことも多かるべきに、僅々たる抑畏の二字を以て、二代の

餘蔭—おかげといふ意

滔天—滔は漫なり天をあなどり畏れざるをいふ

明德を説き盡し給へる事、無量の妙義なり。又無窮の奥旨なり、我は王公なり、我は富貴なり、我は厚祿なり、我は顯官なり。甚しきは父祖の餘蔭を假りて、是程の驕慢は有るべし、是れ程の奢侈は爲すべし、是程の榮耀は有るべきこと也など、自ら滿ち高ぶるの一念是れ既に上天の冥鑒に倍き、又人道の正理を失なふ。三代末主の肆虐も、後世亡國の君の修暴も、皆滿ち亢ぶるの一念の増長して、滔天に至りし者なり。人臣庶民とても同じことなり。伉り滿る人欲を抑へ制すれば、恭となり、謙となり、儉約となる。皆聖人の明德なり。されば人欲の横流を抑へて、天命を畏れ、人心を畏る。(天命の從違なり、民心の叛服なり)此抑畏の二字にて、國天下を有つ人は、國天下を太平にすべく、身家を守る者は、身家を安穩ならしむべし。聖言の至妙なる、是れ上天の宣へるには非ずや。

學者の我は雄才博學なりと思ひて、滿假の心を生ずる者は、富貴の人の驕奢よりも、其罪最も甚だし。大雅に、抑々威儀は。是徳之隅也。抑の字を以て、容貌の恭を教へ給へり。容貌言語行事、孰れの所にか抑の字を用ひざらんや。周易大壯の六五に、喪羊于易无悔とあり。又旅の上九に、喪牛于易凶とあり。易

疆場—さかひをいふ疆は大界場は小界なり

相家—人相見

孩提の幼兒—二三歳の幼兒孩は小兒の初めて笑を解するをいふ提は提げ又は抱くなり

の字を和易樂易などと解たれど、羊にては通すべく、牛にては通じ難し。故に朱晦庵は輕易容易と解したれども、是も通ぜず。漢書食貨志に、疆場の場を易に作りたるを見出して疆易なりと云ふことまでは、晦庵も知られたり。感賞すべし。されども其義理は知られず。(程傳、旅上九には、輕易とす)是れ易道の妙義なり。易は疆場にて、彼我田畝の界なり。されば彼我相對する處、是れ易なり。羊は狼戾觸冒の獸なり。人と相對する處にて、狼戾觸冒の氣を失へば、必ず恭順の貌を生ず。是れ是悔を亡ふ所なり。牛は柔順の獸なり。人と相對する所にて、柔順の氣を失へば、剛愎凌犯の態を生ず。是れ大凶の道なり。さて、王侯貴人の威嚴を以て、下を御する者は、各別の事なり。世に人に對すると、言語を接へざる以前に、莞爾として微笑する者あり。是も喪羊不喪牛の類なり。相家の説を聞たるに、人の顔面を見ると微笑を發する人は、少年發達の相なりと教へたり。孩提の幼兒の人の面を見知る時は必ず微笑を發して相愛するの相あり。是れ人と人と相愛する本心仁愛の發見なり。是れ天性の良知良能なり。終身これを失はざるも、大人不失赤子之心の一端ならずや。一布帛の端物は方幅なり。されど方幅のまよにて衣裳となるべきや。斜に裁ち、筋違に

布帛—綿布の類

炫賣—公然と賣ること

慎獨—人の見聞せざる所にてても畏れ慎しむをいふ
不愧于屋漏

剪りて、初めて衣裳の用を爲すなり。されば世間の萬事も方正なる義理のみにては通じ難し。一天下の上にてても、一身の上にてても、斜なること筋違なる事有て、始めて安穩無事なり。先づ其一段を知らんとには、女は貞潔をのみ人道の正と爲す者なり。然るに色情を炫賣する遊女と云ふもの天地の間に有ては、人道の正は無き事なり。されども今日の時勢にては、是も無くては治平の大害なり。是筋違の最なる者にて又治平の道具なり。此一つを以て其餘は推て知るべし。此理を悟れば斜に行き、横に行くも、仁道的一端ならざる事なし。夫を大道に暗き學者は、唯義理の正直なる事のみを道と心得て、世間の人情に疎濶なるは、無用の學なり。道德の中にも、方正と廉潔は似せ物の多く有つて、さて質物に非ざるも、多く世道の害となる者なり。心得の有るべき事也。

一大學中庸の慎獨の説は、皆大雅に出たり。不顯亦臨。無射亦保(思齊)と云ひ。相在爾室。尙不愧于屋漏。無日不顯。莫予云觀。神之格思。不可度思。矧可射思。(抑)と云。昊天曰明。及爾出王。昊天曰旦。及爾游衍(板)と云。皆戒慎乎其所以。恐懼乎其所以。不聞。慎獨の説なり。されば此誠意の工夫從上の聖賢相傳の學術

—屋漏は室の西北隅なり人なきも獨を慎みて鬼神に愧ぢざるをいふ

捷徑—ちかみち

浮圖—佛なり

なり。屋漏の二句は、中庸に既に引き給へり。凡夫の闇を欺て惡を爲す故に、心行一ならず、明暗(陰陽とも云)同じからず。天地の戮民とは成り行くなり。惡を惡むこと如惡惡臭、善を好むこと如好好色にして明處如此。闇所も亦如此なれば、即ち是誠意なり。即ち是慎獨なり。是れ聖地位に至るの捷徑なり。故に、大學中庸此を以て學者に示し給ふ。されど此境界には至り難し。強て爲んとは、操持迫切に過ぎて、宋人の持敬に近く、世間の萬事を放下して、唯靜坐澄心の工夫に走る様に成べし。左すれば聖路を踏違て、魔道に墮落し、無用の學とはなるべき也。

一聖人の心學は、大雅に是れあり。帝謂文王無然畔援。無然歆羨。誕先登于岸。畔とは上に倍く也。援とは上に諛ふ也。心の聲色に動くは是れ歆なり。(貪欲と訓す)心の富貴利達を慕ふは、是れ羨なり。(愛慕と訓す)人此四者を絶すれば、優に聖域に入る。登岸とは凡夫の境界を離れて、彼の聖人の域に躋るなり。浮圖吾が聖經の此語を襲て、到彼岸と云ふなり。文王の聖德を贊せる如此。さて此畔援の二字、中庸に解釋せり。在上位不陵下。在下位不援上。援の字是と同じ。援とは攀援して上らんと欲するを云ふ。下位に在れば、勢威ある人に阿諛諂媚して身を立ん位を

陳張—陳平
張良
關張—關羽
張飛
蘇張—蘇秦
張儀

王綱紐を解く—天子の

進んと貪欲する者、是れ援なり。是れ世間人情の恒事なり。中庸又云。居上不驕爲下不倍と、此倍の字即ち畔なり。此は世間の人、世に用ひられざる者は、必ず上を恨み世を恨み、朝政を非議し、君徳を非謗し、背叛の心を抱く者なり。學者武人など此病最も深し。果ては世の亂を希て、天下亂れば吾は陳張たらん、吾は關張たらん、吾は蘇張たらんなど云て、治りし世を恨みたる、後藤兵衛に略似たり。太平の恩澤を忘れて世の亂を希ふの一念、天地の冥鑒に背くが故、如此の人は、益々困窮して、世に身を立つること難し。畏るべきの甚しきなり。さて、聖人の明智、人情の如此ことを知り給ふゆる、爲下不倍と宣ひしは、誠に人情をさすの御子とも云ふべき歟。一世に王室家と云ふ學者あり。此は聖人の道徳を知らずして、制度のみを道とて悦ぶ心より、昔の王朝の官職冠服などを慕て、今の月代上下などを悪くみ、武家の天下を非議するの徒なり。官名冠服は典雅なりとも、何ぞ治亂の事に益あるべき。月代上下にては世は亂れ、烏帽子冠にて世は治るべくは、如何にも我も降參して王室家ともなるべけれど、其冠烏帽子を著けたる世には、將門純友の逆亂あり、宗任貞任前九年、武衛家衡の後三年、果ては兄弟王位を争ふ、保元の亂、源平武威を争ふ、平

大權弛びたるをいふ

幽厲—幽王
厲王
堯冕云々—
帝王の正裝

凱安—安んじ樂む

治の亂等にて、王綱は紐を解て、四百年あまり兵亂の世界とは成りたり。是にて凡そ官名冠服の治亂の用を爲さざる事を悟るべし。醫者の吾は仲景流の桂枝湯、麻黃湯なりと云て、律派なる様なれども病癒えざれば下手醫者なり。參蘇飲、不換金なりとも、病癒れば名醫なり。冠服官名の典雅を悦ぶは、仲景流の下手醫者に同じ。桀紂幽厲は堯冕十二章を著たれど、無德故天下を滅せり。後世開國の君は紗帽黃袍にても有德故天下を興し、子孫數百年天下を有てり。漢唐宋明の冠服官職凡百の制度、三代の制度に同じからず。されど天位を履て天下を領するは同じ。今の清朝は辮髮胡服の夷俗なれども、二百年天下を平治するの功德、漢唐宋明にも超絶せり。可見制度の典雅を悦ぶは、拘儒愚陋の至りなり。聖人は、人倫之至也。君を尊び親を愛する仁義の道さへ昭明ならんには、聖人の道、聖人の徳は、萬代に消滅すること無し。冠服の雅俗、職司の古今などは論ずるには足らざるなり。能々聖人の心を知るべし。聖人の心は、唯天下の人の彝倫を違へずして、天下凱安に、四民豊饒にして、各其所を得せしむるに在る而已なり。如何なる制度にても、如何なる法令にても、世治り民安ければ、其即ち堯舜の道、堯舜の治なり。是を堯舜の世と云ふなり。今の太平無事の恩澤を知ら

さみする一
あしごまに
いふ

衣冠の人一
朝廷に仕ふ
る人
文武一
文王
武王

成康一
成王
康王

西方の大眞
人一
基督を
指せるなら
ん
殛死一
殛は
殺すなり
不肖子一
ば
かむすこ
嫡子一
太子
建成
三男一
齊王
元吉

ずして、遠く昔を慕ふは、學者の物好と云ふものにて、茶人の古物好と同じ事なり。

中庸に生乎今之世、反古之道。如此者、裁及其身者也。と云ひ、荀子、舍後

王而道上古、譬之。是猶舍己之君而事人之君也。と云ふ。今の王室家は、

子思荀子の戒め給ひたるに符合せり。裁を受くべきの學術なり。

和歌を好む人も、延喜天曆の古を慕ひて、武家をさみするの氣習あり。勿體なきこ

と也。吾子孫は、和歌を學ぶとも、假にも此等の氣習を抱くこと無かるべし。

一周易、履の六三に、武人爲干大君、干は凌犯なり。漢の董卓、唐の李克用、韓建、

李茂貞、朱全忠等の事に的當なり。我邦にては清盛義仲等に的當なり。豫の六五に、

貞疾恒不死。とあるは、東遷の周室、我邦中古以來の王室に的當なり。されば、天

地に此事理あることも、聖人は既に知り給へり。

一昔王朝の盛なる時、帝王二十七代、三百四十餘年、衣冠の人を刑殺せず。(保元物語)

仁厚の政、漢唐宋明の企て及ぶべき處に非ず。今又徳川家天下を知召てより、二百年、

干戈兵亂の患なし。是れも亦三代聖人の治も及ぶべき事に非ず。周の文武は大聖人に

て、成康は大賢人なり。成康の二代は、刑措不用こと、四十餘年と史記に見えたれど

も、五代目の昭王は、膠付の舟に乗せられて、新田義興と同じ死を致さる。左傳に

所謂、昭王南征不還と云ふ、此事なり。されば我邦は郡縣にても、漢土よりは能く

治まり、封建にても、漢土より能く治まる國風なり。是れ第一に人情風俗の純朴忠厚

なる故なり。

一西方の大眞人の言に、天地闕欠の世界と説けりと承はる。是れは人欲の無量なるを

悟りて、此言をなせり。誠に大智者の言なり。秦皇漢武などの帝位を踐で、別に願望

の無ければ、長生不死を願ふに至る。都て天地間の人、己が心に充滿と云ふ事は無き

事なり。是れ即ち闕欠なり。さて、又此言、人欲無量の上に就て説き出せるのみに非

ず。實に古今の人、闕欠ならざるは無し。堯舜の大福大徳にも、丹朱商均の惡子を生

じ、禹子賢なれども其父は殛死を免れず。湯は嫡子大丁早世なり。孔夫子無憂と嘆

賞なし給へる、文王も、管叔蔡叔霍叔の三不肖子を生じ給ふ。後世にては、漢祖は

其寵愛せる戚夫人趙王如意の死を救ふことすら得ず。唐の高祖は、次男の爲に嫡子三

男を害せられ、太宗は、其太子を殺し、宋の太祖は、弟の爲に我子を害せられ、明祖

は、太子は早世し、其子の爲に嫡孫を害せらる。我邦にて頼朝は、親兄は平家の爲に

害せられ、己弟の範頼義經を殺し、二人の子、頼家實朝公曉まで、父子兄弟相害して家亡び、尊氏は、嫡子を北條に殺され、己は弟の直義を毒殺し、我子の直冬には叛かれ、次男の基氏は兄の義詮に忌まれて自害せり。匹夫より天下を有つ太福の人々すら皆闕欠なり。まして凡下の人、誰か闕欠ならざらん。然るを愚なる人は、己が福の十分ならざるを恚る、笑ふべきの甚しき也。闕欠の世界に生れて、誰か如意圓滿なるべきや。唯々仁義忠孝の正道を踏違へずして、人倫の正を亡失せざる處に心を居るて、福分の充足を願ひ、西方の大真人に晒はれざる様にすべきこと也。さて、世界闕欠の一語にても、大真人の大智を悟るべきこと也。

一奢侈の心にて、一身も天下國家も滅亡す。儉節の心にて一身より天下國家も安存す。人の天地の間に生れて、第一に貴重なる者は、我が生命なり。生命なければ、仁義忠孝もなり難く、文章功業も建がたし。次には金銀財寶なり。人は飲食衣服宮室器用を以て、生命を養ふ。然るに、財寶なければ飲食衣服も得がたし、宮室器用も成し難し。されば、財寶なければ凍餒して生命忽ちに斷絶す。されど夫迄には至らずとも、人貧困なれば、忠孝にも事を欠き、仁義の心ありとも人の患難危急を救ふ事もなり難く、

聚斂苛察一
聚斂は税を
多く取りた
てること苛
察はやかま
しく吟味す
ること

人に對して心ならず不義理の生じて善人と爲り難し。夫のみには非ず。人々悪心を生じ、悪事を作して、悪人と呼ばれ、刑網に觸るとに至るも、其本は財寶の乏しきに出づるなり。さて、此事を一身の事と思ふは愚昧の至り也。天下國家の政事に僻事の出づるも、其本は奢侈よりして困窮を生じ、困窮より聚斂苛察、種々の悪政起りて、仁義の正道も破れ、遂には亂亡に至る。されば金銀財寶は一身の命脈なり。又天下の命脈なり。天下と一身一家と但是一理にて少しも違ふことなし。是にて奢侈なれば亂亡し、儉節なれば安存することを悟るべし。我生命の命脈たる金銀財寶を、酒色淫佚の爲に費やし盡すは、是至愚至昧、亂國敗家の不肖者なり。是にて節欲制欲、克己脩身の學、一身を安存するの本、一天下を平治するの源たることを悟るべし。

一世の人、學者天下を治めたりとも、治まるまじきと云ふ事を言習はず、學者は天下を治むる事を學ぶ人なり。大工の家を造作し出すと同じこと也。何とて天下を治むる事を得ざるべきや。されど其源本の理を知らずして、制度文爲などを悦ぶ拘儒、又は詩酒遊佚を好む妄儒など天子たらんには、即ち齊の東昏、陳の後主、隋の煬帝、又は唐の玄宗、宋の徽宗、元の順帝などの再生なるべし。天下を平治には及ばず、即剋に滅

掌を反すよりも輒し一
手のひらを反へすより
もたやすい
非常に易き
ことをいふ

茅茨土階一
堯の堂高き
三尺、土階
三等、茅茨
翦らずと墨

子に見ゆ宮
殿の極めて
粗末なるを
いふ
無告一告げ
訴ふる者な
き窮民をい
ふ
鰥寡孤獨一
老て妻なき
を鰥といひ
老て夫なき
を寡といひ
老て子なき
を獨といひ
幼にして父
無きを孤と
いふ
繼體守文一
繼體は主後

亡すべし。言習はせる言、誤には非ず。さて、其源本の理とは唯一理にて、天下國家を治むる事造作も無きこと也。又反掌、よりも輒きこと也。此を知らんとには、一身一家の上にて悟るべし。勤儉の二字なり。人々己が家業を精勤すれば游惰の事なし。分限に應じて儉約なれば放佚淫靡の事なし。是にて家事は豊饒にて、金銀財寶に乏しからざれば、家内の法式も調ひ、交際の禮數も欠ず。親戚の者、知識の人の患難危急をも救ふべし。仁義禮樂皆成ると云べし。さて、家人の怠惰ならんには、嚴威を以て制すべし。家人の勤勞ならんには、恩愛を以て慰むべし。操縦自由なり。然るに、游惰にして勤に怠り、汰侈淫靡にして儉約を忘れ、家事困窮して金銀に乏き時は、眉の毛に火の付きたる如き火急の難義なり。禮樂處には非ず、仁義をも打棄て、先づ火急の患難を救ふに暇なし。不仁不義種々の姦計種々の悪事を爲しても、其時其時を過さんと謀る。是にて心ならず最下の小人と爲るなり。堯舜禹湯文武の大聖人は、此理を悟り給へるなり。さるが故に堯舜は茅茨土階、禹は衣食非惡、文王は卑服、皆儉素なるが故に、財用匱乏の憂なく、豊饒富足なり。故に天下の人民を恵み救ひ、堯舜は不侮鰥寡、不虐無告とあり。文王は發政施仁、先鰥寡孤獨四者とあり。四の窮

民は今の乞食非人なり、豊なるの餘りには、此四の者をも憐み救ふことに至る。大聖人の天下を治る如し此而已なり。然るに、繼體守文の君よりして、上の奢侈日々に增長して、其事國法と爲て變更なり難く、段々と困窮し、段々と衰微して、滅亡に至る。一家も一天下も同じ理なり。由今之道、無變今之俗、雖與之天下、不能一朝居也。と孟子の宣るは此事なり。大有爲の君の天得に此理を辨じ給へる人出ざれば、國運は漸々に傾敗に至る。まして其内に汰侈暴虐、又は暗弱愚昧の君出づれば、一端に滅亡する者なり。國法を變改せずして、儉約質朴にすべきことは、人君の心にて如何様にもなるべきこと也。
一後世守文の世に在て、儉約質朴云々の事を人君に説けば、酒色淫靡を好まるよ心に犯觸して、其説行はるよには及ばずして、其説者罪を蒙る故に、奢侈は其まよに指置て、別に姦術權謀を行ひ、聚斂培克の政にて、人君の淫靡を救ふ。是れ漢の桑弘羊、唐の王珙宇文融等が、金ため經濟なり。是れ一身一家の火急の匱窮を救ふと同じ理なり。實は、人君邪欲の焰に添新して、以の外の悪事なり。如此の政段々に增長すれば、四民窮して天下滅亡す。堯舜禹の四海困窮天祿永終とは此事なり。此理さへ分曉なれ

をいふ守文は繼承の君始祖が武を以て興りしを文を以て守る意なり
犯觸―逆らふ
桑弘羊、字文融―前に見ゆ
天祿―天の賜ふ福
輿人―衆人天得の性―天性といふに同じ

ば、天下を平治、何の難きこと有んや。大聖人の方々孔夫子の儉は、經書に在れば知るべし。左傳にて、衛文公を中興の君と云へば、大帛之冠。大布之衣とあり。晋悼公を中興の霸と云へば、車服從給。器用不作とあり。鄭子産の政を執れば、輿人誦之曰。取我衣冠而褚之。杜註に奢侈者畏法故畜藏すとあり。漢祖は豁達大度の人なれど、蕭何の未央宮を壯麗に作りしを怒らるれば、開國創業の人の天得の性、儉ならざること無し。文帝の身衣弋絺。所幸慎夫人衣不曳地とあり。此儉朴にて刑措の仁政を成せり。明德馬皇后は、後世に唐の長孫皇后と唯二人の賢皇后なり。衣大練とあり。曹操も天性儉節とあり。劉裕は葛燈籠。麻拂子貧賤の時、荻を刈たる襪褸を後世の爲に遺さる。唐太宗も木梳子を子孫の爲に傳へらる。玄宗も初年には、午門にて錦繡を焚き棄てらる。創業中興の君孰れか儉素ならざらん。漢唐宋明の史書を熟讀して吾言を知るべし。天下國家も一身も。儉朴にして興り存し、汰侈して滅亡すと云ふ、吾此言千萬世に涉て違ふことなし。さて此奢侈に其源本あり。欲を肆にすれば奢となり。欲を制すれば儉となる。汰侈淫靡、無量惡行皆是れ欲の變相なり。故に克己。脩己。節欲。制欲を、聖人の學の切要とするは、唯此一字治亂興亡の源

房杜―房玄杜如晦、魏徵と共に

本なれば也。さて天理人欲の學、宋學者の言ひ出せる様に思へるは、以の外の謬なり。孔孟の傳へ給へる處より、漢儒相傳の古學にて、孔安國は仁者靜なりを解しては無欲故靜なりと云ふ。汲黯は武帝へ對して陛下内多欲。而外飾仁義。焉望堯舜之治乎と云へり。不欲は仁聖の學、多欲は亂亡の道たる事、從上の儒者の相傳如此のみ也。桑弘羊宇文融が如き聚斂の臣は論するに不足、唐の劉晏が如き治財の良吏たりとも、王制の量入爲出の四字の外に、別に爲すべきの理も無く、又爲すべきの術も無し。されば治財經世の道は儉にあり、儉の本は制欲なり。上儉素を以て政とすれば、下質朴を以て俗となし、上下豐饒にして、士民安穩なり。聖人の仁政も此を本とす。戴記に儉近於仁とは、此を云ふなり。天下國家豐饒の上にては、凡百の制度文爲禮樂刑政、治を飾るの具は、如何様にも出来ること也。
一身にも天下にも乏して窮する者は金銀なり。儉の一字にて此物に乏からざれば、其の事は自由自在なり。學者の經史を通觀すれば此理明白なる故に、天下を治るは造作も無きことにて、反掌よりも易しと云ふは此理也。されど他人の事にては堯舜孔孟にても爲し難し。魏徵房杜を天子とせば、堯舜文武には及ばずとも、後世の大

唐初の名臣
なり
韓琦范仲淹
—前に見ゆ
寇準—宋の
名臣にして
自ら奉ずる
儉なりし人

東山殿—足
利義政

賢君ならん。韓琦范仲淹にても同じ理なり。程朱は大賢なれども、天子とせば天下の人の明德を一々明にせしめんなど云て、迫切にすぎ、天下騒然として安かるまじ寇準は大英雄なれど、天子とせば至て能く出来たる處にて、漢武帝唐玄宗たるべし。多くは天下を亂敗する君たらん。儒者は天下を治むる道を學ぶ者にして、此理に疎く此事を成し得ざれば、物置小屋をも建て得ざる下手大工と云ふべし。一天下の金銀は、多くは華麗なる事にて散ずる者也。色情これが根本たりと知るべし。さて茶人と云へるもの、舊物古器の見苦しく古びたる物を好で、多く金錢を費すは、奢侈華麗の増長して至極に至れる處より、變じて此に歸する、錦綉を著くる奢もの、乞食非人に墮て、敝れ薦古襤褸をば著るの象なり。不祥の甚だしき事なり。其源は天下を亂されたる、東山殿に起り、其道の達人たる千利休宗易、古田織部正、皆生害を免れず。小堀遠州の後も、吾覺て後其家滅亡せり。其不祥なる事を知るべし。吾は利休の七哲と呼ばれたる人の七世の孫なれば、此道をば如何様にも褒賞せざれば祖先へ對して不孝とも云ふべけれども、此道の王侯貴人の奢侈を誘て、世道の害を爲すこと大方ならざれば、天下の爲に公言して其不祥を惡む。吾子孫たる者は、此道を學ぶべ

迷樓—殿宇
廻廊多くし
て中に入ら
ば途に迷ふ
宮殿
紅女—はた
織を業とす
る女、紅は
功に同じ
好まるれば
—好まざれ
ばの誤か

からざる者なり。
一存亡興廢は、奢侈の二字に在りと云ふことを知りたる學者には教ふべき事あり。奢侈と云へる者、無形の者に非ず。必ず宮室とか、苑囿とか、衣服とか、器玩とか、有形の者に見はれる也。さて其有形の者は、天造の者にあらずして、人工に出づる者なり。人君の奢侈にもせよ、士民の奢侈にもせよ、是を作り出す工人あり、是を交易する商人あり。されど商賈は次の事にして本は工人の作り出せる也。迷樓飛閣を造營するも、奇器淫巧を造作するも、錦繡綾羅を織り出すも、工匠紅女の爲す所なり。工は奢侈の本なり。奢侈は亂亡の本なり。工に法制ありて、華麗奢麗の物を作り出さざれば、如何様に奢りたく思ひたりとも、奢る可き者なし。人君など淫靡奢麗のものを好まるれば、其職司の工人法制を守りて是を作らず。然るを工人の時好を追て淫靡華麗の物を作り出すに從て其上々々と奢侈増長して亂敗に及ぶ也。孟子上無道揆。下無法守。朝不信道。工不信度。君子犯義。小人犯刑。國之所存者幸也。と宣へるは、此ことを説き給へるなり。此章上無道揆。朝不信道。君子犯義と、三句上の事を云ふ。下無法守。工不信度。小人犯刑と、三句下のことを云ふ。工とは、工匠の事にて、

下の悪を説きたまふに、農民をも商賈をも説かずして工と而已説き給へるは、聖智の微妙なる古今治亂の様をさし給へるが如し。是は亂敗は奢侈に生じ、奢侈は、工の造作し出す者と云ふ理を分明に知り給ふ故に、如此に説き給ふ。さて是に根據有りて夏書に工執藝事而諫とあり。是れは偽書の胤征に出たれども、左傳に夏書を引きたれば、純粹の古經の語なり。是れも農とも商とも云はずして、工の諫むと云ひしは、古法制を守て今の淫靡の器を作らざるを云ふ。魯の莊公の桓宮の、桷をきざみ楹を丹せしを、匠慶の諫めしと、魯語に載せたる類なり。孟子の經學に明らかに、古今の治亂をさし給へること如此なるに、朱子の解に、工官也とあり。是れは字義をも辨せず、又此節毎句互應の文法をも辨せず、又此言の古今の治亂を説き給へるにも心付かず疎忽甚しき注解なり。理學々々とは申せども、さてく義理に通ぜざる事なり。此一節にても孔孟の御言は、人事治道に切實なるを、漢宋の註解夢中に説き過ること多しと知るべし。さて又此言を悟らば、金銀の器、瑤瑁の櫛笄の治道に害あるを悟るべきことなり。

一學者少年の英氣に任せ、兵を論ずることを好むもの多き者なり。是れ以の外の事なり。

軍旅之事
戦争の事

趙奢の子
趙括兵法に
熟達せるも
實戦に敗亡
せり

屠城一城を
陥し人を屠
ること

兵を論ずべき者に非ず。先づ孔子さへ軍旅之事。未之學也。と仰られたり。聖人明智の畏るべき所なり。孟子も、善戰者。服上刑。戰必克。古之民賊也、と仰せらる。陸機陸雲の兄弟、才名天下に震へども、族誅を蒙りたるは、兵家の子孫故なりと云ひ傳ふ。畏るべきこと也。さて兵法を暗練したりとも、多くは趙奢の子たることを免るべからず。且此一事興廢存亡の係ること故に、天運によるにや。光武敗散の卒僅に八千にて王尋王邑の八十萬を昆陽にて打敗り、明の四路の兵二十萬を、清祖の僅に四姓數千の兵にて打破りたるの類、其たは周瑜の赤壁、謝玄の淝水、虞允文の采石の戰、皆寡を以て衆を摧く、世人の知る所なり。されば兵を用ふる日に至ては、如何なる者に天運あるべしとも計り難し。百萬の兵たりとも、軍器に長じたりとも、訓練に熟したりとも、天運あるものに敵すれば、一時に崩潰すまじき者に非ず。公羊傳に、戰不_レ正_レ克、と云ひたるは、古今の名語にて、古今の事理に明なる者は、先づ措て論ぜざることを妙とすること也。

一太平の御恩澤に浴して、何も不自由なき天地の間に生れて、榮耀の餘りに、兵亂にも逢ひたしなど思ふ心の人多し。是は兵亂の難義を思はざるが故なり。戰國秦漢より屠

塗炭の苦—
水火の苦し
み

城のこと多けれども、委細に其様を記したる書も無れば、其慘毒酷烈の傷ましきをも心得ざる也。清人王秀楚が楊州十日記、黃淳耀が嘉定屠城記略、などを讀て、其畏るべき様を知るべきこと也。漢土は郡縣故に亂るも早く治るも早し。我邦は封建故、亂ては急に治り難し。彼土の春秋戰國の亂久しきと、我邦足利氏の時、亂の久しきを觀て知るべし。眞人出て四海一なるまでは、英雄豪傑互に出で互に亡びて戰爭止ことなく、人心虎狼の如くにして四民塗炭の苦みを免れ得ず。天道人道否塞して通ぜず。人心ある者の願ふべき事に非ず。唯世の中はいつも太平無事にして仁義忠孝の道の消滅せざることを願ふべき事也。

一兵亂の久しき内には、下人のみ志を得る様になる也。足利氏の亂を見て知るべし。義教は嘉吉元年に赤松滿祐に弑せられ、義政は應仁の亂に細川勝元の陣中に囚虜同然なり。義政は伊勢に走らる。義尙は延徳に六角を征伐せんとて、江州勾里に三年在陣して其地にて没せられ、義植は長享に畠山義豊を征伐せんとて、畠山政長細川政元と河内に出陣して、政元は義豊に一味して、政長を殺し義植を囚ふ。義植中國に出陣して大内を頼み、永正に義興義植を奉じて京師に入り、將軍に再任す。されども數年

義植—義政
子義視の弟
義澄—義政
弟政智の子

の後、義興歸國して義植京師に在住すること能はず、淡路に出奔して、島の公方と稱す。果ては阿波の撫養と云ふ處にて没せらる。義澄は、政元義植を廢して此を擁立すれども、義植の京師に復歸せる時に、近江に出奔して岡山と云ふ處にて没せらる。義植路に奔て京師に將軍なき故、大永元年に義澄の次男義晴を播磨より召し上せて此を立つ。されども此も京師に在住なり難く、近江の朽木が谷へ出奔して、多年此に蟄居し、果ては近江の穴生の山中にして没せらる。義輝は、永祿に三好松永に弑せられ、義昭は永祿に信長に立てられ、天正に信長に逐はれて足利氏亡びたり。足利氏の初、斯波細川畠山を三管領と稱して、天下の權を掌どれり。斯波は千世徳丸早世して嫡統斷絶し、庶流家督を争て其家衰ふ。畠山も徳本姪の政長を養子とせるに、義就出生して長祿の家督争より、天下の大亂を生じたり。細川のみ權威盛にして勝元婦翁の山名宗全と威勢を争て應仁の大亂を生じ、政元長享に義植を廢して義澄立つ。政元だきに天を信して一生不犯にして子なし。香西又六とか云へる小姓に弑せられて、細川の嫡流此にて斷絶し、此より庶流の澄元高國の家督争にて、細川衰へ、此亂足利氏の亡ぶるまで止むことなし。細川兩家の争より其臣三好(阿波の小笠原)數々京師へ攻

陪臣執國命
—またげら
いが國の政
令を司るこ
と
左驗—證據

め登りて是も三世數人皆戰死也。四世長慶に至て天下の權を掌る。長慶老て其臣松
永彈正忠久秀又天下の權を專にし、長慶の嫡子を毒殺し、將軍義輝をも弑するに至
る。論語の禮樂征伐自天子出。自諸侯出。自大夫出。陪臣執國命。祿去公室。
政及大夫、と仰せられたること。彼土は、秦漢以來郡縣ゆる其言驗なし。我邦は、
足利の時代より封建の形ゆる聖語一々符合せり。聖語の神妙千歲に涉て左驗あること
を知るべし。又變亂の久しき内には、其下其下の人。段々と志を得ることを悟るべし。
さて又細川の臣に三好あり、畠山の臣に游佐あり、斯波の臣に朝倉織田あり、赤松の
臣に浦上浮田あり、大内の臣に陶あり、上杉の臣に長尾あり、土岐の臣に齋藤あり、
京極の臣に淺井あり、小貳は龍造寺となり、龍造寺は鍋島となり、千葉に原、原に高
城などと、永正、大永、天文、永祿、元龜、天正に至て、天下の兵亂極て其起る者
共、多くは陪臣なり。三家の晋を分ち、陳氏の齊を奪ひたると同じ事なり。是れも兵
亂の世の自然の理なりと見えたり。
一足利季世の兵亂は、細川山名の應仁の爭戰は勿論なり。長享の義植義澄の廢立、長祿
の畠山政長義就の家督の爭、此を本とすれども、實は細川の澄元高國の家督の爭より

戎馬—兵馬
に同じ
禪秀—上杉
氏憲

龍逢比干—
龍逢は桀王
の臣、比干
は紂王の
臣、共に直
諫して殺さ
る

三好の爲に數十年京師をば戎馬の區とはなせる也。關東は應永の禪秀が亂より永享に
持氏亡び、嘉吉の結城合戦は勿論なり。成氏上杉憲實を父の寇として、其子憲忠
を殺せるより、鎌倉の公方、兩上杉と爭戰となり、長享には兩上杉矛盾を爲し、遂に
小田原北條の爲に關左の八州を奪はるゝに至る。此を根本の亂として終には六十六州
兵亂ならざるは無し。腹心に病ありて四肢百骸皆安からざると同じ理なり。
永享の持氏滅亡の後、兩上杉の計らひにて、義政の弟政知を關東の公方と仰がんと
て、伊豆の堀越に指置きたるに、延徳に其次男（嫡子は義澄也）茶々丸に殺さる。
故に成氏（永壽丸とて、持氏の四男なり）を止ことを得ずして又鎌倉の公方とせし
に、親兄の讐なれば、終には兩上杉を滅さんとて爭亂に及びしなり。
一上杉憲春の氏滿の叛心を諫めて切腹し、平手中務が信長の狂蕩を諫めて切腹したる、
皆其君をして善に遷らしむ。龍逢比干にはまさりたり。中古以來忠臣の鑒とも稱すべ
し。上杉憲實の持氏を亡ほせしは、君を弑したるを耻しにや、出家遁世して、一生漂
泊して死したり。平生學を好みたる故如此。されど是は悦ぶべき人には非ず。
足利學校の五經は此憲實の藏したるなり。毎卷に上杉安房守憲實寄進。不可出

學校之門と記して、花押を居るたり。書迹も見事なり。天明丁未の秋、此地に遊んで、予が親しく見る所なり。今を距ること二十八年、今此を想へば誠に一夢の間なり。

一下野の鹿沼に住せる一老人、終身其門前の流にしからみを爲して、流れ止る朽木古木を集め焚て、家内湯浴の用を爲す。其家は太福を發して、其子には博學能文にして、さて君子長者の風ある人を生じたり。武藏の本莊に住せる一老人、其門前の馬糞を終身掃ひ取れり。此れも其家は太福を發して、子孫には學者をも生じたり。されば太福を發して、子孫も榮昌ならんとは、勤儉にて縝密なる氣象有ものに非ざれば能はざること也。開國創業の人とても同じことなり。然るを粗豪浮躁なる氣象にて、徒手にて萬金を得ん、一家を起さんなど願ふは、博徒流の餘習にて、天地の間に此理此事あること無しと知るべし。

一鹿沼の老人を予が感服することあり。予が門生に彼が家に入塾して、其子に學を承けたる者あり。夫が嘶に彼が家に往きたるとき蝶足の膳を携へて行きたり。或日老人の予が門生に語りしは、鹿沼に某と云へる富有の者あり。數世相續せしが、其末世に不

縝密—心を
用ふる細に
して謹み深
きこと

蝶足の膳—
膳脚が蝶の
翅を廣げた

る形に作れ
るもの

肖の者生じて、奢侈にて家を亡ほせり。其者の平常に食せし膳は、あれに在る膳と同じこと也とて、吾が門生の蝶足の膳を指して告げたりと。丁未の歲に吾が門生の予に語り。吾が門生も、一萬兩ほどの家資の者也しが、夫より十年を経ずして身上埋没せり。彼門生は六かしき老人也とて、何心も無く語りしが、遂には其言彼が身の上の事とは成りたり。老人眼識の不凡なる事を畏るべし。予は此話を聞たるより二十八年、貧は不習して儉也と云ふ言に同じく、家内の妻子迄蝶足の膳を不用ことは此老人の賜もの也。

一漢の時に、篤實なる人を長者と呼びたり。おとなしき好き人と云ふことにて、此名義極めて妙なり。人の忿争を好んで喧嘩口論するは、小兒のいさかひの習の不變なり。凡百の器玩を好むは、小兒のもて游の習の不變なり。醉狂して躁ぎ舞ふも、小兒の躍りはねたる習の不變なり。無用の費をなし、人に物を與ふるには鄙吝なる類、皆小兒の心なり。勝氣の張りたるも小兒の心なり。されば長者とは小兒に對する言にて、おとなしく兒共心の無き人なり。上方にては、今に童部しき心ある人也と云ふことを言ひ傳ふ、聖人君子には程遠し、學者小兒を免れて長者と爲り給へ。

宦官一恐くは宦官なるべし後宮に仕ふる男子にして去勢したるもの

赤脚大士一仁宗の渾名

哲婦一さとき女哲は知なり

一宋の仁宗の宦官宮妾と戯に賭博して一千文をまけ給へり。五百文を宦官侍妾に與へて、五百文を持って逃げ出で給ふ。侍妾寺人、皆官家寒乞なりと罵るに、仁宗立ながら財は天下の財なり。我は天下の爲に財を守る者なり。汝等の爲に無用の財を費し盡すべからずとて、奥へ逃げ込れたり。戯とは云ひなから、難有御事なり。赤脚大士の不凡を知るに足れり。

一女子は家人の第二爻の无所遂。在中饋と云ひ、小雅の無非無儀。惟酒食是議。無父母貽罹と云ふ。これ正道なり。大戴家語烈女傳にも、此二經の言を推演して説けり。さて牧誓に武王の紂が罪を數へ給ふにも、婦人之言是用ふと云ふを第一とす。大雅には哲婦傾城と云ひ、婦有長舌。是厲之階と云へり。されば國家の事に婦人を難ふべからざること、聖人の大戒なり。周の三母、漢の馬皇后、唐の長孫皇后のごときは、曠世の一人にて、宋の宣仁、女中の堯舜と呼ばれたるは、今古の珍事也。符堅の夫人の諫を用ひずして、晋を伐て國を亡ほし、竇健徳の妻の諫を用ひずして、王世充を援うて、太宗に虜とせられ、明の寧王宸濠が妻の諫を用ひずして叛逆して、王守仁に捕へらるゝの類、婦言を不用して止びたるも有れども、それは證驗とはなり難く、

舜典一書經の篇名
九官一司空后稷、司徒、士、共工、虞秩宗、典樂、納言

洪範一尙書の篇名

不庭一王庭に來朝せざるをいふ

唯聖人の言萬世の模範なり。

一舜典の九官に、司徒、司教、典樂も亦司教。教官二あり。此には深義あり。司徒は五教を天下の萬民に敷て、人と禽獸との異なる處を教ふる者なり。さるが故に、孟子も此章を解して、人之有道。飽食煖衣。逸居無教。則近於禽獸。聖人有憂之。使契爲司徒。教以人倫とあり。典樂は胄子に詩樂を教へて、成徳の方を教ふる者なり。是は君子と小人との異なる處を教ふる者なり。故に直温寛栗皆皋陶の九徳の目なり。庶民は人倫を知て禽獸に異ならしめ、士君子は徳を成して庶民に異ならしむ。堯舜の時より如此區別ありて、士君子の貴きを知るべし。故に詩書には農工商賈を民と云ふ、士君子を人と云ふ。人と民との別を知るべし。一舜典九官、士の一官兵刑の二を司どる、洪範八政には、師、司寇と二職なり。周官六卿にも、司馬司寇と二官なり。兵と刑とを一官に兼ねたるは、上代の事にて尤の理なり。此理は、他書には是無し、唯國語にのみ詳なり。晋語に范文子曰。夫戰刑也。魯語に刑を論じて、大罪於原野とあり。夫甲兵を興して不庭の諸侯叛亂の夷狄を原野にて誅罰するは、本刑なり。後世不義の兵互に相貪侵するに至ては、刑罰の道

學而、爲政、八佾等皆論語の章名なり

無し。故に上古兵刑を一とし、後世兵刑を二とす。自然の勢なり。

一汝諧哉は、九官の内に益の虞となり、垂の共工となる二官に而已此語あり。是は九官の内佗官には僚屬なくして、虞には朱虎熊羆あり、共工には夔、斨、伯與あり、皆其僚屬なり。故に和諧せよと宣ひし者なり。然るを魏晉僞書の大禹謨禹の讓を受くる條に諧哉の語あり。王肅の學徒の無識を見るに足れり。されども此は僞書の僞書たる處を逗漏するにて、却て宜しき事なり。

一左傳に、學而後入政とあり。故に學而の次に爲政なり。左傳に禮以體政とあり。故に、學而の次に八佾あり。(禮樂を説く)人而不仁如禮樂何とありて、禮樂も仁に非ざれば無用なる故、八佾の次に里仁なり。人而不仁の一章は、八佾の次に里仁の篇を置けることを豫め説けるなり。論語篇章の誤次、心を用ひて考ふべき事也。衛靈公第十五、季氏第十六、陽貨第十七、衛靈は、諸侯の無道なる者、季氏は、大夫の無道なるもの、陽虎は陪臣の無道なる者、是れも撰次を紊らず。此にても論語の編叙に心を用ふべきことを知るべし。

一匹夫には少なき事にて、諸侯以上は、兄弟國を争ふの心より、不和なること多き者なり。

令徳—善き徳 壽凱—壽にして樂しむ

り。故に小雅の蓼蕭に、來朝諸侯の令徳壽凱を譽るに、他の善行を説かずして、宜兄弟とのみ褒めたり。聖人用心の妙如此。眼を開きて讀み給へ。

一隱公の謙讓、鄭莊の叔段に克つ。春秋の發端なり、可見。

一勿糝教升、木と云へる妙なり。小人は利欲熾盛にして、親戚の愛情も薄き者なり。故に上たるもの堯の親九族、周公の不弛其親の教を用ひて、親旅の親愛を深くすれば、其風下に移りて、庶民も於變時雍に至れり。然るに幽王之如く色情に惑て奢侈となり、奢侈より窮匱に至て、親戚を疏薄せらるゝ時は、小人は悉く親戚兄弟相背くに至る。是れ唯さへも升りたく思ふ糝に又木升りを教へらるゝ也。君子有徽猷。小人共屬すとは、論語の君子篤於親。則民興於仁と云ふと同意なり。論語は小雅を解釋せると云ふべし。

一今の世の學者は、魏晉の人に近くして、多くは老莊を好むもの也。是にて性善の妙を知るに足れり。如何なる故ぞと問へば、學者は必定放蕩なる者なり。然るに論語孟子の内に、斷て己が放蕩の助けと爲すべき聖語なし。性善本心の良にて、己が身上に責を受く。此責は人の責むるに非ずして、己が己を責むるなり。(是皇天上帝の責め給ふ

老莊—老子と莊子

心行し—自ら慰むる所
莊周—莊子の名なり
王弼—字は輔嗣
何晏—字は平叔王何共に老子の説を好み清談に耽り當時の風をなせり

なり) 是に困りて心行し無き故に、仁義を卑薄し。禮法を蔑棄せる老莊を假りて、先づ己が心のかしたとする者也。魏晉の人老莊を好むも皆此心より出でたり。老莊を談ずるは、盡く己が過を飾るの道具なり。是にて莊周が不仁の罪を知るべし。當時此書を著せるは別に故あるべけれども、後の人此を以て己が罪を撻ひ、過を飾るの具とはなれり。桀紂は一代を亂り、王何は百世をあやまるとして、王弼何晏之罪。勝于桀紂と、晉の范甯の云ひたるは尤のこと也。莊周の罪は王何の上に出づ。さて今の學者老莊の見解より、堯舜も白骨、桀紂も白骨、善惡不二、邪正一如など佛語までを假て、己が悪の助けとなす。是を破れ大乘(煩惱即菩提、生死即涅槃)と云ふ。又石川五右衛門の悟道、明智光秀の順逆無二門の偈とも云へり。笑ふべき事也。善惡邪正の區別は聖人を待たずして天地自然の道也。美人と醜女とを並べたらんには、天下の人皆美人を戀慕すべし。美食と蔬食とを並べたらんには、天下の人皆美食を悦び食ふべし。忠孝仁義の人と、弑父弑君亂臣賊子を並べたらんには、天下の人忠臣孝子を敬ひ尊で、亂臣賊子を賤め惡まざる者なし。善惡邪正の區別は、人心の自然にて天地自然の道なり。聖人此を以て天下の人に教へて、自然の妙を失はざらしむるのみ。

葛衣—くすかつらの織糸にて織りたる夏の衣服

困學紀聞—宋の王應麟の撰なり
簞食瓢飲—少し許りの飲食物といふこと漢書貨殖傳に見ゆ

若し善惡も邪正も二なき時は、其徒の學者は雪中に葛衣を著て、炎天に綿服し、寒暑も混一にすべし。寒暑混一すべからざれば、善惡混一するの理は無きこと也。一予十八歳の時、越前今莊と云へる山中に在て、一人の山伏と終夕物語せるに、其人予が禪學などを好めるを見て、其方は道を學ぶ志のある者なり、常體の學者には非ず。吾師より傳りたる賢人となるべき術あり、可傳やと云へり。予屈服して教を請ひたるに其人の云く、唯二術なり。其一には、曉六の鐘に起き給へ。其二には、朝夕の飯を軽く二膳食ひ給へ。是にて賢人となるべし。是は國家安全の祈禱なり、一身壽福の符咒なり。子孫榮昌の守なりと云へり。予其時には至理ありとも思はざりしが、後に能々考ふれば希代の妙言なり。先づ朝起は、詩の蚤起夜寐。莫忝爾所生。書の味爽不顯よりして、古人の蚤起を勧め給へること、困學紀聞に詳載せり。小食は周易の節飲食。論語食無求飽よりして、惡衣惡食、蔬食水飲、簞食瓢飲、注信民の咬菜根。まで皆此事なり。さて蚤起する者は、學問藝術、家業職業に怠惰する者に非ず、輕慢する者に非ず、柔弱不立の者に非ず、乾々孜孜、困學精勤すべき人なれば、如何にも賢人となるべき一術なり。さて小食は養生養福の術のみには非ず、此嗜欲を

も抑へ制する程の剛明の人は、色情をも抑へ制すべく、衣服玩好凡百の欲抑へ制すること難かるまじ。されば身を立て家を起すも、謹身節用も何の難きことあるべき。如^{ごとく}此^{ごとく}なれば賢人となるべきことは必定なり。飲食男女人之大欲存焉^{たいよくそんす}（禮運）口腹耳目之欲^{よく}（樂記）口腹の欲最も制しがたく、孟子の宣^{のたま}へる飲食の人は、人に賤^{いやし}まるよに至る。まして男女耳目の欲制するに難くして、人欲肆^{ほしま}而天理滅^{めつ}するに至る。さらば口腹を肆^{ほしま}にせざる程の者は、耳目をも肆にすまじ。是れ賢人たるの術に非ずや。蚤起^{さうき}の一條は耳に留^{とど}て三十年餘、朝寢^{あさね}と云ふことは爲^せざれども、小食^{しょうじく}の教を守り不^{ざる}得^えが故に、小人の域^{よき}を免るよと能はず。老人の教誨^{けうかい}に背ける事耻^{はづ}すべきの甚しき也。予が諸子共是れを守るべき程の者一人も無し。故にこれまで此事を傳へず。今、記載して後の剛明の人に傳ふ。

虚勞—精力の衰へる病

予、十七歳の時虚勞を病みたるに、醫生の脾胃虚なりとて、百日の間米三合のみ食たり。十八歳より二十歳まで越前に在て、飯至^{めし}て輕^{かろ}く三膳のみ食せり。飢に不^ず忍^{しの}して赤豆一合づつを煮て食ふ。當時は苦しき事と思ひたれども、今より是^{これ}を見れば此功德にて、小々の學問も成就せるにや、道德のことも小々は知解せるにやと思ふ。

珍羞—珍しくうまきもの
明道—程顥なり

越前に在りしより江戸に來りても、天明卯辰の飢饉丙午丁未の荒饑にて多くは粥を食ひ麥を食へり。是も學問成就の基と思へり。朝夕一度蔬食を忍び食へば、一事の善行也と袁了凡は教へたり。榮耀の内に生長する人は、此等の事をも知り給ふべし。一唐玄宗より兵亂打つどき、公卿の俸祿薄して、元載建議して祿を増けれど、顏真卿は八省の尙書なれども、家屬多くして俸米少きが故に、粥のみを食はれたること見えたり。朱晦菴も晩年蔬食のみ食はれたること見えたり。大賢の行事如此、予儕凡下の小人にて珍羞を食せんことは、冥の照覽^{みやう}瞿然として回顧せざることを得ざるなり。一予少より好で温公の通鑑を讀み、其書を悦ぶ。明道の行狀を讀で其高德に服せり。されども三十餘まで宋學を侮蔑して莊禪の流と思へり。寛政五年癸丑正月二十日の夜の夢なりしに、温公と程子とを見たり。程子は明道か伊川か分明ならず、二人堂上に對坐し給へり。予は階下に拜伏す。仰て見るに、兩人の形一丈有餘の偉丈夫にて、吾身を顧れば、七八歳の小童の如し。何か畏れ服して一言も無く愧入る體にて汗を流して夢覺たり。（兩人共に深衣様の物にて、小手袖の衣を著け給へり）學問のことは姑く置く。行義を以て見れば、兩大賢は一丈有餘の人にて我身は稚子の如きこと、尤

陽明—王陽明なり
大綱—大なる筋道
楊雄—漢の

至極の理なりとは解したれども、此時會て宋學を信する心なし。三十七八歳の時、論語を讀で文字言句は明々了々たれども、何か徹底せざるに多し。始めて悟れり、身其地位に造らざれば、其言其旨眞知し難し。京師の畫圖を見たりとも、身京師に至らざれば實知に非ず。畫圖に毫髮も誤あるには非れども、畫圖のみにては畢竟見ぬ京物語と成て訛謬なきこと不能。是にて始めて顔子の學德一致、論語繫辭の智仁混一の事を悟りて、先づ王陽明の知行合一の善教なることを知れり。されば賢人君子の域に造らんことを志願して、身を省るに志願なり難き故は、人欲横流して天理昏昧なるを以て也。此にて始て悟る、天理人欲の説は、賢人君子に造るべき要術を得て、此學孔孟の正統を異傳へたることを。是より以後は、晦庵陽明を見ること舊日と大に異なり。されども今日に至るまで宋學を一々信用するには非ず。唯其大綱を得たるを悦べるのみ。今日の見解如此して、世間の詞章記誦のみを學問と思へる人と逕庭なるは、幼少より先父の教にて袁了凡が陰騭の説を悦び、廿餘歳より三十歳まで、好んで宋儒の書を讀みたる功德にもや。されば溫公程子を夢みたるも、偶然には非ざるなり。溫公明道の厚德は、可仰可敬。されども溫公は楊雄を悦て孟子を疑ふ。其子の司

王莽に事へし學者にて楊子法言の著あり

京山—郝京山
偏廢—一に偏し一を廢す
令儀—威儀のよきをいふ

馬康さへ此に不服。寡助之至。親戚畔之と孟子の言に符合せり。明道は聖人仁者に近けれども二程全書の言、信すべからざるに又多し。學問は、孔孟以後の人は善美を盡せるは無し。宋學正統を得たりとも孔孟に比すれば禹湯文武の天下と、漢祖唐宗の天下と違へるに同じ。然し宋學は霸統には非すと知るべし。一聖人は先知後行と説き給へり。陽明は知行合一とす。京山は先行後知と云へり。其言各各至理あり、偏廢すべきに非ず。一經書を學ぶ者は、牛の角突と云ふ事を知るべし。文字の角突あり、義理の角突あり。まづ文字の角つきとは、泉陶謨論語にては、巧言令色は惡行なり。大雅は、仲山甫を譽めて令儀令色。小心翼翼たりとあり。此令色は善事なり。顔色の溫潤溫和を云へり。中庸に索隱行怪吾不爲之矣と仰せられて、索隱は隱僻の理を探索することにて惡事なり。繫辭探賾索隱とあるは、聖人幽隱の理までを尋索し給ふを云ふ。大善事なり。孟子浩然の氣の章に、不動心は智者不惑。勇者不懼。智勇二徳の成就して、心に疑惑なく恐懼なく、事に臨て不動ることを云ふ。君子の境界にて不動を善事とす。告子の終に、動心忍性。増益所不能とあるは、心を感動變動し、性を矯

寡人王が自ら呼ぶ語なり

採堅忍して、君子の域に入る動心を善事とす。又孟子梁惠王の寡人於國盡心焉耳矣。又盡心力而爲之。後必有災。此盡心は心を勞すること今の骨を折ると云ふ位のこと也。盡心の盡其心者知其性也と云ふは、桀紂之失天下者失其民也。と云ふと同例にて、其本性を能く知る故に其心を能く盡す、仁義の良心を致し盡すを云ふ。中庸の盡性と略約相同じ。孟子大人者不失赤子之心。是れは大徳聖人の事なり。左傳昭公十九年矣。猶有童心とは、いつまでも小兒の心を免れざる愚人なり。孟子士尙志は美事なり。樂記の敖辟喬志は惡事なり。仲虺之誥と左傳襄公二十二年にある口實は、口くせに云ふこと也。周易の頤卦と左傳襄二十四年にある口實は、飲食のこと也。公羊傳文二年の口實は、死人口に含ませる珠なり。論語の中道而廢と云ふは、中庸には、半途而廢とありて、半分路のことなり。論孟周易の中道中行は過不及なき中正の道なり。是れは經傳に夥しき事故十が一を擧るのみ。さて義理の角突は論語を殊に多しとす。其心三月不違仁と云ふは仁心なり。孟子に今有仁心仁聞而民不被其澤と云ひ。又仁聲入民之深と云へり。仁聞仁聲は一事なり。一つは民不被澤と云ひ、一つは入民之深と云ひ、繫辭に天下何思何慮

公山腓胥二人が孔子を招聘せんとせしこと論語に見ゆ

と云へども、大學には慮而后能得と云ひ、太甲にも、弗慮曷獲と云ひ、洪範にも、思曰睿。睿作聖と云へり。子絶四に、毋必と云へども、又云必乎正名乎。必乎使無訟乎と云へり。論語に仁者不憂といへども孟子に堯獨憂之。舜以不得禹臯陶爲己憂と云へり。又勇者不懼と云へども、子路には臨事而懼と仰せられ、中庸にも戒愼恐懼とあり。又友諒とあれども、又君子貞而不諒と仰せられたり。又予欲無言と仰せられて、又吾與回言終日と仰せらる。又由也果於從政乎。何有と仰せられて、荷蕢丈人を斥しては果哉末之難矣と仰せらる。躬爲不善者君子弗入也と仰せられて、公山腓胥の招きには往かんと仰せられたる故に、子路も之を疑へり。天下有道則見無道則隱と仰せられ、孔子の時は無道の世なり。故に天下之無道也久矣とも、道之不行已知之矣ともあり。長沮桀溺は無道則隱るの孔子の語を得たるもの也。然るに孔子は隠れたまはず。天下有道丘不與易也と仰せらる。一々角突ならざるは無し。故に祭義に夫言豈一端而已。夫各有所當也と云ふ一語、經を學ぶ大甲令也と知るべし。聖經の言は各其理ありて、彼を以て此を疑ひ、此を以て彼を難する者に非ず。得見君子者斯可

管仲一字は夷吾齊の桓公を輔けて諸侯の霸たらしめし人

慧眼如炬一觀察極めて鋭きをいふ

矣と仰せらるるは、世に君子なきを云ふ。されども宓子賤をも君子哉。南宮适をも君子哉と仰せられたる故、是は時の諸侯のことなり等云ふは、先づ窮説なり。顔子の外未聞好學者と仰せられて、孔文子を好學と仰せらる。諸子には仁を許さずして、管仲が仁は、大に嘆美したまふ。さて此牛の角突は、經傳の常事たるを知らざる者、論語の不知肉味を以て、大學の食而不知其味を疑ふ者あり。可晒の甚しき也。論語は、夫子の韶樂を悦び給ふの深き三月肉味をも忘れ給ふに至ると云ふ。聖人道を信じ徳を尊ぶの厚きを見する者なり。大學は愚童凡夫の色情に惑ひ利欲に耽り、肉味をも辨へざるを云ふ。本より疑ふべき事に非ず。論語五十三條、仁を説て、子罕言仁と云ふを疑ひて、子罕言利。與命共。與仁共と解せる者あり。可笑の甚しきなり。夫子之言性與天道同語例なれば、子罕言利與命與仁と讀むべき自定なり。論語に百條仁のこと有りと、此語に碍あらず。一體論語は二十篇皆仁を云ふとおもふべき也。夫ゆるゑに古人も張南軒の洙泗言仁錄に、五十三條の仁のみ仁と思へるとて笑ひたる者あるは、慧眼如炬の人なり。仁は諸徳の統本容易の造るべきに非ざる故、漫りには語り給はずと云ふこと也。是も亦本より疑ふべきことに非ず。比周の字、驕

抵牾一互に矛盾するをいふ

解經一經書の解釋

精博一ひろく精密なること

泰の字の等の角突は、世の學者も知ること也。都て章々句々皆各其理ありて、萬世の法則となる。抵牾せるとして疑ふことも難すべきことも無きを悟るべし。然らざる時は、伊藤仁齋荻生徂徠等が如き、陋見を生ずるに至る、可畏ことなり。一繫辭には、精義入神と云ひ、中庸には盡精微とありて、學問は精密微細なるを可とす。されども、章句文字に考證考据の力を盡すときは、書厨書庫となりて、匱を買て珠を返し、隣の寶を數ふるに同じうして、必竟己の用とならず、無用の學なり。王陽明羅汝芳等の學は單刀直入、君子賢人の域に升るべき有用の實學なれども、章句文字を解釋すること誣妄のみにて、必竟信用するに足らず、朱晦庵郝京山の學異同あれども、章句文字をも略能く解釋し、又身心に有用なり。二家の學などを先づは可なりとす。されども二家の解經も訛謬あり、疎漏あり、極めて妄なることもあり。一々信用すべきには非ずと思ふべし。一德清胡渭が禹貢錐指を見るべし。其精密纖細、解經の書ありて以來、如此精博なるは無し。顧炎武日知錄、趙翼陔餘叢考を見るべし。其證據明白なること、宋明隨筆の書に如此者なし。王鳴盛十七史商榷、趙翼二十二史劄記を見るべし、史學の明古

生知一生れながらにして知る者

道義—道德 義理

今如^レ此の者なし。清人の學は感服すべし。されども唯物知りになるのみにて、身心に用なし。孔子は多學而識^レ之ものを非なりとす。されば宋の諸名賢の解經は疎漏は多けれども、其言行は一言以終^レ、身可行^レ之ものあり。一事以終^レ、身可奉^レ之ものあり。一部の小學外篇にても聖經の羽翼と云ふべし。聖人出世の本懐は、唯是天下の人を善に導いて惡を沮み、四民凱安四海泰平ならん事を要する而已。聖人の學物知り自慢の爲には非ず。是れにて宋の諸名賢の尊きを知るべし。

論語に多聞而擇^レ其善者而從^レ之。多見而擇^レ其善者而識^レ之。生知之次也。と仰せられて、又多學而識^レ之者非也。と仰せらる。此等例の角突の尤なる者なり。

毛龜齡の西河合集は、妄謬怪誕の書にて信用すべき事極めて少なし。余蕭客惠棟惠士奇王鳴盛などの漢學を云ふは無用の事なれども、されども漢魏の傳注の滅廢せんことを傷みて如^レ此ことを建立せしなれば、道義に益ある事は少なければども、經學には功無しとせず。閻若據の古文尙書疏證、王鳴盛の尙書後辨は增多二十五篇の偽造を明辨せり。毛西河の書偽妄多き事は、全謝山が經史問答に見え、今は其書一向用ふる者も無く讀む人も無く、其板も滅びんとすることは、知不足齋叢書の中、鮑

雁行—雁の列をなす如く稍斜めに行くをいふ 不遜爲勇—論語陽貨篇に子貢曰惡^レ不孫而爲^レ勇者とあるをいふ 孫は遜に通ず

廷博が跋文に委く言ひたり。

一今の學者第一に心得べきことは、周易の柔順利貞なり。論語の溫良恭儉讓なり。先づ言行共に柔順を宗として顔色は溫和なるべく、言は卑遜なるべく、行は降挹なるべく、飲食衣服器用は質素淡泊なるべく、高ぶるべからず、争ふべからず。路行くには人を避くべし。並び坐するには末席を可とす、並び行くには雁行を可とす。論語不遜爲^レ勇を忘るべからず。慮^レ以下人を忘るべからず。近來の文人に吾が文韓退之蘇子瞻に勝れりと誇る者あり、狂人と云ふべし。されども己が文の韓蘇に及びがたきを不知は、實は愚人なり。及び難きは知れども、如^レ此の言を吐て愚人を欺くならんには、其狡黠可^レ惡之尤なり。吾門の人は能く書を讀みて、詩文も德行も古人に企及びがたきを知り給ふべし。古人の及びがたきを知ると、讀書の功にて吾が眼識の明かに成りたるを自知し給へ。

明の汪道昆が、蜀人蘇子瞻の如き、文章一字不通と云ひたること、書影に見ゆ。彼我共に如^レ此愚人はある者なり。

一漢の黃霸が治道去^レ其已甚者而已矣と云へり。希代の妙言なり。都て漢人の語には

仲尼孔子の字なり

磴々然一小石の堅確なる貌より小人のこせつく貌にいふ動容周旋中禮一動作の禮法にかなふをいふ

如此の妙語多し。聚斂已甚に至れば亂亡すべし、苛察已甚に至れば亂亡すべし。信賞必罰も已甚に至れば亂亡すべし。善事たりとも已甚に及ぶ時は、害を生ず。仲尼不爲己甚と孟子の仰せられたるにて可知。今日の我人にも善惡共己甚ならざれば害なし。惡事は爲すべきに非ざれど、惡も己甚に至らざれば、亡國敗家の患無し。去ば治道に己甚を去ると云ひしは、妙ならずや。大抵天下を治るも、一身の世を渡るも、舟の中流を下るに同じ、舵を操て時々押直しくして下るべき者なり。然るを寛猛剛柔偏なるを厭はざれば、舟は西か東の岸に衝き中りて微塵に碎くべしと知るべし。一牛の角突に尤も甚しき事あり。論語に言忠信と教へたまうて、さて言必信磴々然小人哉と仰せらる。孟子も大人言不信心。唯義之所至と仰せられたり。是れは能く分りたることにて。必信の害を云ふ。平生信を尊べども天下の爲、君父の爲には、僞をも言ふべきことなり。さて孟子盡心の終りに、大徳の人を説て言語必信。非以正行也。と仰せらる。此必信は動容周旋中禮と同様のことにて大徳聖人の事也。論孟の角つき皆々如此。この牛の角つきを知ること、學經第一のことなり。一左傳諸書に詩を引きたるは、斷章取義にて、詩の本意に異なるは世儒の知る處な

膏澤一恩を民に施すこと

り。襄二十八年に引詩斷章と云へり。隱元年の註に不與今說詩者同と杜預も云ひたり。さて書を引けるも同じ。皋陶邁種徳。徳乃降るは、徳澤の民に降るを云ふ。君爽にも、徳降于國人の語あり。孟子の膏澤降于民と云ふ是なり。然るを僖八年の左傳、鄭降于齊師還の條に、我徳あれば人降伏すと引けり。康誥の大に明服。惟民其勅懋和とは刑罰の上服下服(呂刑の字)を明にすれば民も畏れて互に勅戒和順するを云ふ。然るを僖二十三年狐突の懷公を論ぜる條には、大明服の三字を我大に明なれば人服すと引けり。然るときは、書文の惟民の二字、解すべき様なし。尙書を引くも皆々斷章取義なるを知るべし。さて又此斷章取義、實は詩書のみならず、論語の杞不足徵宋不足徵とは明徴證左なきを云ふ。文獻不足徵とありて、文籍も賢才も證左となるべき者二國に無しと云ふ事なり。然るを中庸に引ける杞不足徵也は、下文に上焉者雖善無徴。無徴不信。不信民弗從と云ふ。又君子之道。本諸身。徵諸庶民とあれば、其禮を民に施しても教化の驗なきを云ふ。論語とは大に異なり。聖孫の論語を引給へる既に當時の語意と違へり。論語の有耻且格とあるは、格正の義を妙とす。禮記に此章を襲ひて、民有遷心。民有格心とあれ

巫醫一占者
と醫師

溫故知新—
舊聞を溫習
して新知を
發見する義
なり

ば、來格の義なり。當時孔子の仰せられたるは、來格の義なるべし。されども論語を撰次せる時は格正の義とせる者なり。以約失之者鮮矣、言語を約節するの義妙なり。禮記に儉易容也。以此失之者不亦鮮乎と云へり。是も論語を襲ひて約を儉約とせり。當時孔子の仰せられたるは儉約の義なるべけれども、論語を撰次するときは言語を約する義となせる者なり。庶民來格と云ひ、儉約不_レ失_レ道と云ふ、論語撰次の意に非ずとも極めて善教なれば、其說偏廢すべからず。南人有_レ言人而無恒の條も禮記にあり。古註は禮記を以て解せり。朱註は皇疏衛瓘の說にて巫醫ともなるべからずと解せり。是れは不_レ占而已矣に照らせば、禮記古註の意、語意を得たるべし。さて又溫故知新は、論語にては學問のこと也。中庸にては溫故は德行に屬し、知新は學問に屬す。中庸にて論語を解すべきに非ず。大學には如_レ切如_レ磋者道_レ學也。如_レ琢如_レ磨者自修也。とありて、切磋を講學とし、琢磨を修徳とす。荀子大略には、詩曰如_レ切如_レ磋如_レ琢如_レ磨謂_レ學問也と、四つ共に學問の事とせり。今は考据證據と云ふことを悦べども、論語中庸と同字同語にて義理各別なるときは、經書は其章其章の文義義理ある事にて、下手證據の用に立つべき者には非なるなり。

天知り難きに非ず、書を讀て古今の成敗を知るは、天を知るの方なり。天を知れば天を畏るべし。君子三畏畏_レ天命とあり、また小人不知_レ天命而不畏とあり。予は天資愚陋にして世に立つべき才略も無く智謀も無し。されど道を信じ學を好む故、積累の久しき、天道の昭明を知り、又天命の威嚴を畏る。吾家の兒子門生、書を讀むといへども、外に馳せ博を務めて、其本を失はんことを恐る。故に北窓の涼處に就て、心に浮ぶ事を記載して其戒と爲し、小人の歸たらざるを要せしむ。されど其言詮次も無く書を披かずして憶記せるまよを記したれば訛謬を免るべからず。兒曹の其謬を匡正せん事を欲す。

文化十年。癸酉。六月念五日。多稼軒主人元貞識

成材何待十年謀	匠石操斤顧不憚	收爨猶堪調律呂
剪圭還可命封侯	高陰遮日宜書幌	疏雨傳秋滴畫樓
慶氏從前百車富	定於後圃植千頭	拱把未曾勞灌培
扶疎乍見翳樓臺	姬瑞先臻卷阿樹	舜絃猶假嶧陽材
不與羣芳競榮蔭	早零一葉在青苔	最是漢園岑寂處
如眉織月落宮隈		

詠梧桐七律二首

它山公愷題

梧窻漫筆後編序

董子曰。君子正其義。不謀其利。明其道。不計其功。于公之大門閭。王氏之植三槐。若執右契以責人者。君子之爲善固然耶。曰。謀其利而不顧其義。計其功而不以其道。此小人之所務。而君子之所耻而不爲也。若夫正其義而利自至。明其道而功自成。豈君子之所惡乎哉。且作善降之百祥。作不善降之百殃。書之明訓也。積善之家。必有餘慶。積不善之家。必有餘殃。孔子之言也。于公之大門閭。王氏之植三槐。皆善知天道報應之不忒。而豫與之期。篤信而不疑。君子之爲善固當然也。陳平曰。我多陰禍。我子孫必廢。夫陳平何人也。猶善知報應之理。必然不忒。至於司馬遷。不知道。妄起是非之論。以熒惑後之

人。遷不徒聖門之罪人也。又陳平之罪人也。嗟乎。薦敖之埋蛇。而不死。惠王之吞蛭而後出。宋景有君人之言三。而熒惑移三舍。成湯之禱桑山。澍雨立至。東海之殺孝婦。枯旱三年。詩曰。昊天曰明。及爾出往。昊天曰旦。及爾游衍。天人之際。不甚相遠。可不察乎哉。此書前編。極言天人感應之理。今又續刻此編。以補前書之未盡者。蓋先生老婆之心。有不能自止者也。予遊于先生之門。于今二十餘年矣。親炙先生之教之日尤久矣。然才識婬陋。不能與今新進輩竝轡而騁。亦明矣。唯以其親炙之日久。於先生之緒論。既鑿聽而耳熟之矣。今刻成見。囑以序。予曰。以所嘗聞於先生之言。點綴以弁諸簡端。以告後之讀此書者。

文政甲申之春花朝日

出井元愷悌三識

梧窻漫筆後編序

先生學窮古今。尤邃於經義。力闢宋儒之妄。而明聖人之旨。有叩以人事之是非。無道之得失者。引援經義。參稽古今。以定其當。辭辯風生。殆若燭照數計。而龜卜者也。非天下之大儒焉。能若是乎哉。平居教人。恒以陰德二字爲先。曰戒殺生。曰施丐者。夫戒殺生。卽君子遠庖廚之仁。不可以釋氏之餘教而斥之也。施丐者。卽文王先四者之惠。不可以王莽之養贍而儀之也。此慈仁之端。而人道之先務也。苟擴充是心。施及於四海。亦可以贊化育。而參天地矣。以故是書前編務明報應之理。著殺生之戒。以警覺世人。今又刻此編。以補前書之所不足者。可嚀反覆。以推明天道之不僭差。吉凶禍福之以類相應。

以爲天下後世之戒。晏嬰曰。君子贈人以言。荀卿曰。仁者好告示人。若先生者。其庶幾乎直嘗讀史書。至於宋庠救蟻爲宰相者。竊有疑焉。夫救蟻仁之小者也。取相報之大者也。以小仁取大報。是必無之事。附會談也。不可信也。後讀先生是書。至於殺生之論。恍然有得焉。夫秦西巴放麕。仁之煦々者也。孟孫以爲子傅。趙衰之全壺餐。義之子子者也。文公以爲原守。然則天道聰察。以其救蟻之微念。驗其可。以爲宰相。又何疑焉。嗚呼。先生之學。窮古今剖天人之蘊。此書殊其緒餘。糝耳。猶足以警覺一世。嘉惠後學。所謂涕唾成珠。一字千金者。其此書之謂耶。是爲序。

文政甲申之春二月中浣

片倉直薰沐再拜謹撰

梧窓漫筆 後編 卷上

南面一人君
治を聽くの
位なり

一聖學の上頭第一義は、屈伸感應の理なり。下繫辭傳に、日往則月來。月往則日來。日月相推而明生焉。寒往則暑來。暑往則寒來。寒暑相推。而歲成焉。往者屈也。來者信也。屈信相感。而利生焉。尺蠖之屈。屈以求信也。伸龍蛇之蟄。屈以存身也。伸精義入神以屈致用也。伸利用安身。屈以崇德也。伸是れ屈伸の妙理を天下萬世に掲げ示し給ふなり。先づ舜は大聖德にて。耕于歷山。陶于河濱。漁于雷澤。給ふは、屈の甚しき也。故に伸ぶる時は受。終于文祖。て南面して天下治れり。伊尹の畊于有莘之野。は屈なり。伸ぶる時は、輔湯伐夏定天下たり。傅說の築于傅嵩之野。は屈なり。伸る時は、佐武丁中興天下したり。呂望の釣于渭濱。は屈なり。伸る時は、輔佐文武。鷹揚牧野。表準東海たり。楊震が五十餘まで仕官せざるは屈なり。子孫四代三公たるは伸なり。袁安が雪中高臥は屈なり。是れ亦子孫四代三公たるは伸なり。張良が擊履于圯上老人。は屈の甚しきなり。故に、帝王の師たる

蒲伏一匍匐
に同じ

令終一善き
終り

の伸あり。韓信が蒲伏于市人胯下は屈の甚しき也。故に齊楚の眞王たるの伸あり。凡世間の人、幼き時喫闕欠、少き時忍寒苦もの、或は少壯努力、攻苦茹淡時は、老大には必ず安富尊榮なり。幼少の時、榮耀榮華に誇るものは、必ず困窮難厄する、是れは世間の常人も讀書の人も皆知る所の屈伸なり。さて、此屈伸天地陰陽の常理にて、屈よりは伸を感じ出し、伸よりは屈を感じ出す。一生の屈伸あり、一年の屈伸あり、一月一日の屈伸あり。一年粗服粗食を忍んでなす時は、翌年は美衣腴食を得るもの也。一年酒色に放肆なれば、翌年は疾病にて酒色を禁ぜざれば叶はざるに至る。今日刻苦して、家業を勉勵すれば、翌日は間暇を得て、逍遙遊樂する事を得るものなり。今日怠惰放肆淫聲美色に耽樂すれば、翌日は或は災難、或は事用出で來りて、忙閑煩劇に至る。皆屈の伸を感じ、伸の屈を感じるなり。天下常屈の理なく、又常伸の理なし。彼昏而不知もの、泰然として倨慢なり、侈然として放肆なり。其意衆人の上に伸ぶ。是れ豈屈を感じせざらんや。是れ終には家を敗り、身を亡し、令終を得ざるの基なり。古今亡國の君も、敗家の子弟も、皆伸よりして屈を招くものなり。酒宴遊興も、醉醺して歌ひ舞ふも、皆情欲の縱肆に出でて伸なり。されば屈を受くるの理あるを悟

克己復禮一私欲に克ちて天理にかへるをいふ
箠瓢屢空一箠は小箱飯を容る器瓢は飲器なり
飲食に窮するをいふ

るべし。屈首受經、屈節讀書、皆屈なり。されば立身興家の伸あるを知るべし。喫欠忍苦、屈の第一は飲食衣服居住の意に満ざるを第一とす。聖人不耻惡衣惡食、食無求、飽居無求、安、皆屈を教へ給ふなり。これのみに非ず、凡聖人の明德は屈に非ざる者なし。恭者不倨なり、敬者不慢なり、謙者不盈なり、讓者不爭なり、儉者不侈なり、節者不過なり、約者不肆なり、和者不乖なり、順者不違なり、皆屈己者なり。懲忿窒慾も屈なり、改過遷善も屈なり。されば此諸明德にて、身なれば修まり、家なれば齊ひ、國なれば治まり、天下なれば平らかなり。是其伸る所なり。さて、是れを孔子の教に求むれば、言々語々皆皆屈伸の理なり。克己復禮は屈なり、天下歸仁は伸なり、敬恕而行は屈なり、在家庭邦無怨は伸なり、察言視色慮以下人は屈なり、在國家必達は伸なり。言忠信行篤敬は屈なり、道行於蠻貊之邦は伸なり。居處恭、執事敬、與人忠は屈なり、道行於夷狄之國は伸なり。顔子の如愚以能問不能以多問寡は屈なり、亦足以發は伸なり。箠瓢屢空は屈なり、賢哉庶幾乎は伸なり。仲弓の居敬行簡は屈なり、可使南面は伸なり。夫子の溫柔恭讓は屈なり、所到之邦必

妹姫—美姫

康寧—極めて平穩なるをいふ

聞^き其^ま政^{まつりごと}は伸^のなり。孔孟の徳一時に屈して、千萬世の下に伸ぶ。是亦屈伸の大なる者なり。諸徳之基^{もろみ}。衆善之本^{しうぜん}は孝弟の二なり。孝は親に屈事するなり、弟は兄に屈事するなり。屈せざれば犯^{をかす}上^{かみ}なり。論語開卷よりして、屈伸の理に非ざることなし。さて、王侯貴人は萬事意のまよになる者故、美衣腴食麗妾妹姫金殿玉樓よりして、出入動作豫怠宴安、屈する理に出づること無くして、皆是れ伸の事なり。故に或は短命、或は病身、或は子孫血胤を斷絶する類の屈を感招す。其最も甚しくして情欲を縱肆にして、意の儘なるものは、秦皇、漢武、唐玄、宋徽の如くなる時は、天下亂亡をも感招するなり。さまでには至らずとも、災害の屈を受けざる事を得ざるなり。故に王公貴人は別して、喫^{きつ}欠^{けん}闕^{けつ}ことを心得たまふべき事なり。飲食衣服、なるべき丈は粗惡なるべく、さて、或は學問、或は藝術、或は政務、己が心に苦しと思ふことを、勉強して爲し給ふべし。是屈なり。或は賢者識者の長物語、又は講論の言、又は諸臣の諫争上書など、面白からずと思ふことも、勉強して聞き給ふべし。是れ屈なり。十盃飲む酒を五盃にして止む、十度御すべき愛姬も五度にして止む、十回出る遊獵も五回にして止む、是れ皆屈なり。屈は伸を感招す。されば一身も康寧なるべく、壽命も長久

なるべく、國家も安富尊榮なるべし。人主にては、漢文宋仁の恭儉は屈の理を得給へるなり。されども是屈伸、上下尊卑の差別なし。天地陰陽往來の實理なれば、天地の間に生を受くるもの此理に漏ると云ふ事なし。此理を悟り得れば智者なり、此理を知らざれば愚人なり。智愚賢不肖の別は、此理を知ると知らざるとに在ること也。是れ聖學を講ずる第一の義なり。

行儀を正くするは屈なり、福の伸を受くべし。躍りはね躁ぎまはるは伸なり、禍の屈を受くべし。天道を畏れ鬼神を敬するは屈なり、是れ亦福の伸を受くべし。天道を侮蔑し、鬼神を輕慢するは伸なり、禍の屈を受くべし。さて、富貴に生長する人は、我不^{われ}知^しして伸る處多きものなり。各別に心得をよくして屈する事を學ばざれば、災禍を免れがたき也。

一日本にて奢侈を極めたる人は、御堂關白平相國豊臣大閣三人なり。御堂殿も、四男にて、少き時は麥飯海鱺を食ひたることある人なり。淨海入道の少き時は、繼母の池の禪尼にいちめられて、某の中納言の家へ、もらひ食に日々行き給へること西光法師の言るにて知られたり。(盛衰記) 豊公の卑賤困窮は、女童部も語り傳ふること也。皆

御堂關白—
藤原道長—
平相國—清
盛剃髮して
淨海入道

宇治殿 | 頼通

大屈より大伸を生じたる人なり。されども御堂殿の榮耀奢侈を極められて、其子の宇治殿、後三條院の英明に行逢ひたる故、藤原氏の權、頼に挫屈せり。道長にて藤原氏の盛此に極り、其衰も亦此に始れり。淨海入道の奢侈榮華を極められて、子孫は西海の波濤に沈溺せり。豊臣關白も榮華汰侈を極められて子孫滅亡せり。皆是れ大伸の大屈を感招するものなり。されば、王公貴人の大福大榮を稟らるゝ人は、各別に心得を能せざれば、或は常身に災害あり、或は子孫不振に至る。屈伸の理に通ずる者、世に其人ありや無しや。

一人を遇して、恭敬の誠を盡すは屈なり、其人必ず愛悦するは伸なり。道を行くにも、人を廻避するは屈なり、其人必ず悦喜するは伸なり。人に遇して倨傲不遜なるは伸なり、其人の怒り怨を受けるは屈なり。道にて人を逃避せしむるは伸なり、其人の怒り怨を受けるは屈なり。一言一行皆屈伸の理ありて、道を知る者は屈を知るものなり。能く屈する人は福祿の伸を得ざることなきは、天地古今の常理なり。古の聖人克己制欲、皆此屈を天性に得給へるなり。

一古今の名臣の奏議を見るに、儉約質素を説かざるは無し。魏徴の上疏にも、第一に節

慎刑 | 刑罰を慎しむ

儉慎刑とあり。又十漸の疏にも、太宗の儉約朴素終始弗渝と仰せられたるを第一に説けり。天下の治も、一身一家を守るも、唯儉約の一字にあることなり。縱欲肆情、奢侈華靡なるは、一身一家にても、國天下にても、小なれば衰敝の本、大なれば滅亡の基なること、千萬世必定の理なり。

董仲舒 | 前漢武帝の時の人 賈誼 | 前に見ゆ

一漢にては董仲舒の三策、賈誼が痛哭流涕長大息の疏、唐にては、陸贄が奏議、劉蕡が策對、皆一代の大文章にて世人の知る處なり。さて、南北朝二百年の間、君は暴君のみ多く、臣にも殊て純良の臣なく、大將も宰相も人君も令終の少き世にて文辭も四六の惡習ゆる、讀むに厭ふ愚拙鄙俗の極なり。然るに一代に一篇の好文章大文章ありて、文辭も其時にしては、卓乎として傑出し、さて、其所言の義理は、古今政治の龜鑑なり。今其目を掲げて後の人に告ぐ。第一には宇文周の蘇綽が時事六條、同じく樊遜が陳時宜疏、劉宋には周朗が讜言疏、蕭齊には崔祖思が啓陳政事疏、蕭梁には賀琛が陳時事封奏、元魏には李彪が封事七條、高齊と陳には一篇の如此なるものなし。以上の六篇を一卷の書と爲し、人君は常に座右に置き給ふべし。經書深妙の理は悟り難くとも、此六篇にて今古政治の弊も能く知れて政事の如此にすべしと

龜鑑 | 手本の意なり龜は疑を決し鑑は物を辨す

教化—教を以て民を化する事
賦役—人民を使役する事

信屈聲牙—文字難澁にして讀み難きをいふ

云ふことも能く分明なり。學者も能く是を讀んで人事治道の切實なるを知るべし。此六篇は實に萬世の龜鑑にして聖經の羽翼とも云ふべし。
一蘇綽が六條は、一に治心、二に敦教化、三に盡地利、四に擢賢良、五に郵獄訟、六に均賦役なり。さて、正心誠意などの云ふことは、宋の程朱二先生の功の様に、宋儒以來言ひ習はせども、蘇綽が治道を説くに第一に治心清心を以て要務とす。道義の根源、政事の本元を知れりと云ふべし。唐の古文は、元結に起りて韓柳に成る。宋の古文は、柳開穆修尹洙蘇舜欽に起りて、歐蘇に成る。六朝の惡習は韓柳歐蘇の功にて消滅して宋元明清古文の世界となりたり。されども其根胎を尋ねれば、此蘇綽より始れり。宇文泰を輔けて周の天下を起したる時に、六朝の文、綺麗浮華なり。其弊を改革せんとて、周書の大誥に擬したる詔一篇を作りて、天下に示せり。勾章棘句にて信屈聲牙、樊宗師の文に近けれども、六朝の弊を矯んと云ふの志なり。されば散文平文を要とする古文の一脈も、正心治心を旨とする古學の一脈も、蘇綽より開きたるなり。周禮を悦びて、其官名などを用ひたるは、王莽王安石と其愚謬を同じくすれ共、一體は卓絶の見解あるものにて、其六條の文も四六などの輩に非ず。感服すべ

梁武—梁の武帝

き人なり。

一右六篇の内、賀琛が梁武へ封奏せし文に、役人の貪殘にして廉白なるもの罕なるは、風俗の侈靡にて然らしむ。さて、淫奢の弊、其事多端なれども、其尤なる者二條を擧ぐと云ひて、其二條は飲食料理の奢豪と、歌姬舞女の歡娛なり。妙と云ふべし。
一宋の徽宗の奢侈にて朱勔が花石綱（舟十艘を一綱と云ふなり）にて南方の民を苦しめたる事は、宋史、宋通鑑にて明なり。明の神宗の貪欲にて、稅使礪使の四方に出で民を苦しめたることは明史に詳なり。さて、小吏にても、都を出ると上の威を假りて下を殘虐すること、古今政治の通弊なり。南齊の蕭子良（竟陵王が）陳臺使勞壤疏に如畫に説盡せり。漢唐宋明四代の史書にも、かく詳明に言ひたるは無し。是れも一篇の重寶なり。

一古の聖人は、天道鬼神を畏敬し給ふ事、詩書の二經にて明白なり。天道鬼神を畏敬するは、吾道の大本なり。兩漢の學者は此意を假初にも失はず。是は秦無道にして天下を并呑したれども、十五年にして亡びたり。王莽無道にして天下を奪ひたれども、是亦十五年にして亡びたり。無道なる者天命の所不與を眼前明白に見知り聞知りたる

洪範五行の
學—洪範は
書經の篇名
其中に木火
水金土を説
けり
空虛寥廓—
前に見ゆ

識—預言な
り
瑯琊—地名
なり

故に、自然と天道鬼神を畏敬することを知れり。洪範五行の學、災異を説くこと小小は誣罔に似たれども、天人相與する間の遠からざるを知るに足りて、諫争の種子にもなりて排斥すべからず。さて、學者の天道鬼神をも知らず、畏敬の心をも亡失せる、其根原は、曹操司馬懿の二人詭譎邪惡なる天性のものにて、其權謀詐術を逞して天下を奪へり。是より天下の萬事、皆人の智力でなすべく、天は空虛寥廓にして、人事には關涉せざるものと、其世の學者は思ひ誤りて、兩漢學者の氣習蕩然として地を拂へり。さて、其曹操の後僅に四十餘年天下を領すれども、文帝明帝二代のみにて、齊王芳より後の様を見るべし。仲達が後も、武惠懷愍四代僅に五十六年天下を領すれども、武帝一代而已にて、惠帝より後の様を見るべし。元帝は牛繼馬の讖、瑯琊小吏牛金の子なれば、仲達の血胤には非ず、始皇王莽の天下と同じこと也。兩漢の四百年と比類すべきに非ず。曹操が自叙令（建安十五年）に性不信天命之事と云へり。開祖の君の言如此、其世の學者の天道鬼神を侮蔑する自然の勢なり。

一曹丕は無行の文人にて、父の妾を我妾とする程の者なり。太后（曹丕の母）曹丕の大病的時、其寢所へ入て、始て是を知り。狗鼠も不食汝餘と嘗りたり。甄皇后二人

王弼何晏—
前に見ゆ清
談に耽りし
人なり

を曹操曹丕曹植三人にて争ひたるを見ても知るべし。禮法名檢を好まざる天性の人故其風下に移りて學者虛無清談を悦ぶ世界となれり。晋の范甯の王弼何晏を責れども、是は第二著にて、王何竹林となりたるは、實は曹丕を罪人の巨魁とする也。

一後漢より文章衰へて卑弱になりたりと云ふ。されども三國の時も文名なき人の文は、西漢の氣習も略存して讀むべし。唯曹植の文は、儷偶冗長讀むに耐へざる拙惡の文なり。當時にては、是を第一の名文人と思ひ悞りて、陸機などは是を模擬し。梁陳徐庾に至て其拙極れり。されば曹操より學者天道を畏敬することを忘れ、曹丕より學者禮法を侮蔑し、曹植より四六の惡文學者の肺腑に傳染し、聖人の道、古文の法、父子三人にて微塵とはなしたり。世の學者は曹魏の三大罪を知るや、弗知や。

一王安石が天變不足畏。人言不足信。祖宗之法。不足法。三不足の論（十一）仁宗一萬言書）千古の罪言たることは、人々知る所にして辨斥に足らず。されど後の世にも、天變を不畏人主も人臣もあれば、王安石が再來と云ふべし。故に辨ずるのみ。先づ天變を不畏時は人主にて在下にても、畏戒の心を失なふ。從來天變を不畏道理あらんには、胤征に先王克謹天戒とはなぜ言ひたるや。（安石は偽書をも取る

妖孽—わざ
はひ

非僻—誤り
たること

人なり)大雅にも敬^{けいす}天之怒^{いかりをつとしむ}敬^{けいす}天之渝^{かはるを}とはなぜ言ひたるや。無逸には畏^て天命^{をみづから}自
 度と云ひ、周頌には、畏^る天之威^をと云ひ、孔子も畏^る天命^をと云ふ。天變無用にして不
 足^{るに}畏^{るに}ものならんには、春秋を作り給うて、三十六の日食、星隕^{おちるいしあり}如雨^{おちるいしあり}。隕^{おちる}石^{あり}于宋^に。
 隕霜^{おちるしもす}不^{おちる}殺^{からさまめをり}菽^{はいみのる}。李梅實の類を丁寧^{はんぶく}反覆して記し給へるは何の故ぞや。是皆周書の降格
 にて、皇^{くわうてんしやうてい}上帝^{より}より人君の邪惡を匡正^{きやうせい}に降し給へる妖孽なり。董仲舒の對策には、
 天は甚だ人君を愛し給ふ故、妖孽を下して戒め給ふと云へり。尤も至極の理なり。是
 乃^{つよしむてんかいを}謹^{けいする}天戒^{の所なり}の所なり。敬^{けいする}天之怒^{いかりを}の所なり。畏^{おそる}天命^{の所なり}の所なり。人主にても、又は
 在下^{ざいか}のものにても、妖孽ある時は、懷々然として戒懼^{かいくけいしん}敬慎^{して}、身行^{しんかう}の邪惡、政治の
 非僻^{ひへき}を改正すれば、妖不^{あやふ}勝^{かた}徳の道理にて、妖孽より却て興隆^{こうりゆう}を生ず。大戊の桑穀^{さうこく}、
 武丁の响雉^{おうち}是なり。然るを天變ありても、地妖ありても、漫然として不^ふ省察^{せいさつ}、侈然と
 して放肆なれば、天の必罰^{ひつはつ}を蒙らざることなし。亡國の君、敗家の子弟皆如此。天
 地は人の父母なり。天變地妖は父母の怒なり。子たるもの、父母の怒には、恐懼^{きやうく}敬慎^{して}
 せずんば有るべからず。迅雷風烈も、變^{へんじ}色^を戒懼^{するは}、聖人の法なり。是は例年に
 も有ることなり。夫^{それ}すら如此、まして星^{ほし}の如雨^{ごとくあめのおち}に隕るの、石の隕つると云ふ如き、

戒懼すべきの尤^{もつこも}なり。然るを不^ふ足^{たら}畏^にと云ふ時は、天戒^{てんかい}は無用に屬す。是を墻破^{かきやぶ}の
 無法者と云ふ、聖人の道理は夢にも不知^{しら}人なり。其人一人をして天下の權^{けん}を執らし
 むるに至れば、宋の天下の滅亡^{めつぼう}せるは神宗の大罪なり。
 日食地震大風大雷大火洪水の類、星變等までも、戒懼すべきの尤^{もつこも}なるもの也。
 一程朱の天は理也、鬼神二氣之良能、造化之跡と云へるも信用すべき事に非ず。天地鬼
 神を畏敬する聖人の意には非ず。程朱の學流は、必竟無鬼の說に至る。今清朝の宋學
 者は、無鬼の說を云ふと、紀昀^{きいん}(曉嵐)の云ひたること見ゆ。程子も人を評して言^{いふ}有^{あり}
 鬼神^{きんせん}惑^{まど}矣。と云ふ。されば伊川の心中^{しんちゆう}に無鬼の說あり。故に末流の弊は、阮瞻^{けんせん}の
 無鬼論に陥るなり。天者、萬理之所^{ばんりりのところいづる}出^で。鬼神者、二氣之靈^{にききのれい}。造化之妙^{さうくわのめう}などと云はん
 には繫辭の意にも叶^{かな}ふべきや。さて、天地鬼神の善には與して不善には與せざること
 を、能^{よく}々^{よく}悟り得て、一念の善、是天地鬼神の祐助^{いとうじよ}あるを知り、一念の惡、是天地鬼神
 の冥罰^{みやうはつ}あるを知り、言行^{げんかう}共に邪惡に涉^{わた}らざる様に、念々^{ねんく}忘れざるもの、是能^{よく}天道^を知
 り鬼神を敬畏^{けいゐ}する人と云ふべし。まして家國の政事、天道鬼神を畏敬^ゐせずんば有るべ
 からざる事なり。

藐之—藐は
輕んするな
り

一君子の三畏に、畏_二大人_一とあり。此大人は文言の大人に非ず、孟子の説_三大人_二則藐_一之の大人にて、王侯貴人を云ふなり。王侯貴人を、天命聖人同様に畏れ敬ひ給ふ聖人の心を知るべきなり。繫辭にも崇高莫大_二於富貴_一と仰せられたり。王侯貴人は天地神明と同じもの也と知るべし。後世天下を有つ人は堯舜の徳なしと云ふとも、福祿は堯舜と同じ。且天下の亂逆を止て億兆の臣民を撫育するの功德、天地にも均ければ、堯舜の徳なしとも、其功は堯舜に近し。されば福祿堯舜と同じく、功德堯舜に近し。天地神明と同じと云はんに誰か不可なりとせんや。後世愚昧なる天子にても、稱して聖と云ふこと當れりと云ふべし。聖人は王公貴人の、天命聖言に均しきことを知り給ふ故に、並べ稱して三畏の一となし給へり。然るに世の學者、己の小々の才智文藝に誇り、王侯貴人も蔑如して無學となし、無能となし、不智不才なりとす。されど學者の文學、何の功德ありや。其著述する所、宋儒の著述の如く、天下の人をして惡を沮みて善に勸ましむるや。予今の學者の生民に功ある、道二が心學の人を善に導くの功に彷彿せるをも見ず。されば幾件の古事を知り、幾字の文義を知るに過ぎず。其文辭も人の一笑を博するに過ぎず。其甚しきに至ては、人の邪思を生じ、人の逸志を肆_二にせし

三畏—畏_二
天命—畏_二大
人—畏_二聖人
之言—論語
に見ゆ
彷彿—似た
ること

抗禮—對等
の禮を執る

むるのみ。天地の間に寸分の功なし。しかれば王侯貴人の一天下の人を撫育し、一國の人を扶助する大功德に比すれば、己が無徳無功なるを知るべきなり。吾門の學者は、王侯貴人は天地神明に均しき者と云ふ事を知りて、誣蔑の心を生ずべからず。是孔夫子の家法にて、天地の大道なり。されど王侯貴人なりとも、天下を亂り國を亡すの人は、各別の事なりと知るべし。
一會子の晋楚之富不可_レ及。予何畏_二彼乎_一と云へると、田子方の貧賤者傲_二人と云へると、孟子の説_三大人_二則藐_一之と云へると、荀子の志意修_二則傲_一富貴_二道義_一重_二則輕_一王侯_二と、此四條同意なり。されど是は天下の大道には非ず。さるが故に孟子の會子の語を引給うて、其豈不義而會子言之乎。是或一道也と、のたまへるにて知るべし。天地の間に、最第一の貴きものは仁義なり。仁義の貴きも、富貴の貴きも其理は一なり。さるが故に孟子も、貴_二貴_一尊_二賢_一其義一也と仰せられたり。されば身に仁義の道德を兼備せる者は、王侯貴人に抗禮せんも何の不可あらん。今世の學問文藝などにて、王侯を蔑如せんは、天下の戮民なりと知るべき事なり。
一何を以て道は天地自然に出でたるを知ると問はど、經典の證左を引だにも及ばず、唯

稠人—衆人

律義—物が
たきこと

一事を以て覺るべし。數十人稠人廣坐の中に、一人の高慢倨傲不遜無禮のもの有らんには、同坐の數十人、皆其倨傲不遜を惡まざる者なし。倨傲不遜は不徳無道たることを知るべし。又一人の慙懃丁寧律義柔和なる者あらんには、同坐の數十人皆其謙退恭順を愛すべし。謙退恭順は聖人の大道なり、君子の美德なり。是にて道徳の天地の自然なり、人性の自然なることを知るべし。孝不孝、忠不忠、仁不仁、義不義、皆此と同じ。さて、衆人の一同に惡むものは天罰をうくる人なり。衆人の一同に愛する者は、天命を受たる人なり。皋陶の宣へる、天命有徳、天討有罪とはこの事なり。謙恭篤實にて人心の愛敬する處は、天命の歸する處にて、人心と天命と一同たることを知るべし。

一何を以て人心天命と一なるを知ると問はゞ、皋陶謨泰誓を引くにも及ばず、先づ吾心を知るべし。此心と云ふもの我造作し出せるにも非ず、父母の造作せる者にも非ず。自然にして然る者は、人造に非ずして、天造なり。人心なるもの天造なるときは、人心に是は善也と愛慕するは、天神の其善を愛し給ふなり。人心に是は惡なりと惡み忌むは、天神の其惡を惡み給ふなり。人の本心妙明にして是非善惡に惑はざるものは、

妖氣—悪い
氣

四海—九夷
八狄、七戎
六蠻をいふ
居るところ
皆海に近き
によるとい
へり

涓埃—極少
をいふ

我には非ず、天地の鬼神なりと知るべし。されど人欲混亂して、是非も善惡も蒙昧なるときは、天地の神明に非るのみか、又我本心に非ざるなり。此心を以て天道天命なりと思はんは大なる誤也。それ等の心は天地の妖氣にて天地間の惡魔なりと知るべし。一我何を以て天地の間に食息して、無事安穩なりやと云へば、父母の養育生長の恩なり。父母の我を易く長育せるは如何にと云へば、太平の徳化にて、四海凱安なるが故にて、是は、東照宮の神恩なり。先祖十代太平の世に住して、子孫を長育すること、孰れか東照宮の神恩に非ざらん。今の世に視息する者、此神靈の大神恩を忘却して、非義無道を爲して、太平の治に妨害をなすものは、神罰のかるべからず。さて、保元平治元弘建武、別しては、應仁以來、天下戰爭の區となりしを、如此、太平無事、四海安樂の天下となしたまへる、古人の云へる、真人出でて、四海一なりと云へるに同じき、東照神君の天地の間に生じたまふは、如何にと云へば、是は天照大神の神徳にて、此國を夷狄禽獸になし給はざるに因てなり。されば父母の恩を思はゞ、東照神君の大神恩を忘却すべからず。東照宮の神恩を思はゞ、天照大神の神恩を忘却すべからず。今の世に生るゝ者は、此二神へ涓埃なりとも報恩の念を忘るべからざること也。

餘慶—殘したるよき幸

創業—大事業を完成すること
守成—父祖の成したる事業を落さ

一 父母先祖より爵祿財寶を傳へて、安坐して美衣腴食する者は、是父母の恩なりと思ひ、獨力にて家を興し身を立つるものは、露塵も父母先祖の恩徳なしと思ふ、是大なる僻言なり。如し父母先祖無道非義ならんには、我身は海翻に遭て死すべし。先祖の餘殃にて天罰を蒙りて、天地の間に食息すること不能。されば爵祿財寶を譲り與へざるも、獨力にて身を立て家を興すは、父母先祖の大非義大無道もなき而已ならず、何ぞ、陰徳陰功の餘慶にて、子孫の身も立ち、家も興ることなれば、是皆父母先祖の恩にて、獨力にて起したりと思ふは、やはり父母先祖の與へられたるもの也。先祖非義の財寶を傳へて、不肖の子孫忽ちに滅亡するを見れば、獨力にて身を立て、家を興すの才力智慧を得たる子孫は、先祖の譲り物、金銀財寶よりは大なる物を傳はりたりと知るべきこと也。

一 創業守成の難易は、太宗の御時に房立齡魏徵の論ぜしにて明白なり。されど創業の難も守成の難も同じ事にて、創業の人と守成の人と、優劣ありとも、同じ福祿故に同じく天下國家を保つことなり。天下國家を能く守りおほせる人は、天下國家を興す人なりと思ふべし。天下にても國家にても、金銀なりとも、田畠なりとも、能く保ち

すに守りゆくこと
守文—前に見ゆ守成には文を以てするなり

壽天—壽はながいきする天ははやじにする

功利—自己の利益
菜根を咬む—まづきもの食ふ意

能く守るの艱難は、徒手創業の艱難に異なることなきもの也。唯繼體守文の君、繼業守成の人、先祖の福祿にて我不知奢侈に長ずる故、敗亡に至ることなり。天下にも國家にも、金銀田畠を守る身にも、破散滅亡を招くものは、外にはなし、奢侈の二字にあり。天下を亂り國家を亡すの大敵巨寇は、夷狄にも非ず、叛賊にも非ず、我不知世の風俗に漸靡する奢侈に在りと知るべきことなり。

一 命に壽天あり、厚薄ありて、養生せるとして長壽なるに非ず、儉素なりとて大福を得るには非ざれども、人の第一の智は、攝生を能くして年壽を延すと、儉素を守りて家業を豊にするとに在り。然るに世の學者、天命ありとて淫酒を肆にして攝生の道を知らず、天命ありとて汰侈放佚にして理財の道を知らず。此心を以て子弟を教導す、聖人の門を去ること遠甚にして、人を誤り世を誤ること少なからず。此等の人は破れ大乘と云ふべきものなり。さて、攝生理家の道も、天下國家を平治するも同じことにて、其要は約の一字にあることなり。
一 放蕩淫縱の心には神もやどり給はず、權謀を肆にし詐力を奮つて功利にのみ外馳する心にも神はやどり給はず。唯菜根を咬みて寒苦を忍び、本心に復して君父の恩を思

ひ、天地鬼神の冥鑿に背かざる事を思ふ心には、神とごまり給ふべし。此に止りて萬事に處置せば、事々皆其至當を得べし。左傳にも此心不爽昏亂百度と云へるは尤の事なり。今の人、精神昏亂にして書を読み道を講じ、又は政事に處置す。百事の紛亂すること尤のこと也と知るべし。

一父母は小天地なり、天地は大父母なり。

一男女交媾は人事なり。されど子の生ずるあり、子の生ぜざるあり。人力の及ばざる處にして、自然にして然り、是天なり。天とは人事の自然にして然ることを云ふことなり。

この故に孟子莫之爲而爲者天也と仰せられ、宋儒は人事盡處皆天と云はれたり。縦令男女交媾して子を生じたりとも、男子を生ずるあり、女子を生ずるあり。是

人力の及ばざるなり。男子を生じて、其智愚賢不肖、女子を生じて、其美醜、是人力の不及所なり。耕稼耨耘は人事なり。歳の豊凶は陰陽の和不和にありて、是人力の

所不及、是を稱して天とは云ふなり。是故孟子も毎度非人之所能天也。とは仰せられたり。狡黠なるものは、權謀詐術を以て世を涉り、間其事をなしおほせたる故、

世間萬事、皆我奸智に成る者の様に思ふは、淺間しき愚人なり。世間の萬事は皆是天

耕稼耨耘
草を刈り田
畑を耕やす

の所爲にて、成敗利鈍天意に非ざることなし。されど人事を盡さずして、天々と云は

んには、耕作せずして豊熟を願ひ、交接せずして子を願ふに同うして、是亦以の外の

僻ごとなり。盡人事而俟天命の一語、千萬世に涉て不刊の妙言なり。

一聖賢の心とて外には非ず、唯國治さまりて民安からん事を願ふのみ。天地鬼神の心も

亦同じ。然るに天子にても、庶民にても、己の分を喻て華靡奢侈に流るゝは、第一困

窮の源なりと云ふまでもなく、天地に對して不冥利の事をなすなり。不冥利の極は必

ず亂敗を招くの理なり。故に聖賢の克己之欲、尙儉素抑華奢、たまふは、聖賢の

教戒と云ふにはあらず、皇天上帝の教戒なり。民を治るもの、此理を知らずんば有べ

からず、人を教る者、此義を講ぜずんば有るべからず。然るに此理に暗くして、上奢

侈を好み、下に在ては盜賊となる。此に至て、上は刑罰を峻にせざることを得ず、下

斂となり、下に在ては盜賊となる。此に至て、上は刑罰を峻にせざることを得ず、下

は亂逆を起すに至れり。故に孟子の仁政を説き給ふ、省刑罰薄稅斂の六字に過

ぎず。是は仁者の務て汰侈を禁じて儉朴を事とする故に、上の財用乏からず。財用乏

しからざる故に、稅斂薄し。稅斂薄きが故に、民困窮せず。民困窮せざる故に、亂逆

しからざる故に、稅斂薄し。稅斂薄きが故に、民困窮せず。民困窮せざる故に、亂逆

しからざる故に、稅斂薄し。稅斂薄きが故に、民困窮せず。民困窮せざる故に、亂逆

教戒—教諭
訓戒

峻にす—嚴
酷にする

もなく、盜賊も少し。逆賊少きが故に、刑罰自ら省けり。仁政とて此外にはなきこと也。千古の亂敗、奢侈の極の困窮に生ぜざる事なきを見て、聖賢儉徳の尊を知るべし。されど奢侈とて他物には非ず、人心邪欲の所爲なれば、天下治安の源は、克己の二字には出でざるなり。

倭幸—倭人を寵愛すること

建文帝—太祖の孫

燕王—太祖の子永樂の天子

藩鎮—前に見ゆ

家久—義弘の弟

天下國家の亂亡は、欲の一字に生ずるなり。女寵も倭幸も土木も甲兵も、皆々欲に生ず。奢侈大修大孰れか欲に非ざる。天理人欲の學、講明せずんば有るべからず。一大友の皇子(天智嫡)天武天皇(天智弟)と天下を争ひて、大友滅びたるは、明の建文帝燕王と天下を争うて、建文亡びたる靖難の亂に同じ。共に叔姪の争なり。孝謙稱徳、淡路廢帝までは、天武の血統なれど、光仁桓武よりは天智の血脈に復して、天武の流は絶えたり。一後醍醐帝、武家を滅し給ひて、公家天下と云ふこと、三年を経ずして、尊氏叛して天下又武家の有となる。唐憲宗元和十一年までに、藩鎮を滅して天下一統せり。十四年に宦官に弑害せられて、其翌年穆宗の長慶元年より、藩鎮又勃興して舊の如し。是亦彼我同様の事なり。

宗徒—重立ちたる

馬場—信房

山形—景昌

悪左府—頼長

一永祿三年(五月十九日)尾強の桶狭間にて、信長公、今川義元を討取給ひしと、天正十二年、肥前の有馬にて島津中務大輔家久龍造寺隆信を討取りたると同様の事なり。今川龍造寺は四萬の大軍、島津は八千の兵にて、海に船して横合より旗本へ切込で撃取たり。信長公の兵は五千にも満たず、皆不意を撃て勝利を得たるなり。天正三年長篠合戦に、武田の家臣、勝頼の無道を憤りて、馬場山形を初めとして宗徒の者ども數を盡して討死せると、天正六年(十一月十一日也。八月十二日ともあり)日向高城耳川(高城川とも)の合戦に、大友家臣、宗麟の無道を憤りて、吉弘、戸次、臼杵、志賀、田北、一萬田など云ふ宗徒の者共數を盡して打死したると、是れ亦同様の事なり。武田は天正十年に滅びたり、大友は大正十四年に亡びたり。大友は、豊臣太閤の救を得て再興すれど、十四年の冬義統府内を出奔して一旦は滅びたり。

一死棋腹中に有勝著と云ふこと妙語なり。保元の亂に鎮西八郎爲朝の策を用ひられて、其夜御所を焼打にせんには、爲朝の言へる、火を逃るゝ者は箭を逃れず、箭を逃るゝ者は、火を逃れず、夜の明けざる内に崇徳院の帝位は定るべきに、宇治の悪左府の翌

南都—奈良

潜幸—竊か
に行幸ある
こと
匹夫の勇—
血氣にはや
る小勇

日南都の僧兵の五千人來るを待受て合戦を始めんとて其策を不用。翌日義朝に逆寄せられて、火を放たれて院方は滅びたり。是れ可勝軍に負けたる也。平治の亂に惡源太義平の議を用ひて、清盛熊野の途中にて變を聞いて狼狽して歸る所を阿部野へ馳向て撃んには、一舉に平家を滅すべきを、惡右衛門督信賴の其議を不用して、清盛は六波羅に歸り、天子六波羅へ潜幸なされ、上皇は嵯峨へ逃げ藏れたまひて、源家は朝敵となりて滅びたり。是も可勝軍に負けたるなり。是死棊腹中有勝著なり。爲朝義平不運にて亡びたれども、實は匹夫の勇のみに非ず、軍器をも知りたる、一代の英雄なり。義家の孫に如此の英雄を生じて、義仲義經の大功にて、賴朝天下を領するに至る。不可思議の事なり。

一人事を以て見る時は、如_ご此_こ。天道より見る時は爲朝義平の良策用ひられざる事、尤も至極の事なり。崇徳院は待賢門院の生み給ひて鳥羽院の嫡子とは云へども、實は皇祖白河院の、皇孫(鳥羽院)に妻はせんとて待賢門院を養ひ給うて、内々密通したまうて、懷妊し給へるに驚きて、急に鳥羽院と婚儀をなさしめられて、出生したまひたるは崇徳院なり。白河法皇の威光にて一旦は踐祚し給へども、鳥羽院も吾子に非ず、叔

美福門院—
近衛院の御
母
新院—崇徳
院
重仁親王—
崇徳院の子
富家殿—藤
原忠實
法性寺殿—
忠通
敗績—大に
まけること

父(堀河院の弟なり)也と云ふことは御存知なり。故に白河法皇崩御の後、失徳も坐しまさざれども、崇徳院を推おろして、近衛院を立てたまへり。是は美福門院の讒口に非ずして眞實の事なり。近衛院崩御の時、新院の咒咀なりとて、新院を深く忌み惡くみ、重仁親王を不立して、文にも非ず、武にも非ざる、後白河を立てよ、保元平治の亂を生じ、王家の權、武家に奪れ給ふ様になしたるは、美福門院の惡所行なり。されど性命を天地の間に受け給ふこと不正なれば、崇徳院の戰勝つて重祚し給ふべき理にあらず。扱又夫を輔佐せる惡左府、親の富家殿の愛子にて兄の法性寺殿をも蔑侮し以の外なる不義の人なり。皆天命の所不與なり。さて又平治の惡右衛門信賴は、文も無く武も無く、愚昧不肖のもの也。上皇の寵愛にて、勢を得て、天子上皇を幽囚して、自ら大臣大將となりたる程の妄人にて、夫を佐助する義朝は、三年前に父爲義の首を刎ね、諸弟を戮殺せる人なり。天命の可與所ならんや。是爲朝義平の良策忠謀不行して勝つべき軍に敗績して滅亡せること、人事にては可惜ことなれども、天道より見る時は、然らざることを得ざるの理なり。

一後白河法皇は、清盛賴朝に愚弄せられ給ひて、王家の權、武家に移りたること、清原

流亞一流を
つぐもの同
類の意
穀倉院一民
部省に屬す
る役所

一 蒸一目うへ
の女に通ず
ること
反正一天下
を正道に反
すこと
昭伯一公子
頑
恒牀一普通
の意

の頼業の言に此法皇は普惠帝の流亞なりと云へり。是にて能々分りたり。さて、此頼業は穀倉院別當、高倉院の侍讀なり。吾朝にて儒家の後世神と祭る者は、菅公と此頼業のみなり。頼業の廟は嵯峨の車裂明神なり。予京師に在る時、北野の聖廟へ七度車裂の祠へは兩度參詣したるは、吾邦儒流の祖師と尊敬せる故なり。

一 太子申生は驪姫の讒を不辨して死に就く、温恭君子の人なり。恭世子と謚せるも宜なり。されど是は献公の父武公の妾齊姜に悉じて出生せる子なり。其令終ならざること、必然の理なり。大塔宮護良親王は、後醍醐反正の時、大功を建たる當代の英雄なり。されど是は後醍醐の、皇祖龜山院の宮女民部三位に悉じて出生せる子なり。其令終ならざる事、必然の理なり。是にて崇徳院の御事をも了知すべし。

衛公子頑、嫡母の宣姜を悉して二男三女を生み、中興の君文公其一なり。是は怪しき事なり。されど左傳に初惠公之即位也。少齊人使昭伯悉於宣姜不可強之。(閔公二年)とあれば、恒體の悉報とも違ふ様なり。

一 衛宣公、太子伋の妻を奪ふ。(宣姜なり)數十年を経ずして、狄人滅衛たり。楚王太子建の妻を奪ふ。其子昭王の初に吳人入郢。昭王出奔す。唐玄宗壽王之妻を奪ふ。十

年の後、安祿山兩京を覆没せり。されば國天下に如此の事あるは、實は妖孽にて、亭蕙の出でけると同じこと也。一 遠き昔の、兄弟夫婦となり給ひたるは別論なり。近く堀河院の中宮篤子は、後三條院の第四女にて、父方の姑なり、年長於帝十九歳。二條の中宮妹子は、鳥羽院の皇女にて、是亦父方の姑なり。今は民間にても其等の事は爲さず。されば教の民を遷すは、如何様にもなるべき事なり。さて、又二代の後のことは姑く置て論ぜず。後宇多皇后始子は、後深草の長女從兄弟なり。永仁の初、龜山上皇密に通し給ふ。姪なり、子婦なり、父子聚麀なり。又後嵯峨の皇女とも云ふ。されば後宇多の姑なり、龜山法皇には姉妹なり。二條局と云ひしは、後宇多嬖之、世良親王、世尊法親王を生みたり。父子聚麀なり。三條局と云ひしは、伏見院嬖之、道燕法親王を生みたり。後伏見悉之、長助法親王を生みたり。是亦父子聚麀なり。龜山宮女民部卿三位は後醍醐悉之、祖孫聚麀なり。中葺の醜、閨門の穢如此。故に元弘建武の大亂を生じて王室は益卑微になりたまへり。可畏の甚しき也。一 後醍醐帝の准后を寵愛し給うて、其腹に出生し給へる義良親王を立給はんと思食せど

亭蕙一前に
見ゆ葦星な
り

從兄弟一
とこ

中葺醜一
葺は深奥の
ところ

梧窓漫筆 後編 卷上

義良親王―
後村上天皇
なり

も、關東より持明院派、大覺寺派、二流の帝王、十年更代の法を立て、我子に世を嗣せ給はんなど云ふこと思も寄らざることも也。故に北條家を滅さんと、御隠謀の念起りしなり。是れ元弘建武の大亂の根源なり。亂匪降自天。生自婦人。と聖經の言、萬世に涉て違ふ事なし。さて此准后の、尊氏直義の賄賂を納れて、護良親王を讒訴し、幽囚となし、直義の枉害せるに至ること、王室不振の第一事なり。其罪最深し。

宰相―參議

一義政將軍は子なき人也。弟の今出川の義視を家督に建んと申さるれども、義視固辭して受けられず。義政の、萬一男子あらば出家さすべし家を嗣ぎ給へ、と強て勸めらるる故に、義視も不得、止受けられたり。さて、義政の夫人は、裏松の宰相の女にて美人の譽あり。一旦義政の意を失なうて、天子の御所に勤められたる姑の部屋子となり給ふ。其内天子と密に通じ給ふ。無程義政の意解けて、又將軍の御所へ歸り給ふ。天子其別れに硯を賜ひたることあり。夫より懷妊して義尙將軍を生み給ふ。出家とせんことを惡みて、内々山名宗全を深く憑みて、義尙を託したまふ。是應仁兵亂の大根源なり。義尙學を好みて、近江の勾里の陣中にて講義を聽給ふ（勾里に三年在陣して

自贊―自ら
ほめたゝへ
ること

其地にて早世し給ふ）など、足利代々の將軍にはなき事なり。いかにも天子の御種と覺えたり。禍亂の將起の時は中葷の醜、閨門の穢より亂を萌す。亂匪降自天。生自婦人。と、大雅の言至妙と云ふべし。されば天子諸侯は朝政のみ公明正大なりとて自贊はなりがたし。閨門中の事を第一に公明正大になさざれば、聖人の治をなすことは叶はざることなり。一堯舜も四海困窮、天祿永終、と仰せられたるは妙なり。應仁記に應仁の大亂は起るべき事八箇條あれども、其八箇條よりは、其大本は義政の華靡なる事を好まれて、七度の晴と云ふ事を致されたるにて、天下の諸侯士民まで困窮し果て、人々亂を希ふ心より、此大亂を生じたりと記せり。奢侈華靡より困窮を生じ、困窮より變亂を生ずるは、千古一轍の事なり。されば國天下を有つものは、華靡は國天下を亂す大寇讐なりと云ふことを念々に忘れずして、上下の華靡に流るゝ事を嚴制して、困窮の源を防ぐべき事なり。古人の義政を詠じて、
東山風に塵くや茶の烟
晩年衰颯の趣を説き盡せり。予亦銀閣寺を詠じて、

衰颯―衰へ
さびしきこと

誰使皇都作棘叢
可憐銀閣東山寺

奢雲艷雨夢還空
一縷茶烟殘照中

粗豪—小事
に拘泥せぬ
こと
縝密—粗豪
の反對なり

一陳蕃の一室を掃除せずして天下を掃除すと云ひしは、豪傑の氣象にて、七十になりても、忠義の志、愴慨激烈の氣を失なはずして、宦官を誅せんとして害を蒙りたるは感賞すべき人なり。されども一室を掃除せずと云ひたるは、疏豪にして縝密の氣象を欠けり。後來愚暗不肖の竇武と同謀して事を誤るべき氣習、此時已に見えたり。大抵疎豪なる氣象は、王敦桓溫の氣象にして君子の所不取なり。

一竇武、陳蕃、宦官を誅せんと謀て害せられ、何進、袁紹、宦官を誅せんと謀りて何進は害せらる。外の大將軍董卓を召して宦官を刈り盡して後漢は亡びたり。李訓鄭注宦官を誅せんと謀て害せられ（文宗の時甘露の變）崔胤外の大將朱全忠を召して、宦官を刈り盡して唐は亡びたり。其事一轍に出るが如し。後漢黨錮の禍に、李膺杜密等を害して漢は亡び、宋の黨藉の碑に、司馬光呂公著の徒を排斥して北宋亡び、明の東林の黨議に高攀龍、周順昌等を害して明亡びたり。是亦一轍に出るが如し。漢明は賢者を枉害し、宋は賢者の徒を斥逐するのみ。漢明は一敗塗地、宋は再興す。殺

と不殺と天命長短の報、其驗如此

司刑の官吏
—罪人をあ
つかふ官吏
先表—前兆

一天地の間に貴き者は、仁心仁愛の心なり。是天地生生の氣なり。天下の政、此心を失ふべからず。一身の行も、此心を失ふべからず。これを存するを人道とし、此を失ふを虎狼とす。故に論語の初にも、節用愛人と云ひ、汎愛衆と云ひ、禮の哀公問には、古之爲政愛人爲大とあり。愛の一字の徹上徹下の道たるを知るべし。一昔より國に死刑の人多ければ、叛逆人たえずと云ふことを保元平治物語にか記して、昔よりの言習はせなり。左傳に所謂仁人之言、其利溥哉とは此等のことを云ふなり。小罪輕罰は、各別の事、死刑はなるべきだけ少くすべきこと、天子諸侯より司刑の官吏まで心得べき事なり。さればとて、惡民多くて犯死刑ときは、赦すべき仕方もなし。因て政事を正しくして民情風俗を厚くして、人々生を重んじて死刑を犯すもの無きやうにすること、政事の第一なり。犯死刑人の多くして死罪人の多き事は天下亂逆の興るべき先表なりと知るべし。一世に人を惠み施すもの有るを、學者舉て小惠なり、婦人の仁なりと云て、嘲り罵るものあり。以の外の誤なり。婦人の仁とは、韓信項王のことを言語にては人を憐みて、

豪髮—毫髮
の誤ならん

枕藉—いり
びたること

國邑を分ち興ふるには、印利不與と云つて、言をやさしく憐みて、人に物を與へざるを婦人の仁と云ふ。人に物を恵み施すは聖人の仁惠なり。乞食非人に一錢を與ふるも、堯舜の不虐無告不廢困窮の心なり。文王の先、鰥寡孤獨四者の心なり。如何なる平日は無道の者たりとも、乞食非人に一錢を與ふる、此一事は文王の心にて堯舜文王の化身なりと知るべし。文盲の者は是非なし。學者にて如此ことを言ふは、博覽多通、考据考證と云ふことに精神を奪はれて、豪髮も天地の事理に通ぜざる故に、終には如此の文盲の言をも云ひ出すもの也。學者も聖人を信奉して、正道を天下に明らかにせんと志を立てざれば、天より其鑿を奪て、邪見邪道に陷入すること、荻生茂卿らが如くになりゆく者なり。畏るべきこと也。

一坤の初六に、履霜堅冰至と。霜は陰の初て凝る所の者なり。君子を陽とし、小人を陰とす。男子を陽とし、女子を陰とす。是は女子や小人を寵幸して、其勢漸々に增長して終には君夫をも害し、家を亂り邦を亡すの禍を云へり。さて、又一身にとれば、陰を惡とし陽を善とす。小惡を畏れずして馴れ行へば、終には大惡となりて身家を亡すを云ふ。少年の酒を嗜て其心放蕩となり、花柳に枕藉して金銀にさしつかふる多し。

宗廟—先祖
代々のおた
まや

故、博奕にて一時に財寶を得んと欲し、是にて身家を没落し、果ては盜賊となりて天下の刑を犯す。霜の凝て堅氷に至るとは、此事にて世間に此覆車の轍を履む者極めて多し。

一坤の上六、龍戰于野、其血玄黃なりと。龍は陽物なり。是は女子小人の勢増長して、君夫をも蔑如し、其權勢の盛なる、君夫と紛らはしきに至ては、陰物の極、陽物の龍となれり。此にて君父も其憤に堪へずして相争ふに至る。相争ふに至ては、君夫も血を流し、臣妾も血を流す。立は天の色君夫を云ふ。黃は地の色臣妾を云ふ。血とは傷害の難を云ふ。高宗の則天を寵愛して其后妃をも殺され、其太子も害せられ、其宗廟社稷も滅さるゝに至るも、玄宗の祿山を寵幸して、兩京を覆没せられ、成都へ出奔せらるゝに至るも、後白河法皇の清盛を寵信して、後は清盛の爲に鳥羽の離宮へ押込られたるも、皆此霜の氷となり、龍戰流血の禍を蹈みたる物なり。

一乾坤は天地なり。屯に君道あり、蒙は師道なり。天地開くれば、君師の道を第一とす。武王の天、佑下民、爲之君、爲之師と云へる處なり。さて、蒙は上九に不利、爲寇、利禦寇と云ひたる事、誠に至妙の義なり。爲の字先儒夫子爲衛君乎の

三德—正直
剛克、柔克、

沈澗—酒に
溺るとなり

爲の字にて、助くると訓する者あり。妙なり。されど爲すと字のまゝ讀むも同義なり。天子諸侯の臣民を教へ導くにも、父師の子弟門人を教へ導くも、其惡心を拒み閉ぢて、善心へ歡め誘ふ様にすること也。洪範の三德も、大戴の抑則揚揚則抑(虞戴德)と云ひしも、孔子の進之退之のたまひたるも、孟子の陳善閉邪とのたまひたるも皆此ことなり。身家に害ある惡心惡行は皆寇なり。師範たる者は務めて其人に寇するものを拒み制して、其寇を助くべからざるを云ふ。天子諸侯の師範たる者は、此心得肝要なり。徐世勣が高宗の則天を皇后とせんと議せられたるときに、是陛下の家事と云へる一言は、寇を禦がずして寇を爲けたり。今世の學者など門人小子を導くに義理の正を以てせずして、高きは博覽に過ぎず、卑きは詩文のみ、傲辟驕志沈湎淫佚にして放肆なるを學者の能事なりとす。是を不禦寇して爲寇と云ふ。蒙に在て、此語最も妙なるに、王注傳義など解して此に至らず。漢魏傳注程朱理學皆々義理を盡さざる者なり。

一尙書に、無教逸欲有邦(皐陶謨)と云ふこと極めて妙なり。桀紂幽厲たりとも、淫逸をなすべし、嗜欲を肆にすべしと云ふ號令を出して人民に教ふと云ふことは無き

無慚—はち
を知らぬこ
と、轉じて
勝手氣儘の
振舞をなす
意

ことなり。まして、明王賢主に於てをや。然るに教と云ふは、教、柔、升、木と比喩するに同くして、上たるもの淫佚邪欲を肆にして、己を檢制することを不知れば、下たるものは、放佚無慚となり。貪欲無慚となること手を返へすが如し。上好之。則下必有甚焉者と、孟子の宣へる此處なり。是不教の教なり。されば堯舜率天下以仁、桀紂率天下以暴と云ふも、皆是身に仁を行ふと、身に暴を行ふを云ふ。故に大學にも其所令反其所好而民不從と云ひ、緇衣にも、民之從上也。不從其所令。而從其所行と云へり。人の上たる者奈何ぞ敬せざる。さて、逸とは豫怠游宴の類を云ふ、欲とは聲色玩好の類を云ふ。此方にて言へば、逸は酒宴遊興に長ずるなり、鷓鴣逍遙を好むなり。欲とは能狂言、三味線、淨瑠璃、傾城狂、妾狂、茶の湯、物數奇、の類を言へるなり。漢書王嘉傳には教を傲に作るは誤本に原けるもの也。

一又天工人其代之(同上)と云ふこと極めて妙なり。舜典にも、二十有一人、惟亮天功とありて、天功天工同じ。天工とは天官と云ふことなり。諸侯大夫も司徒司空も天地自然の官職にて無くて不叶もの也。司徒は民を司どる、司空は土地を司どる。無く

庶官—百官
といふが如し

直言—忠直
の言

ては一日も天下の事治まらざれば、此官、此職、天地自然に非ざることなし。さて、民を治る才ある者を司徒となし、土地を治る才ある者を司空となす。是を人其代之と云ふ。天の自然に代つて其官職を務るを云ふ。されども天性の自然にて民を治るに長じたるは、司徒と成るべき天命の人なり。天性の自然に水土を治むるに長じたるは、司空となるべき天命の人なり。天命有徳なれば、其才其徳の者を選んで其官其職に任ずるは、是天子の職なり。是を無曠庶官と云ふ。曠は、からあきと云ふ義にて、其才其徳なきものに、其官其職を與ふるは、是大切の官職をからあきにすると云ふものなり。鷹に魚を捕せ、鷓に鶴を撃たせる様の事、世間には多き者なり。是を曠庶官と云ふ。唐の玄宗の楊貴妃の兄也とて、楊國忠に四十一使を務めさせ、元の順帝の伯顔を用ふる官衛二百餘字に及べるの類、曠官の極と云ふべし。人君は己に媚び諂て己が氣に叶ひたりとも、人民に害あるものならば、退け去べし。己に諂屈せず、時には直言を入れて己が氣に叶はずとも、國家に利あるものならば、進め擧ぐべし。己が一身の好悪にあらすして、國天下の爲に人を好悪するもの、是を唯仁者能好人能惡人と、論語大學に云へる此處なり。庶官は天官なり。人君の己が私の

酗酒—酒に
性を失ふ
淫放—放蕩
穢々—五穀
みのる貌

物に非すと云ことを知らば、唯此天工の二字にて、天下國家は治まるべきことなり。一孝經に、古聖人之以孝治天下也とのたまへると、孟子の人々親其親。天下平と宣へると、共に至妙の言也。上孝を好めば下も亦必ず孝なり。孝子は必ず忠臣なり。凡そ人たる者孝心の深きものは、博奕、酗酒、淫放、争鬪の類、一切の惡事せざる者なり。人々惡事を爲さざれば、天下は治まり天下は平なり。且天地神明に對して孝徳ほど冥理に叶へるもの無し。上下冥理に叶へる世に亂敗のことあるべきや。されば人の親其親する時は、自天降康。豊年穰々たるは、必定の理なり。されども孝道も孝經の謹身節用。以養父母の八字を最も要とはすること也。一論語學而に、孝を論ずること數章あり。聖人の學は、孝を始とすることを覺るべし。爲政にも孝を論ずること數章あり。爲政以德と云ふ徳も、孝經を見るべし。夫孝者。徳之本也と有るに非ずや。されば導之以徳するも同じ。孝友施於有政と明言せり。聖人の政は、孝を要とすることを覺るべし。八佾は禮を説けり。されども人而不仁。如禮樂何と云ふ。孝弟爲仁之本也。孝弟の心なく、不仁の人ならんには、禮樂も用を爲さざる者也。祭如在と云ふは、中庸の事死如事生。事

亡如事存。孝之至也。と云へる處なり。されば是も孝を説けるなり。左傳には、孝禮之始也。(文元年)とあり。聖人の禮樂も孝を本とする事覺るべし。里仁の篇も、孝を論ずること數章あり。孝弟爲仁之本とあれば、聖人の仁は、孝を始とすることを覺るべし。

一學者、己の才智に誇り、多聞博識に誇り、高慢の心のみ増長して世人を慢るのみならず、父兄をも慢り、君長をも慢るに至る。三代よりして然るの病ある事なり。故に論語の開卷に、其爲人也。孝弟而好犯上者鮮矣。と仰せられたり。此一句にて高慢の鼻を墊けるもの也。さて、高慢にて君父をも蔑如する程の者は、必定己を抑へ制するの心は無きもの也。これにて放蕩無賴にて欲を肆にしては、酒色淫泆に走り、怒を肆にしては、喧嘩鬪争に及ぶ。禮義の常を亂らざること無し。故に不好犯上而好作亂者。未之有也。と仰せられたり。此一句にて放蕩の罪を斷せしなり。唯酒無量。不及亂の一句にて、亂の字を知るべし。禮義の常を亂るもの皆亂なり。さて、又孝弟恭順の心の人には、高慢の犯上も無く、放縱の作亂もなし。されば孝弟は善を行ふの初めならずや。

蔑如する
あなどる

鄭本には爲仁を爲人に作り。其爲人也孝弟とあれば、孝弟也者。其爲人之本與にても通すること也。

一義利の辨は、論語に、夫子の此二つを以て君子小人を判じ給ふ。大學には、義利の辨を以て終とし、孟子には義利の辨を以て始とす。大學の卷末と孟子の開卷と相接すと云ふべし。さて、孟子利の害を論じて、君臣上下を以て説き給ふ、誠に明辨と云ふべし。今又父子兄弟夫婦の間を以て、一説く時は、益と明白なり。父も子を養育するの損あるを恐れて、天倫の愛情をも失ひ、子を洗兒と云ふことも世にあり。是利欲の心に、仁義の本心を失ひたるものなり。されども是は好んで爲すことには非ず、貧民の止むことを得ざるに出るもの也。子は父の在す内は己自由ならず。父没せば家財を自由にして、淫泆の欲を遂げんと云利欲の心よりは、父の死を願ふに至る。古今弒逆の禍は皆此利心に出でざるは無し。弟は兄没せば、我此家督を嗣がん、われ此家財を自由にせんと云ふ利欲の心よりは、兄の死を願ふに至る。兄も弟あらば家財を分ち畀ふるの害ありと云ふ利欲の心よりは、弟の死を願ふに至る。古今兄弟の争は、皆此利心に出でざるは無し。妻も、夫生存しては、我家財を自由にもなり難し。姪欲を

氷炭黑白—
區別極めて
判然たるを
いふ

妃嬪—天子
の后妃
公主—天子
の女

後室—未亡
人

肆ほしいまにすることも成難なりがたしと思ふ利欲の心よりは、夫の死を願ふに至る。夫も愛妾あいせふに家財を分ち與ふべし、妾腹の子を家督にせんなど云ふ利欲の心よりは、妻嫡子の死を願ふに至る。古今の間、夫婦の相賊する利心に出でざるは無し。天地の間に父子兄弟夫婦ほど親睦しんぼくなる者なし。されども利欲の心よりは敵讐てきしうを相爲なして恩愛の情も、仁義の道も、地を掃ふに至る。是にて仁義と利欲と氷炭黑白なることを知るべし。されば利を棄てざれば仁義の道は立たず、仁義の道を立てんとには、利を破らざる事を得ず。是にて孟子開卷に此を辨ぜられたるの妙を悟るべし。されども仁義より出でたる利は、君子の悦ぶ所にして、是を義利連用の利と云ふ。義利反用の利とは異なるなり。一天地の間に、陰陽の理に漏るゝ者なし。男子は陽物故に、上淫を好て妃嬪公主をも犯さんと願ふ。左氏に蒸報の事を多く録せるを見ても知るべし。劉曜の羊皇后、侯景の簡文公主などの類、史傳の所載、枚舉に勝へず。義仲が松殿の關白の女を犯し、義經の、平太后、平大納言の女に通ずるの類、師直に至つては言に及ばず。豊臣の太閤の、信長の妹小谷の方に通せんと欲して能はず。其子淀殿を妾となし、蒲生の後室も信長の女故、上洛を勧めて、淀殿に比せんとす。可見男子は勢を得て、其欲を自由

寵昵—寵愛
し親しむ

嬌揉—おさ
へためる

淫訟—痴情
より起る訴
訟
上臈—身分
高き婦人

にする時は、必ず上淫を好む。火の炎升の勢にて、陽氣の所爲なり。さて、女は陰物にて下淫を好む。其身自由なるに及んでは、益々下人を戀慕し寵昵す。是れは古今の載籍を考ふるにも及ばず、世の婦女の姦通するものは、其家の奴僕下人か、寄食の人か、又は其家に入出入する下人同然の人なり。此三様を出ることなし。其夫より貴人と密通する者は、天下に無き事なり。萬に一も是あれば、これは其本心には非ず、金錢を貪ほる謀計に出る者なり。京師上方の女は、幼少より性を嬌揉して男子に順從する風俗なれば、上人と感通すまじきにも非ず。關東の女は、幼少より、氣隨氣儘きずるきまに生育し風俗なれば、其本心自由ならんには、萬に一も上人と姦通はすまじき也。これは女子の本性にて、水の卑下に流るゝ陰氣の所爲なり。閨門を治るもの、此等の人情を知らずんばあらず。男女の淫訟を決する者も、亦此等の人情を辨ぜずんばあらず。此に一の妙あり。吉原の傾城なる者、上臈の様に粧飾して客よりは上坐させたるも、男子の上淫を好むの情を能々通知せる者の、其法を建たるなり。世の拘儒迂學の人の此等の事は知るべきの理には非ざるなり。一花柳に枕藉する遊冶少年、世に云ふ、傾城買女郎買と云ふもの、即坐に身家を滅亡す

花街柳陌
遊廓

賣人—亡

八
賣らるゝ人

—娼妓
幫間—たい

こもち

るは言ふまでも無し。孟子の宣へる樂所^{たのしみ}以^{もつ}亡^{ほろぶ}者^をとは此こと也。さて、夫までは無^なしとも、屢々^{しばしば}花街柳陌^{りゅうはく}に往來^{きやうらい}せる者は、發達^{はつたつ}すること難^{なん}く、縱令^{たとひ}發達^{はつたつ}するとも難^{なん}あり。如何^{いか}にも此一條^{いちじょう}極めて不祥^{ふしやう}の事なり。此は如何なる故^{ゆゑ}ならんと問^とひしに、一人の云ふ、其地極めて不祥^{ふしやう}の地なり。賣^うる人、賣^うらるゝ人、幫間^{はうかん}奴婢^{ぬひ}の屬^{たぐひ}まで不祥^{ふしやう}の人ならずと云ふ事なし。其不祥^{ふしやう}の氣を得て發達^{はつたつ}の吉祥^{きつしやう}を得んこと、水中^{すゐちゆう}に火を求むるの理なりと云へり。是一理^{いちり}あり。又一人の云く、世人身家を敗^{はい}亡^{はう}し、又極刑^{きよくけい}を犯^ひす、皆此所にあり。されば身家を敗^{はい}亡^{はう}せずとも、其他に往來^{きやうらい}せば心ある者惡^{にく}まずと云ふことなし。人の憎^{にく}を觸^ふれ侵^せす、是發達^{はつたつ}を妨^{さまた}ぐるの理なりと云へり。是一理^{いちり}あり。又一人の云ふ、樓上^{ろうじやう}の游興^{いうきやう}、王公貴人^{わうこうきじん}の樂事^{らくじ}に同じ、是一日^{いちじつ}の福分^{ふくぶん}なり。卑賤^{ひせん}の身にして王侯貴人の逸樂^{いつらく}をなす時は、後來^{こうらい}己^{おの}が身に受用^{じゆよう}すべきの福分^{ふくぶん}を此時皆^{みな}受け盡^{つく}すの意ある故、後必^{こう}ず窮厄^{きうやく}すべく、然らざるも發達^{はつたつ}なり難^{なん}きの理なりと云へり。是一理^{いちり}あり。如何にも其他の不祥^{ふしやう}なる、其事の不祥^{ふしやう}なるを明辨^{めいべん}して、少年の時より嚴禁^{げんきん}するを妙とせり。花柳の間にて、金銀を人に施^ほすも陰德^{いんとく}となるべき事なるに、其陰德^{いんとく}の陽報^{やうほう}を得たる者なし。是亦^{また}如何^{いか}にと云ふに、都^{すべ}て己^{おの}が欲^ほと己^{おの}がみえとにて施^ほせる金銀は陰德^{いんとく}たる

崇禎—年號
なり

清正—原本
清政につく
る

套語—きま
り文句

事なしと知るべし。

一孟子に人將^{まさ}相食^{あひはまんじ}と仰^{おほ}せられて、三代^{さんだい}より此時までは、人食^{のくらふ}人の事は無^なりしにや。王莽^{わうまう}の亂以後、漢土は兵亂^{へいらん}の度毎^{たびごと}に人を食ふこと少^{すく}からず。崇禎^{そうてい}の亂には、父子相食^{ふじあひくらふ}ふに至^{いた}り。後漢の初^{はつ}の賢人^{けんじん}には、食^{くら}はるべきを免^{まぬ}れたる人少^{すく}からず、と後漢書^{こうかんじゆ}に見えたり。隋^{ずい}の亂には酒香^{さけの}みは、糟漬^{かすづけ}の豕^{ぶた}を食^{くら}ふに同じと悦^{よろこ}び食^{くら}へること新唐書^{しんたうしよ}に見えたり。人理^{じんり}は失^{うせ}果^{はて}て虎狼^{ころう}と同じと云ふべし。我邦^{わがくに}には神武^{じんむ}開闢^{かいびやく}より今日まで、人の人を食^{くら}ふなど云ふことは無^なきこと也。清正^{せいせい}の蔚山^{うらん}に圍^{かこ}れたる時は、打^{うち}死^じの肉^{にく}を噉^{くは}るやも心もとなし。是は我邦^{わがくに}の大愧辱^{たいきじやく}なり。此一條^{いちじょう}を以^{もつ}ても、我邦^{わがくに}風俗^{ふうぶく}の醇厚^{じゆんこう}遠^{とほ}く漢土^{かんど}に勝^{まさ}る事を知るべし。

左傳^{さでん}宣十五年、宋^{そう}の圍^{かこ}に、易^{かへて}子^こ而食^{くらひ}。拆^{きいて}骸^{ほね}而爨^{かじ}と。是は米穀^{まいこく}薪蒸^{しんじゆう}の盡^{つきはて}果^{はて}て、籠城^{ろうじやう}困窮^{こんきゆう}の様を、例^{れい}の浮誇^{ふこ}にて云^いひたるや。此二語^{ふたご}は、秦漢^{しんかん}の古文^{こぶん}に籠城^{ろうじやう}の難義^{なんぎ}を云^いふ套語^{たうご}なれば、漢土^{かんど}は上代^{じやうたい}より人の人を食^{くら}ふこと多^{おほ}しと見えたり。聖人^{せいじん}出世^{しゆつせ}の國なれど、遠^{とほ}く我邦^{わがくに}には不^{ざる}及^はことなり。我國^{わがくに}は樂國^{らくこく}樂土^{らくど}、又は君子^{くんし}の國と稱^{なづ}すべし。さて、人相食^{ひとあひくら}むなどの事なきは、佛法^{ぶつぽふ}も此に功^{こう}ありと思^{おも}ふべし。

令甲—政令の義

一我邦は、四面大海故、魚類極めて多し。故に人獸肉を食ふことを不好。四足を食へば穢れ也とて、國家の令甲にもあり。世人も斯く覺えて忌み嫌ふ。是も佛法仁柔の餘功なるべし。然るを香川修徳と云へる者、邦人は獸肉を食はざる故に虛弱なり、などと云ひおどせし故、近年は山國の人而已ならず、海邊の魚肉多き處まで皆々好んで食ふことにはなりたり。今は江戸などにも、冬月に獸店夥し。夫が故に、惡瘡を發し、中風に類する病を發する者少からず。實に虛弱の人は、牛肉鹿肉を寒月に小々食せんは補虛の功も有るべし。熊肉猪肉は毒ありて、其害少からず。さて、此邦の人、飢饉亂世なりとも、人を不食は、獸肉を忌むの大功なり。今より如此獸肉を喜び食せば、遂には人を食ふにも至るべし。殘忍の心も習より長ずれば、虫を殺して不止ば魚に至り、魚を殺して止ざれば鳥に至り、鳥を殺して不止ば獸に至り、獸を殺して止ざれば人に至る。目出度風俗の都なりしを、大に香川の爲に破られたり。仁人君子は殘暴の源を塞がずんばあらざるなり。

客氣—血氣の假勇

祖徠の師弟醫者の香川、吉益など云ふ者よりして、儒者も醫者も學精密ならず、人溫柔ならず。客氣浮氣、粗豪の氣のみ増長せり。其風習俗人にも移りて、豪傑々々

陵犯—長者をしのぎ犯すこと

と云ふこと、今は奴僕下賤の者までも、口實となりたり。不宣ことと知るべし。古今世を亂り賊を爲すもの孰れか豪傑に非ざらん。忠孝仁義を講せずして豪傑の氣象を學ぶ、其害少からずと知るべし。一酒は天の美祿にて（前漢書食貨志）上下の人共に小々づと飲みて、歡心を生ぜんは、天より受け得たる福祿とも云ふべし。されど酒を飲て溫克なるものは、千百中の一人にて、先づは傲慢の態を生じ、怠惰の念を發し、忿争を起し、陵犯を生じ、奢侈無用の費をなし、一醉日富の類、種々の惡行此よりして出づ。内は身の病を生じて生命を失ひ、外は言行に過失を生じて身家を亡す。酒禍の大なる、天下を亡すにも至れり。聖人を十分の地位として、酒を飲ざる人は、既に五分の地位に造れりと云は、解者の言なり。（宋儒の言、五雜俎も之を載す）さるが故にや、書には酒誥あり、詩には賓之初筵、抑の二篇あり。禮にも此を戒しむ。然るを酒徳を頌し（劉伶）醉郷を記して（王績）飲酒啣杯を達人の高致と思へるは、魏晉六朝より飲倒れの餘風にて、君子長者の所不取なり。國家の用に供する人は多くは小戸の人の選ぶべき事也。飲倒れの語奇特なり。多く飲めば倒れ臥すに至る。又我命をも倒すべく、又我家を

啣杯—杯をふくむ酒を飲むをいふ

も倒すべし。酒は倒ると縁ありて、興立には遠き者と知るべし。
 一西方の大真人も、飲酒人の種々の悪行をなしたるを見て、飲酒戒を立てたと承
 る。實は然るや。予も幼より世の人の酒禍にて身家を害する者を見たること夥しき故
 にや。平生酒を畏るゝ心、酒を好む心よりは長じ、大禹の惡旨酒の一事、大聖の戒
 を垂るゝの遠きを知れり。

酒は歡樂の爲に作りしものや。予は、上古の人の寒氣を防ぐ爲に作りたるものか
 とも思へり。今日にて狂藥と云ふ二字にて、其徳を盡したりと覺ゆ。

奇禍—ふし
 ぎのわざは
 ひ

一吾亡友小笠原益卿の予に教へたる言あり。六十年來世人を驗みたるに、小飲は格別の
 こと、過分の大酒する人は、往々不圖奇禍を得るものなり。是も、心得べきことな
 り。又是は世人も能く知りたる事にて、酒を飲で温克なる人は禁酒する事難からず。
 酒癖ありて禍を受くべき人は、酒を禁じ得ず。天罰を受くべき人なればなり。

一堯舜聖人とて、四目兩口あるに非ず。唯是心得の能き人を云ふなり。別に多般の理あ
 るには非ず。心得のよき人は、身をも立つべし、天下をも治むべし。心得の悪しき人
 は、身をも亡すべし、天下をも亡すべし。桀紂幽厲の類は、不心得ものの至極なり。

蘊奥—おく
 そこ

されば聖人の經典も、千百載の歴史も、心得をよくする爲の道具なり。諸子百家の言
 には不心得の事もあれども、能く讀めば心得となるなり。心得のためを離れて、別に
 道義はなきこと也。然るに餘りに深入りして、性命の蘊奥を論ずるも、又外馳して制
 度と末義を悦ぶも、多くは身心に益なし。身心に益なければ治國平天下の大道には
 非ざるなり。

一左傳に吉凶由人と云ひ、孟子禍福無不由己求之と云ふ。是千古の確論にて、中庸
 にも、禍福之將至善必先知之。不善必先知之と云ふ。人善を行へば必ず吉にし
 て福を得、不善を行へば必ず凶にして禍を得。千萬世に涉て、此理違ふこと無し。維
 天之命於穆不已と云ひしも、天より人に吉凶禍福を命ずること、穆々幽遠にして
 窺ひ難しと云へども、千萬世に涉つて止む事無きを云ふ。僞書の大禹謨に、惠迪吉。
 從逆凶。惟影嚮なりと云ひしも、湯誥に、天道福善而禍淫と云ひしも、皆此事な
 り。されども、人善を行ひて福を得、不善を行つて禍を得る。其根源を問へば善を行
 ふ人は祖先の餘慶なり。不善を行ふ人は祖先の餘殃なり。吉凶禍福の報應は、數十世
 數百年に涉て毫釐も差ふべき者にあらず。されども祖先の起居、注も無ければ、其發

沈落—おちぶれる

素讀—暗誦するをいふ

洽聞—ものしり

雲表—雲の上

達せる故も沈落せる故も、明細には知り難し。故に天命を知り難きに附すれども、實は昭々明々毫髪を差へざるは天命なり。祖先の善悪は今に在ては知り難し。唯人は善を行へば吾其報を得ずとも、子孫必ず其報を得て福あり、不善を行へば吾其報を得ずとも子孫必ず其報を得て、禍ありと云ふ理を明辨して、善を行ひ不善を去るべきことなり。されども男子なくして、吾一代にて消え失せる人は、御勝手次第の事なり。

一醫者は、傷寒論を素讀するより、惡寒發熱には、桂枝湯を用ふ。往來寒熱には、柴胡湯を用ふと云ふことを覚えて病人に與へ施す。學ぶ所は行ふ所にして、學の用をなす。さて、儒者は論孟を素讀するより、博學洽聞に至るまで唯文字章句を解釋するのみにて用所なし。學ぶ所と行ふ所とは、一向に別なり。學問は學問、行事は行事と、氷炭黑白の異をなして、聖經は雲表に在る如く、吾身は糞土の中に住せり。祖徠以後の學者は天下の老中になるまでは、學問用なしなど覺えたり。故に無道不善を所行とするも、尤の事なり。されば世間の諺に論語讀み論語を不知などと云ふ様になることと、學者の其方を失せるより出でたり。教ふる儒者も文字を解釋する而已にて、學ぶ弟子も文字を受くるに過ぎず。學ぶ所は行ふ所に非ず。醫者の學ぶ所を行ふに比すれば、大に下れり。まして能き僧徒の坐禪觀法して悟道見性せんなど心掛るものには、百等を下りたる者なり。耻べきの甚ならずや、吾門の學者は、唐宋の詩文も學びたまへ。されども論孟を素讀し給はば、是は皆今日己が身心の事を説ける者にて、行住坐臥、皆是論孟を行ふ也と知りて、親を愛すれば是仁、兄を敬すれば是義、奴婢を慰勞すれば是仁、妻子を教戒すれば是義、柔順利貞、溫柔恭儉、言忠信行篤敬、君子の三道、君子の九思、謹身節用、節用愛人、孰か今日己が所行に非ざらん。曉起るより夜寐るまで、論孟中の聖賢の言行を言に用ひ、行に用ひて、家に居るも如此、朝に事ふるも如此。斯の如にして、始めて、儒者の道を學びたる者として、始めて醫者僧徒に優れる人とは云ふべきこと也。

一聖人の四書六經とて、何も他事あるには非ず、唯是千萬歳の人に教ふる勸善懲惡の具也。言々語々惡を去り善を脩ることを云而已。過を改め惡を祛けば即ち善なり。されば聖經は善の一字の細目を注せる者と知るべし。學者平生の言行に。此處は。大學の止於敬、止於孝也。勿自欺也。此處は、中庸の慎獨なり。衣錦尚絀なり。此處は、孟子の親親之仁。敬長之義也。存其心、養其性なり。此處は、論語の色

九思—論語
季氏篇に君
有九思—視
思明、聽
思聰、色思
溫、貌思
恭、言思
忠、事思
忠、疑、思
問、忿思難、
見得思義

慎獨一人見
ざるところ
にて恐れ慎
しむ

致々勉む
る貌

胡越の隔
非常に隔絶
せるをいふ
胡越ともに
國名なり

思^{おもひ}温^{をん}貌^{かたち}思^き恭^{きやう}なり。言^{ことば}忠^{ちゆう}信^{しん}。行^{ぎやう}篤^{とく}敬^{けい}なり。此^{こゝ}處^{ところ}は、二^じ雅^がの抑^{よく}々^く威^ゐ儀^ぎなり。飲^{のん}酒^{しゆ}温^{をん}克^{こく}するなり。此^{こゝ}處^{ところ}は、堯^{けう}典^{てん}の允^{いん}恭^{きやう}克^{こく}讓^{じやう}なり。無^む逸^{いつ}の寅^{いん}畏^ゐ抑^{よく}畏^ゐなり。此^{こゝ}所^{ところ}は、周易^{しゆうえき}の履^{ふん}霜^{しやう}堅^{けん}氷^{ひやう}の戒^{けい}なり。懲^{ちやう}怒^に窒^{しつ}欲^{よく}の戒^{けい}なり。節^{せつ}飲^{いん}食^{しやく}。慎^{しん}言^{げん}語^ごの戒^{けい}なりと蚤^{さう}起^きより夜^{よる}寐^いるまで、行^{ぎやう}住^{じゆう}坐^ざ臥^わ、聖^{せい}經^{きやう}の教^{きやう}の中^{ちゆう}に周^{しゆう}旋^{せん}して、己^{げん}が言^{げん}行^{ぎやう}の聖^{せい}人^{じん}の言^{げん}に背^{はい}戾^{れい}せざる様^{さま}に、心^{こころ}を用^{もち}ふる時^{とき}は、不^ず知^{しらず}不^{しらず}識^し。順^{じゆん}帝^{てい}之^の則^{のり}にて吾^{われ}不^{しらず}知^{しらず}賢^{けん}人^{じん}君^{きん}子^しの域^{いき}に造^{いた}るべし。是^{こゝ}孟^{めい}子^しの宣^{けん}へる鷄^{けい}鳴^{めい}而^て起^たち。致^じ々^じ爲^{なす}善^{ぜん}舜^{しん}之^の徒^と也^{なり}。と云^い所^{ところ}。服^{ふく}堯^{けう}之^の服^{ふく}言^{げん}堯^{けう}之^の言^{げん}。行^{ぎやう}堯^{けう}之^の行^{ぎやう}。是^{こゝ}堯^{けう}而^の已^み矣^{なり}。と云^い所^{ところ}なり。平^{へい}々^{へい}易^い々^いたる事^{こと}にて難^{なん}行^{ぎやう}にも苦^く行^{ぎやう}にも非^ひず。如^{ごと}此^{こゝ}心^{こころ}を用^{もち}ひて聖^{せい}經^{きやう}を學^{まな}びたる人^{ひと}、聖^{せい}道^{だう}を志^{こころざ}すと云^いふべし。今^{いま}の學^{まな}者^{しや}は、四^し子^し五^ご經^{きやう}の文^{ぶん}句^く文^{ぶん}字^じを解^{かい}釋^{しやく}するに、考^{かう}證^{てい}考^{かう}据^{きよ}の學^{まな}などと云^い而^の已^みにて、夫^{それ}を明^{めい}細^{さい}に解^{かい}釋^{しやく}せるとも、己^{げん}が身^み心^{しん}言^{げん}行^{ぎやう}と、胡^こ越^{えつ}の隔^{へた}りをなせり。されば聖^{せい}經^{きやう}は何^{なに}の用^{もち}ぞや。幼^{ちゆう}少^{せう}より唐^{たう}詩^しの熟^{じゆく}字^じを習^{しやく}ひて、青^{せい}山^{さん}白^{はく}水^{すい}とか、夕^{せき}陽^{やう}芳^{ほう}草^{そう}とか學^{まな}び得^えれば、境^{きやう}に觸^ふれて詩^しを作^{つく}り出す事^{こと}を得^え。是^{こゝ}は學^{まな}びたる熟^{じゆく}字^じ直^{ちやく}に用^{もち}をなせり。今^{いま}の學^{まな}者^{しや}の學^{まな}問^{もん}は、經^{けい}傳^{でん}は經^{けい}傳^{でん}、己^{げん}が言^{げん}行^{ぎやう}は言^{げん}行^{ぎやう}と、一^{いつ}向^{かう}に別^{べつ}者^{しや}なれば、是^{こゝ}は幼^{ちゆう}年^{ねん}より多^た年^{ねん}の修^{しゆ}行^{ぎやう}にて、折^{せつ}角^{かく}よく熟^{じゆく}字^じを覺^{かく}え、且^{かつ}は熟^{じゆく}字^じの意^いも能^{よく}々^{よく}解^{かい}釋^{しやく}はすれども、一^{いつ}首^{しゆ}も詩^しは作^{つく}たる事^{こと}なきに均^ひし。さらば

井田一
周の
田制なり
井は九百
畝、八家
にて之を
耕し其百
畝を公田
とし八家
各百畝を
私す

多年無^む用^{よう}の暇^{ひま}費^ひをせんよりは、學^{まな}ばざるを妙^{めう}とすること也^{なり}。一^{いつ}道^{だう}は形^{けい}迹^{せき}に拘^かる者^{しや}に非^ひず。形^{けい}迹^{せき}に拘^かりては道^{みち}不^は行^はれ。唐^{たう}人^{じん}は三^{さん}代^{だい}聖^{せい}人^{じん}より立^たつ禮^{らい}敬^{けい}とす。我^{われ}邦^{ほう}にては坐^ざを禮^{らい}敬^{けい}とす。唐^{たう}人^{じん}の敬^{けい}は、我^{われ}邦^{ほう}の無^む禮^{らい}なり。我^{われ}邦^{ほう}の禮^{らい}は、唐^{たう}人^{じん}の不^ふ敬^{けい}なり。故^{ゆゑ}に座^ざ立^{りふ}の異^いありとも、恭^{きやう}敬^{けい}の心^{しん}は一^{いつ}なる時^{とき}は、立^たつ禮^{らい}とする國^{こく}は立^たつべし。座^ざして禮^{らい}とする國^{こく}は、坐^ざすべし。形^{けい}迹^{せき}の拘^かはるべからざること如^{ごと}此^{こゝ}。是^{こゝ}にて知^ちるべし。只^{ただ}今^{いま}の四^し公^{こう}六^{りく}民^{みん}の稅^{ぜい}法^{ぽう}にて、上^{じやう}下^げ其^{その}所^{ところ}を得^えれば、是^{こゝ}即^{すなは}ち聖^{せい}人^{じん}井^{せい}田^{てん}の良^{りやう}法^{ぽう}なりと思^{おも}ふべし。鬻^ゆ斗^と目^め麻^ま上^{じやう}下^げにても、袴^{かま}羽^う織^ぢにても、上^{じやう}下^げの禮^{らい}節^{せつ}を得^えれば、是^{こゝ}即^{すなは}ち堯^{けう}の服^{ふく}なり、先^{せん}王^{わう}の法^{ぽう}服^{ふく}なりと思^{おも}ふべし。若^{ごと}し餘^よ計^{けい}の年^{ねん}貢^{くわん}課^か役^{やく}を掛^かけて、民^{みん}窮^{きゆう}し、人^{ひと}恨^{うら}むる時^{とき}は、是^{こゝ}即^{すなは}ち桀^{けつ}の行^{ぎやう}にて大^{だい}桀^{けつ}小^{せう}桀^{けつ}なりと知^ちるべし。奢^{しゃ}侈^ち華^わ麗^{れい}の衣^い服^{ふく}を服^{ふく}せば是^{こゝ}即^{すなは}ち桀^{けつ}の服^{ふく}なりと知^ちるべし。禮^{らい}云^い禮^{らい}云^い。玉^{ぎよく}帛^{はく}云^い乎^や哉^や。樂^{がく}云^い樂^{がく}云^い。鐘^{しゆう}鼓^こ云^い乎^や哉^や。形^{けい}迹^{せき}に拘^からずして、聖^{せい}人^{じん}心^{しん}を知^ちるべきこと也^{なり}。一^{いつ}子^し思^{おも}は盡^{つくす}性^{せい}と仰^{おほ}せられ、孟^{めい}子^しは盡^{つくす}心^{しん}と仰^{おほ}せらる。其^{その}實^{じつ}は同^{どう}じ事^じにて、性^{せい}とは中^{ちゆう}庸^{よう}の德^{とく}性^{せい}、孟^{めい}子^しの性^{せい}善^{ぜん}にて、仁^{にん}義^ぎの本^{ほん}性^{せい}を云^いふ。心^{しん}とは孟^{めい}子^しの本^{ほん}心^{しん}良^{りやう}心^{しん}、仁^{にん}義^ぎ之^の心^{しん}惻^{そく}隱^{いん}羞^{しゆう}惡^{あく}辭^じ讓^{じやう}是^{こゝ}非^ひ四^し端^{たん}の心^{しん}、不^ず忍^{しのぶ}不^ず爲^な仁^{にん}義^ぎの心^{しん}を云^いふ。さて、人^{ひと}々^々仁^{にん}義^ぎの良^{りやう}心^{しん}を得^えて生

惻隱—思ひ
やり切なる
をいふ
羞惡—己の
不善を恥ぢ
人の不善を
惡む
辭讓—己を
すて人に讓
ること

るとは、天命の本性なれど、利欲の心に逐れて其心本性を全くし盡すことを得ず。惻隱ざるの心なき者はなけれども、利欲に逐はれては、人を殺しても奪ふべし、羞惡不爲の心なき者はなけれども、利欲に逐はれては君を欺ても奪ふべし、樂記に所謂人欲肆而天理滅すとは此處を云ふなり。されども本心は妙明にして是非の智明なる故に、人を殺し君を欺く人にも、其惡事たることを自知する故に、心内安からず。人心是非の明、揜ふべからず。さて、己の心に其惡を知るは、天地鬼神の其惡を知り、惡み給ふなり。己の本心人の本心、皆これ天地の鬼神なり。他人のその惡を知らざるも、己の其惡を知る。この處既に天地神明の罰を蒙りたる所なり。利欲に逐れて本心本性を盡すこと不能、天地の冥罰を被むるに至るは、譬へば桃李などは美なる花を生ずべき天性なれども、寒氣に閉られて花を開く事能はざるに同じ。卉木の花は人の仁義なり、寒氣は利欲の心なり。和暖の氣を得れば花の開くは、教導の功にて仁義の徳を成すなり。聖人は人欲の閉塞なくして、仁義の本性良心を全くし給ふ而已ならず。政を正しくし教を明にして、天下の人にも仁義の本性を盡さしめ、仁義の良心を存せしめて、天下の人をして天地鬼神の罰を蒙らざらしむ。是聖人廣大の仁恩なり。されども廣き世界の事なれば、良心本性を失うて惡逆をする民も有るべし。天下の人これを惡む。天討有罪なれば、聖人天に代て此を誅戮して他人の戒と爲したまふ。是亦天下の人をして其性を盡し、其心を存せしむるの道也と知るべし。荀子正名に、性者天之就也とありて、性惡には、人の性惡。其爲善者、僞也と云へり。されば人の性は天造にて惡を本體とす。惡は皇天上帝の我に昇へられたる大賚なり。然れば人たるものの惡を棄て善を爲さんには、天に背ける人と云ふべし。父富厚の祿を其子に與へたるに、子たるもの其祿を失なはざ、父に背けるの子にあらずや。天の暴賊の惡を人民に與へたるに、人たる者其惡を失はざ、天に背けるの人に非ずや。然らば何が故にか、商書には天道福善と云ひたるや。老子も天道無親。常與善人と云ひたるや。夫子も積善之家、必有余慶と仰せられたるや。されども先づ三代の後は姑く置く、堯舜の時代虞廷の謀謨に、天叙有典。天秩有禮。天命有德。天討有罪。と皐陶の仰せられたる事少しも通ずべからず。さらば皇天上帝は、我に背ける者を悦び、福を與へたまふ者にや。堯舜は、天に背ける詐僞の人にて、桀紂は天を奉じて天に叶へる誠實の人なり。何とて、背天の人は興りて、奉天の人は滅亡せし

大賚—大なる賜もの

り。されども廣き世界の事なれば、良心本性を失うて惡逆をする民も有るべし。天下の人これを惡む。天討有罪なれば、聖人天に代て此を誅戮して他人の戒と爲したまふ。是亦天下の人をして其性を盡し、其心を存せしむるの道也と知るべし。荀子正名に、性者天之就也とありて、性惡には、人の性惡。其爲善者、僞也と云へり。されば人の性は天造にて惡を本體とす。惡は皇天上帝の我に昇へられたる大賚なり。然れば人たるものの惡を棄て善を爲さんには、天に背ける人と云ふべし。父富厚の祿を其子に與へたるに、子たるもの其祿を失なはざ、父に背けるの子にあらずや。天の暴賊の惡を人民に與へたるに、人たる者其惡を失はざ、天に背けるの人に非ずや。然らば何が故にか、商書には天道福善と云ひたるや。老子も天道無親。常與善人と云ひたるや。夫子も積善之家、必有余慶と仰せられたるや。されども先づ三代の後は姑く置く、堯舜の時代虞廷の謀謨に、天叙有典。天秩有禮。天命有德。天討有罪。と皐陶の仰せられたる事少しも通ずべからず。さらば皇天上帝は、我に背ける者を悦び、福を與へたまふ者にや。堯舜は、天に背ける詐僞の人にて、桀紂は天を奉じて天に叶へる誠實の人なり。何とて、背天の人は興りて、奉天の人は滅亡せし

學庸—大學
中庸

思孟—子思
孟子

や。是にて荀卿の愚昧邪説を決斷して知るべし。扱又、惡を天性、善を詐偽と定めたれば、堯舜は詐偽なり、桀紂は天性の誠を得たり。されば人たるもの天性の誠を爲さんには、不仁不義不孝不忠を爲すべき事なり。然るに不苟篇には、學庸の遺意を繼で誠の一字を主張して、仁義も誠ならざれば用を爲さることを明辨せり。前後予盾齟齬して通すべき理なし。是亦其盲昧を斷知すべし。近世には、性善も性惡も同じ様のこと也など覺えたる愚儒ある故、辨せずば有るべからず。古人の云へるは、非十二子は韓詩外傳に引けるには、十子而已にて思孟は無し。思孟を入れたるは、李斯韓非などの所爲なりと云へり。性惡なども李斯韓非の補増せるならん。此は、荀卿ひいきの説なれども、恐らくは其實を得たるなるべし。

一李斯が二世に上書せる督責の言と、北齊の和士開が後主に教へたる言と同様の事なり。和士開は倭幸の小人如何なることをも言ふべき也。怪むに足らず。李斯は惡人なりとも士君子なり。如此の拙惡の事を人主に勸むる、誠に怪しむべきこと也。荀卿に學びたるは、如何なる事を學びたるや、荀卿も如何なる事を教へたるや。蘇東坡の、惡しき門人を持ちたるにて荀卿の罪を判斷せるは、少し刻なれども無理とは云ふべから

鴟梟—みづ
づくふくる
ふ共に惡鳥

訓詁—註解
なり
錯會—解釋
を誤ること

ず。李斯和士開が如き妖言を人主に説くは、其天下の滅亡の時至れるにて、鴟梟の聲に同じく、天下の妖孽彗孛より大なる者なりと知るべし。

一人主游觀を好み、祈禳を好み、土木を好み、甲兵を好む、皆々侈大を好むよりして、是に至る。秦皇、漢武、唐玄、宋徽、元順、明武の類、皆此病にて天下を亂亡せり。侈大を好む一心の欲を肆にするよりして、四海億兆の民、無邊無量の害を被むる。學心學を講ぜずして何を以て、治化の本とするや。

一漢唐傳疏の功にて、聖經訓詁畧通する事を得たり。其功德最大なり。されども十に六七は大紕繆ありて、一々信用せば聖意を錯會すべし。宋儒傳注の功にて聖經の義理略明なる事を得たり。其功德最深し、され共十に三四は誤解あり。誤解せざるも大切の義理、修身治人の要、人事治道に切實なる處を疎々に解過して義理を盡さざる事多し。是亦一々信用せば、聖意を錯會すべし。されども古人の注解に善を盡せる無き時は、天下の學政などには、宋儒の傳注を用ふる事明清の如くする事極めて可なり。宋儒の學は、畧聖人の正統を得たる者なりと云ふべし。只今經を學ぶには、漢宋明清の諸儒を通觀して、聖言を得たる者に從ひ、さて聖意を能く解して、人事治道に切實な

る様にすべきこと也。

一程伊川の人之性中有仁義禮智四者。何曾有孝弟乎。孝弟は、仁の本には非ず、行仁は孝悌を本とすと云ふを辨ぜられたるは可なり。されども此言には大なる誤あり。仁義も、孝弟も、禮樂も、忠信も、百徳百行皆人性の自然に出づる者なり。先づ孟子には、親親、仁也。敬長、義也。是の直に孝弟を以て、仁義とす。又云、仁之實、事親是也。義之實、順兄是也。これも亦孝弟を以て仁義とす。又云、有人於此、入則孝、出則悌。下文稱之、爲仁義者と云ふ。是も亦孝弟を以て仁義とす。思孟孝弟を以て仁義と爲せるに（中庸にも仁者人也。親親、爲大とあり）伊川人性に仁義ありて、孝悌なしと云ふ。是何の義ぞや。さて又大學に、爲人、君止於仁、爲人子、止於孝とありて、仁孝は聖人の大道なり。又君子の美徳なり。人々の性心に出づる者なり。故に並べ稱す。然るに仁は性なり、孝は性に非ずとせば、爲君の道は天性に出で、爲子の道は天性に非ずや。是不通の言なり。さて又孝經に父子之道、天性也とあり。父の道は慈なり、子の道は孝なり。孝の天性に出ること、孔子の言なり。然るに伊川の仁義は性なり、孝悌は性に非ずと云ふは、孔子の教に背戾せり。

背戾—そむきもどる

鴻益—大なる益なり

偏内—内に
かたよる
本草家—植
物學者

是にて伊川の謬誤を斷知すべき事なり。さて、又聖經には小々間違たりとも、今日人を教ふるに鴻益あることは、郝京山の養氣の類にて取るべきなり。伊川の此言、孝弟非性と云はれしには、天下の人を駢て不孝に趣かしむ。聖經に違ふのみならず、百世人を導くに大害あり。辨斥せずんば有るべからず。されども是は伊川の誤には非ず、董仲舒劉向より、聖經には無き五常五性と云ふことを立てたるを、程朱なども誤つて信ぜらるゝ故に、如此の謬妄を吐き出さるゝものなり。

一理氣の説にて、陰陽を氣とし、仁義を理とす。説卦に立天之道、曰陰與陽。立人之道、曰仁與義。天道の方は、氣を云ひ、人道の方は理を云ふ。可笑ことなり。陰陽非道。所以陰陽者、是道也と、程朱は云はるれども、孔子は斷然として立天之道、曰陰與陽。と仰せられて、陰陽を道となしたまへり。宋儒理氣の説、其不可信こと如此なり。

一宋儒の學可攻こと多し。一草一木の理をも、窮むと云ひしは、外馳と云ふべし。靜坐冥目、認喜怒哀樂未發氣象と云ひしは、偏内と云べし。草木の理は、本草家に託すべし。靜坐澄心は坐禪僧に託すべし。我聖人の心學、知性知天。存心養性。盡

心盡性。と云ふは、面壁坐禪の事に非ず。又外を逐て狂走するにも非ず。讀書明理の功積みて、心即行。行即心。論孟の言々語々皆此境界の説ける者なり。此即ち心學の骨髓なり。

一天地は形氣而已なり。されども其中に不可思議の神靈ありて、吉凶禍福を司どる。人身も形氣のみなり。されども其中に不可思議の神靈ありて、仁義忠信是より出づ。されば天地の萬事萬物氣に非ざるは無し。氣中よりして、種々の理は出づること也。吳廷翰の、理は即ち氣中之條理と吉齋漫錄に云ひたるは、妙言なり。郝敬の養氣の二字を以て、内は身心を脩め、外は國家を治ることを時習新知に説きたるは、當時孟子の本意には非ざれども、經世の學の外馳すると、正心の學の内に專なる弊を矯めんとて、養氣の二字にて、内外を兼ねたるは面白きことなり。宋儒理氣の説、未有天地。必竟先有此理。と晦菴の云れたるは、不宜說なり。大雅に、天生烝民。有物有則。と云ひて、事物ありて後法則ありと云ふ時は、理は氣中の條理なる事必定なり。さて、事物の法則とは、即ち道の事なり。道は事物の法則と解すべきことなり。

烝民一庶民
に同じ

梧窓漫筆 後編 卷下

一古學者仁を長人安民の徳と云ふ、笑ふべき事なり。中庸に知仁勇三者。天下之達徳也と云へり。達徳とは、上下に通達する行を云ふ。安民長人は君徳にて、達徳には成難し。論語に、君子篤於親。則民興於仁。と云へり。此仁は、中庸の、仁人也。親親爲大。孟子。親親也。晉語の愛親謂之仁。と云ふ仁に同うして、親族を親愛するを仁と云へり。孝弟。爲仁之本。親族を親愛するは、仁を行ふ始なり。仁を長人安民とせば、民の仁に興起して興つて行ふ處は、謀叛叛逆して國郡を横領し、始て長人安民の行を成就すべし。さらば君子の親族に篤きは民の逆心を企つる基にや。是笑ふべきの甚しき也。されど是は戲言なり。仁を長人安民など云ふは、臯陶謨に安民とあり、文言に長人とあるなどを見て、管仲の仁に合せんとて、根も葉もなき俄拵への出来合もの、小兒の見解、周易の童觀と云ふべきものなり。令尹子文は、楚國の良大夫にて、長人安民の徳あるもの也。孔子曰。焉得仁

童觀一子供
らしい觀察

殘賊一人を
そこなふこ
と
褻瀆一けが
れよごるこ
こと
朔望一つい
たち十五日

と。冉雍仲弓は可_レ使_二南面_一とあれば、是も長人安民の徳ある者なり。孔子曰。不_レ知_二其仁_一と、長人安民にて仁を解せんとは、論語を讀まざる人の言なり。
欲_レ仁仁_一至。造次顛沛於_レ是。と云ふ。長人安民などにて通すべきや。顛沛は顛倒なり。下駄の鼻緒を踏みきり、轉び倒るゝに、長人安民せん、愛人をせんと云ふ理あるべきや。予が仁説を讀みて眞智を開きたまへ。
一徂徠の道_二千乘之國_一と、道の字を道すると讀みて、天子諸侯の國を巡狩する事と云へり。さらば敬_レ事而信。節用而愛_レ人は、天子巡狩の禮にて、平常は不_レ敬_レ不_レ信_レ財用を費耗し、民人を殘賊しても能きことには、君子巡狩の禮にて、平常は不_レ敬_レ不_レ信_レ財用を費解したり。君子は動作周旋を威儀容貌と云ふ。左傳に、北宮文子の言(襄三十一年)に詳なり。重大の事ならざれば威を見はさずと言ふときは、君子平常は褻瀆にして威儀を修飾せざる者と云ふことなり。平常朔望の朝禮位は、亂髮裸體にても可ならんか。淺陋_レ妄_レ、古今經を解するに、如此の怪誕なるは無きことなり。
一古學者、以_レ心治_レ心と云ふを嘲りて、心を以て心を治るは、狂人の狂人を制すると同じくして不能_レことなり。故に、聖人は以_レ禮制_レ心と説けりと云へり、以_レ禮制_レ心

は、偽書の仲虺之語には出でたれども、是は妙語にて、樂記には以_レ道制_レ欲_一とあり。孟子には、以_レ禮存_レ心とあり。皆同意にて、禮を以て邪心を制し、禮義を以て邪欲を制することなり。樂記の道の字も、禮を斥すなり。存_レ心とは、禮を以て邪欲の惡心を距ぎ制して、仁義の良心を失はざる様にすることなり。さて、以_レ禮制_レ心は、聖經の大教間然すべきには非ず。去れども邪心邪欲を肆_レにすれば、身家も滅び、國家も亡ると云ふことを知りて、禮を以て邪心邪欲を制する者は何ものぞや。是己が心に非ずや。是も心を以て心を治るに非ずして何ぞ。
一古學者、辭讓之心。禮之端也と云ふを誹りて、左傳の凡有_二血氣_一者皆有_二爭心_一を引きて、聖人の禮ありて後辭讓あり、聖人の禮なき時は辭讓なしと云へり。大なる誤なり。今人犬の嚙合ひて食を爭ひ奪ふを見る時は、惡み怒りの心を生ず。まして、人ありて打合ひて食を奪ひ争はど、惡み怒らざる者は無かるべし。されば天地の開闢より、争ひ奪ふ邪欲の盛なる者も有るべけれど、又夫を惡みて、辭退し推讓るの天性の者も有るべし。人の争奪を惡しと思ふは、不_レ爭奪_一を善なりと思ふ本心の良なり。聖人此心に原きて、禮を教へ給へる也。されども、孟子も後には、恭敬之心禮也。と仰

呦々の鹿さへ云々「經々」は鹿の呼聲、詩經の「呦々鹿鳴、食野之苹」云々とあるをいひたるなり

せられ、中庸には、親親之殺。尊賢之等禮之所生也と仰せられたり。禮の大本は、辭讓恭敬の心と差等の差あり。故に皋陶も天秩有禮と仰せられ、左傳には、禮以順天。天之道也と云ふ。聖人の禮ありて後辭讓恭敬あり、など思へるは、第二等の處のみを知りて、向上の一路に味きか故なり。古學者と云へる者皆然り。一天地開闢より人心爭奪を本とせば、打合ひたよき合ひて、相害し相殺して、人種は絶ゆべし。呦々の鹿さへ、美草を得て友を呼べり。人心の靈妙を以て鹿に不如べけんや。さらば推與へ分ち與へて。或は辭し或は讓る。天性の自然に非ることなし、天性の自然に原きて天下の大道となる。諸の徳皆然り。一左傳に、人心不同如面と、子産の云ひたるは妙語なれども、人の心の粗處を云へり。人の心に剛柔あり、奢侈あり、明暗あり、勇怯あり。萬品不同なれども、別に一の同然なる處あり。孟子これを、人心之所同然と説き給へり。至妙の語にて、人の本心の精妙を盡せり。此を知らんには、千萬人に一部の通俗三國志を讀ましめんに。曹操、仲達を善人と悦ぶ人なし、立德、孔明を惡人と惡む者なし。太平記を讀まんに、千人は千人、萬人は萬人、正成の忠勇を感じ、直義、師直の惡行を惡まざ

居 雜劇 一芝

るは無し。又夫までも無し。賤人の雜劇を觀るもの、大星を忠義の人と思ひ、定九郎父子を惡人と惡む。人心是非の明、亮々然として掩ふべからず。人心同然の説、經言に徴し、今日の人心に驗ありて、確として不可易也。一思無邪。無邪は正なり。政者正也。子帥以正。孰敢不正。爲政の篇にありて、是は政を爲すの至要の處なり。爲政以德と、徳なる者は、思無邪の心ならずや。有耻且格。格は正なり。上たる者、思無邪の心を以て政を爲せば、下たる者も、耻を知りて且は格正になること必定なり。子帥以正。孰敢不正と云ふことを三章に云ひたるもの也。一論語には、思無邪を掲げ出したまふ。孟子には、無爲所不爲。無欲所不欲。如此而已矣。と云へり。身に不義を爲さず、心に無禮を欲せざるを云ふ。心に欲すまじきことを欲せざるは、思ふことの邪なきにて、孔孟の學、心思を説くこと如此。心學に非ずして何ぞや。吾が云ふ所の惡念を動かさざるは、思無邪。不欲所不欲を脩行するなり。一以禮讓。爲國乎何有とありて、子路を晒ひ給へるにも、爲國以禮。其言不讓。

馬史—司馬遷の史記

千戈—戰爭

浦上村宗—赤松氏の臣寵を足利幕府に得たる

是故晒之。と仰せられたり。禮は制度に非ずして辭讓を云へり。孟子此意を繼ぎ給うて、辭讓之心、禮之端也と仰せらる。父子國を争ひ、兄弟國を争ひ、君臣國を争ひ、朝臣は威を争ひ、庶民は利を争うて、國家亂敗するを見て、讓の大徳たることを悟るべし。書は堯舜の禪讓を始とし、春秋は隱公の謙讓を始とし、馬史には、世家に泰伯を始とし、列傳には伯夷を始とす。仲尼は泰伯を至徳と云ひ、伯夷を得仁と云ひ、君子無所争と仰せらる。されども、讓の妙を説けるは、左傳襄十三年、范宣子の讓を君子の論せる一條、尤明悉なり。聖賢の心今日にありて明々了々たるなり。小人利欲の争より、讒訴も興り、小人利欲の争より、干戈も起る。可畏の甚しき事なり。一惟人は萬物の靈なれども、小人利欲を争ひ、女色を争ふの心は、犬猫と同じ。色を争ひ、利を争うて人を害するに至れば、虎狼と同じ。孟子は、人之所以異禽獸者、殆希矣。と仰せられ、又違禽獸不遠とも仰せらる。可畏の甚しきこと也。戰國の人は、君を弑して妻妾を奪ふ、備前浦上村宗、阿波の三好實休の如き者あり、姑夫を殺して其女を奪ふ、武田信玄の如きものあり、猫狗虎狼を兼并せたるもの也。世には英雄豪傑と云ふことを言習はせて、道と無道の差別を不知。英雄豪傑とは禽

に乗じ、永正三年、赤松政村の妾胡蝶を奪ひ次で政村を弑し、其國を奪ふ
三好實休—長慶の弟にして細川氏の臣なり、天文二十一年、細川持隆の妾岡本氏を奪ひ、後持隆を弑す
武田信玄—傳は贅せず、姑夫を殺し云々の事は、天文

獸の事にや。
一 飲食もなるべき丈は薄くすべし。房室もなるべき丈は少くすべし。是身を全うするの法なり。衣服もなるべき丈は質素なるべし。器用もなるべき丈は儉朴なるべし。宮室もなるべき丈は卑陋なるべし。是家を守るの法なり。奢侈の念を抑へ制すると、放縱の欲を抑へ制すると、天下國家を治むる人も、一身を守る者も、抑の一字、至近切要の學なり。
一 儉素なる者は、子孫連綿して、汰侈なる者は、子孫不振。此理最知り易し。儉朴の人は、吾が享くべき福分を惜みて享け盡さず。其福子孫へ傳へて、再興の期あり。奢侈なる者は、子孫の福分も吾一代に享け盡すゆゑ、再び興るべきの理なし。漢の文景の儉朴なるは、後世百代の模範なり。武帝の奢侈は、天下萬世の戒なり。武帝の血脈は哀平にて絶えたり。再興の後漢は、長沙定王劉發の後なり。又再興の蜀漢は中山靖王劉勝の後なり。皆景帝の子にて、文帝の孫なり。天の儉樸に興して華奢を惡み給ふ、千古の定論、今日にて昭々明々なり。
一 王陽明の良知の説、書庫書厨の學者に針砭するには功ありて、其極は老子の絶學に至

十三年諏訪
頼茂を殺
し、其女を
妾としたる
をいふ
至近切要
手近くして
適切要な
るをいふ
書庫書厨の
學者—讀書
にのみ耽り
て、實際の
活用を知ら
ぬ學者
針砭する—
戒むる

る、其害少からず。其不通を知らんとには、今人宮室を造營するに、高大壯麗にすべ
きや、卑陋素朴にすべきや、我本心に問うても了知すべきの理なし。讀書の功にて堯
舜の土階、茅茨、采椽(墨子)を知り、禹の卑宮室(論語)を知り、峻宇雕牆(僞書五
子之歌)の亡國の戒たるを知り、豊其屋、郇其家(周易豊上六)の无人の凶たる
を知り、高明之家、鬼瞰其室(楊雄解嘲)の畏るべきを知り、桀紂よりして秦の阿
房、齊の東昏、陳の後主、隋の煬帝などの、華靡壯麗の宮室樓閣を作りて、天下を
亡したるを知り、小にしては、楚の靈王の章華の臺を作りて、身死乾谿(左傳)晋平
公廐祈の宮を作りて、諸侯叛之(同上)などの事を知りて、宮室居宅、儉朴卑矮なる
こと、天の冥理に叶ふと云ふことを、斷然として了知するなり。唯本心に問ふ而已に
て知了するの理はなきこと也。宋向戌來聘于魯、見孟獻子、尤其室曰、子有
令聞、而美其室、非所望也。(左傳襄十五年)昔の賢人の宮室を壯麗にするは、
耻づべき事なること是にて明白なり。三瓦之戒とて、(史記龜策傳)宮室落成に、屋
の瓦を三枚缺きて葺かず。是は、物十分に満つれば必禍あり。故に三瓦を缺くは、
何までも不成就の形にて、周易、亢龍有悔の理に叶うて、僞書の滿招損謙受

目撃親見し
て—まのあ
たりしたし
く見て
高野大師—
弘法大師
聞見—見聞
といふに同
じ

益の理なり。極めて妙理なり。是等の事學んで知るべし。本心のみにて知るべきの
理なし。畏天録に、家宅の崇高なるは害あるを言へり。是は予が經傳に得たると、多
年目撃親見して知りたる事なり。後に予が女婿の古筆了伴が、其父了意が言なりとて
傳へたり。高野大師の言に、家は崇高なるは惡し。火災の害を不免。簷の卑く低れ
たる家は、繁昌にして永久なりとて、今にも東寺の大師堂は、簷各別に卑く低れたる
故に久しく火災を免れたりと云ふ。予所見と符合せり。故に予京師在留の日、六度ま
で大師堂へ參詣したるは、此等のことに感服すれば也。大師の唐人より傳へられたる
ことと、予が所見の符合すること、奇と云ふべし。是等のことも、學問聞見の功にて
得ることなり。良知のみを主張せば、典籍も無用なり、識者も無用なり。孔子は文
(典籍)獻(識者)と宣へり。詩には雖無老成人。(識者)猶有典刑(典籍)と云へ
り。道は典籍に存し、識者に傳はりて多聞多見の功を假らざれば得べからず。唯本心
の良知のみを主張せば、冥然として天地萬事の事明白なるべきの理なし。陽明の學、
其一を得て其二を失ふ。其害の少からざるを知るべし。
一丙午丁未厄歲たること畏天録に載たり。清朝にても、康熙丙午冬には、戸部尙書蘇納

海督撫尙書王登聯等構死す。丁未春には、災祲覺見彗星出で、大白晝見。白青出西
 北。經月餘。是歲七月。輔臣蘇克薩哈誅死すること、王士禎の池北偶談に見えたり。
 乾隆五十一年丙午には、臺灣の彰化縣に林爽文と云ふもの起兵。鳳山縣の莊大田と
 云ふ盜賊の首魁乘亂而起れり。五十二年丁未を経て、五十三年戊申に、林莊共に伏
 誅。事は趙翼の國朝武功紀盛に見えたり、乾隆の丙午丁未は、我天明の丙午丁未なり。
 丙丁の厄、彼我共に免るゝ事を得ざるなり。

鄭成功—鄭
 芝龍の子、
 母は田川氏
 寛永元年肥
 前平戸に生
 る、明朝に
 仕へ、其滅
 後臺灣に據
 りて清朝に
 抗す、寛文
 二年歿

順治十八年に、鄭成功襲取臺灣、(荷蘭人所據)子鄭經孫克塽に至り、康熙二十
 二年(我天和三年癸亥なり)靖海侯施琅攻克。克塽降れり。事鄭成功傳に詳なり。
 康熙六十年、(我享保六年辛丑なり)奸民朱一貴亂を作す。一月にして誅に伏す。事
 平臺紀畧に詳なり。林莊と共に清朝にて臺灣三回の亂あり。
 佛法三武の厄とて、北魏の道武、北周の武帝、唐の武宗と三度佛法を禁じて、僧尼を
 還俗せしめられたれども、皆幾程もなくして再興せり。武宗の佛法破却の詔は、李
 德裕の書きたるにて、面白き文章なり。劉昫の舊唐書に載せて、新唐書に一字も録せ
 ず。藏書の家は新舊唐書は備ふべきことなり。さて武宗の時祠部奏す、括天下寺四千

二氏—佛老

關排する—
 攻撃する

六百、蘭若四萬、僧尼二十六萬五百のみなり。是にて我國佛法の盛なるを比べ知るべ
 きなり。釋迦の佛法東漸と云へるは、妙と云ふべし。
 一 乾隆の御製文集を讀みたるに、近年二氏大に衰ふ。此衰に乗じて二氏を禁絶せんと、
 部臣の奏疏に答へたる詩なり。落句に、留充畫景兼詩景とあり。三武の覆轍を踏
 ますして、其大識量嘆服すべき事なり。
 一 排佛の文は、韓退之の原道、孫明復の儒辱、石徂來の怪說、歐陽永叔の本論、皆一代
 の好文章にて、道理の至極を得たり。二程全書、朱子語類にも、排佛の言多し。韓退
 之の言は淺くして程朱の理は深し。されども、退之の淺きもの實用ありて、深き程朱
 の言無用に屬するは、清の紀昀が辨にて明白なり。其姑妄聽之に見えたり。感服すべ
 きこと也。諸名公の文は、明人の異端辨正に載せたり。さて、又陳繼儒眉公の佛寺を
 大養濟院なりと云へるも、面白き見識なり。其古文品外録に見えたり。さて又我國の
 人は、學者は少くして、文字をも不知愚民のみ多ければ、佛法は凶惡を戒むる一助
 となりて、古今大害もあれども、又大功ありと見えて、天よりして今日に至らしむれ
 ば、學者これを關排するは無用のことにて、且我邦今日にては、佛法は王法の一端、

國法の一條なり。決して排闢すべき道理なきこと也。

一宋祁が新唐書、王縉傳の贊に、佛法は多分中國人の老莊などに取りて拵へたる者と云ふことを言へり。朱子晚年此説を得て大に悦び、韓歐の闢佛よりも宋祁の言眞贋を得たりとて、釋氏論二篇を著して、佛法の言の莊列に符合する四條の證を載せられたり。其説其文は極て可なり。さて、道學者の中には、朱子は第一博識とすれども、宋祁の言を得て、是を知られたるは、書を讀むことの多からざるを知る。是は唐の太宗の時、例の佛法嫌の傅奕が言ひたる事なり。傅奕上疏請除佛法。佛在西域言妖路遠。漢譯胡書。恣其假托と云ひたるなり。宋祁よりは四百年前、唐の初に此説あることなり。

韓が佛骨表の初の一段も、傅奕が上疏の、古無佛法。君明臣忠。祚長年久。自傳其法。主庸臣佞。政虐祚短。と云へるに原きたるものなり。

一父母の喪の事、戴記に、三年之喪、二十五月而畢。(三年間)公羊傳に、三年之喪、實以二十五月。(閔公三年)戴記に、再期之喪、三年也。(喪服小記)是故に、檀弓に、祥而縞。是月禫。徒月樂すとあり。祥は三年忌なり。禫は喪を祛くの祭なり。此

文は三年忌の其月に禫の祭をして喪を祛き、其翌月には音樂すると云ふことなり。檀弓に、又魯人有朝祥而暮歌者。子路笑之。夫子曰。由爾責於人。終無已夫。三年之喪亦已久矣夫。子路出。夫子曰。又多乎哉。踰月則其善也。これも同説にて、三年忌の明月よりは歌樂すべしと云ふこと也。是王肅が二十五月の説なり。

儀禮の士虞禮に、朞而小祥。(一周忌也)曰。薦此常事。又朞而大祥。(三年忌也)曰。薦此祥事。中月而禫。是月也。吉祭猶未配。と戴記の間傳にも、父母之喪。既虞卒哭。疏食水飲。不食菜果。一期而小祥。食菜果。又期而大祥。有醯醬。中月而禫。禫而飲醴酒と。此文は再期二十五月に大祥の祭を作して、中一月を置いて、二

十七月めに禫祭して、始て喪を祛くと云ふことなり。雜記に、父在爲母の喪を説けるに期之喪。十一月而練。十三月而祥。(一周忌也)十五月而禫。これも母の喪一周忌

十三月に終れども、中一月を置いて、十五月に禫の祭をして喪を祛く。三年の喪の二

十七月と同じ理なり。是鄭玄が二十七月の説なり。後世は大抵鄭説を用ふ。清の萬斯大學禮質疑には、二説の異同に苦みて、中月を中谷中林の例にて、其月の中と讀みたり。總て鄭玄より禮文の異同に苦みて牽強附會すること、禮學の習にて、笑ふべき事

率合の説
無理にひき
つけたる説

なり。中月の中は、左傳に命汝三宿女中宿至（僖二十四年）是中一晚とま
りと云ふことなり。學記に、比年入學中、年考校すとあり、是も、中一年と云ふ
ことなり。喪服小記に、亡則中一以上而耐すとあり。是も昭穆の中、一世をへ
だてよ、孫は祖に耐すること云ふ。中元とは、中一月をへだてよと云ふことなり
雜記の十五日の禫にて、明白に分る事なり。牽合の説は論ずるに足らず。是禮文第一
の父母の喪さへ、二十五日にや、二十七日にや、辨別しがたし。三禮の信するに足ら
ざること如此。

唐の時に、王元感と云へるもの、三年の喪は三十六月なりと云ふことを言出して、
張柬之にか辨斥せられたること、新唐書に見ゆ。清の毛奇齡は、三年の喪は三十六
月なりと云ひ、喪禮吾說篇に見ゆ。皆々笑ふべき事なり。去ども、漢の文帝始て短
喪を定められたる時に、易日の制とて、月を日に易へて三十六日とせられたれば、
此時代までは、三年の喪は三十六月と覺えたりと見ゆ。記傳の類は文帝より後に出
たるも計りがたきこと也。

一宗廟四時の祭は、小雅天保の詩（毛詩如此）爾雅の釋天、周禮大宗伯の職には、春

爲難し一原
本爲維し

祠夏禴秋嘗冬烝とあり。王制祭統には、春禴夏禘秋嘗冬烝とあり。郊特牲、祭義
には春禘秋嘗とあり。明堂位には、夏禴秋嘗冬烝春社秋省と云ふ文もあり。鄭立は周
禮を周の時の禮と定むる故、此異同に苦みて、王制の注には、蓋夏殷之祭名と云ふ。
祭統注には、夏殷時禮也と云ふ。笑ふべきの甚しきこと也。鄭立又郊特牲を注して、此
禘皆當爲禴字之誤也と云ふ。祭義を注して、春禘夏殷禮也と、夏殷の禮と云ふ
さへ、遁辭にて笑ふべきに、本文の字を妄に改ること、以の外の誕妄なり。さて、
仲尼燕居孔子之言に、郊社之義嘗禘之禮とあり。中庸にも、郊社之禮禘嘗之義とあり。
是は、宗廟春秋の祭を稱せられたるに見ゆれば、郊特牲祭義の春禘秋嘗の言其實を
得たりと見ゆ。されども、是も決定は爲難し。是禮文第一の宗廟四時の祭さへ、紛然
として明かならず。三禮信するに不足こと如此。

一祭義には、致齋於内散齋於外とあり。祭統には、君致齋於外夫人致齋於内とあ
り。是致齋は内に在りや外にありや。何に在るべきや。王制に、五十杖於家六十
杖於郷七十杖於國八十杖於朝とあり。祭義には七十杖於朝とあり。七十の人
國に杖つくべきや、朝に杖つくべきや。禮文錯出從ふ所を知らず。三禮の信するに

足らざることを如此。

金革—兵器の義、轉じて戦争をいふ

一禮運に、三年之喪。與新有昏者。期不使と云ふ。雜記に、三年之喪。祥(小祥、一週忌也)而從政と云ふ。公羊傳に、古者臣有大喪。則君三年不呼其門。已練(小祥、一週忌也)可以弁冕。服金革之事。君使之。非也。臣行之禮也。(宣元年)此文にては、三年の喪に、一週忌より後は、上の政事に服役することを云ふ。曾子問に、子夏問曰。三年之喪。卒哭。金革之事無。避也。禮與。孔子曰。昔魯公伯禽有爲。爲之也と云ふ。喪大紀に、既卒哭。弁經帶。金革之事無。避也。と云ふ。此文にては、一週忌を待たずして、兵戎のことに、服役することを云ふ。或は是は金革の事故に、常事とは別也と云へど、公羊傳には、一週忌よりして金革の事に役すとあり。或は公羊傳は常禮を云ひ、喪大紀曾子問は戎事ゆる變禮を云ふと云へど、小祥までは、疏食水飲。不食菜果。瘦せ衰へたる疴弱の人戰場へ出でては、味方の足手纏となりて、敗北疑なし。聖人の禮は、如此なる者には非ざらん。三禮の信ずるに足らざること如此。

一曾子問にも、雜記にも、服問にも、君子不奪人之喪。亦不可奪喪也とありて、

佗國—他國

繁蕪叢勝—くたくし、煩しきこと

禮運に以衰裳入朝。非禮也とあり。檀弓には、矯固が言に、士唯公門脫齊衰と云ひ、服問にも、雖朝於君。無免經。唯公門有脫齊衰と云ふ。此文にては、喪中にも入朝と見えたり。三禮の信ずるに足らざること如此。

一王制には、大夫祭器不假と云ひ、禮運には、大夫祭器不假非禮也。是謂亂國とあり。是大夫は祭器を假るべきや、假るべからざるや、紛然として從ふ所を知らざるなり。

一禮記の誕妄なるは、明堂位の魯君臣未嘗相弑也と云ひ、隱公、桓公、閔公、太子般、太子惡等の類、弑逆篡奪、佗國よりも多し。文王世子の文王の、我百、爾九十、吾與、爾三焉と云ふに至つては、誕妄極れり。聖人とて、人に年壽を分ち與ふべきものならんや。

一周禮は、戰國の末の人、我世に用ひられれば、如此の法制を立てて世を治むべしとて古禮をも取り、管仲、商鞅が法などをも取りこみて、一家言を拵へたる者なり。戰國の末に成りたるもの故、重斂重刑、繁蕪叢勝、古の聖人寬簡を貴ぶの意とは、沒交渉の事なり。先づ數の定りたる官人一億に及べり。螻蛄を捕ふる役人、蛙を捕ふる役人、

夷隸の鳥獸と云ふ役人など、聖人の世にあるべき事歟。逆罪たりとも焚殺すと云ふこと、文武周公の刑なるべき歟。理財の事の多き、末世の弊政にて、文武成康の盛代には有るまじき事なり。王莽これを用ひて天下を亡し、王安石これを用ひて天下を亂る。二王の先蹤にも懲りずして、周禮は周公致太平之跡と云ひ、周禮一書自聖人廣大心中一流出來などと云ふ、如何なる謬見ぞや。萬斯大が周官辨非も讀むべし。されど郝京山が談經周禮の條に辨斥する所、極て其肯綮を得たり。

一孟子王制に、公侯百里。伯七十里。子男五十里と云ふこと、今古の定説なり。孟子に、又魯儉於百里。齊儉於百里ともあり。左傳に子産の語にも、古者列國一同（百里なり）とあり。周禮には、公五百里。侯四百里。伯三百里。子二百里。男百里と云ふ。此も、我建立せる一家言の法制なり。

一禮記諸篇を、皆古聖人の禮となすとも、重喪に酒肉を斷つと云ふことは、有べき理なり。小祥までは、疏食水飲。不食菜果と云ふ。一年の間肉食は云ふまでも無く、野菜をも食はず。野菜をも食はずして何を食すべきや。古今の人情相遠からず。今人に肉食はおろかなり、菜食を斷せば、堪ふべきや。堪難き事の強ふるは非理なり、是偽

拘泥一かいはりなづむ

の明白なる者なり。昔時、京都に學者あり、内則の子事父母。雞初鳴。咸盥漱。衣服。斂枕箪と云ふ文を確く守り、寒天にも曉の七つに起きて父母をも呼び起し、其夜具蒲團を收めたり。老父の迷惑するにも構はず、終に其父は寒氣に中りて死したりと承り傳ふ。禮文の人道に害あること如此なり。

一禮記諸篇には、名理の語の拳々服膺すべきこと多く、誠に感歎にたへたること多し。大抵制度を説けるは、大半は偽なりと定めて、其れに拘泥せずして、唯其名理の語を信奉せば、論孟の羽翼とも云ふべし。吾三禮を惡むには非れども、禮學の人は制度を喜んで義理を知らず、義理に不通なる故に聖人の道徳を知らず。天下は車服器械にて治るもの様に思ひ、器數の末事に拘泥して、脩身治人の義に暗し。其害少からず。孔子の言に、禮云禮云。玉帛之云乎哉。樂云樂云。鐘鼓之云乎哉。禮樂の妙理は、玉帛鐘鼓の外に在ることを知るべし。

一予が舊友に、禮學を好みたる者あり。父の喪なりとて、斬衰に似たる者を拵へて著たり。さて斬衰を時々脱いて酒を呑み肉を噉ひ、又時々は此を著けて人を欺く。予此よりして、其人を惡み、又禮學の無用を悟れり。其人の不義は論するに足らず。其斬

衰なる者、大に間違へり。聖人喪の五服を定められたるは、絲の太き細きにて、斬衰齊衰、大功、小功、總の別を立てられたる者にて、中庸に云ふところの親親之殺、此にて別る。然るに、其糸の疎細、斬に叶はざれば、斬衰に非ず。父の喪に小功總の絲を用ひてすむべきや。五位の人三位の服を服せば、罰を蒙るべし。此は上の御制法もなければ、手次第なりとてすむべきや。官位の五服も喪の五服も同じことにて、親親之殺、尊賢之等、禮之所生也と、中庸に説けるにて知るべし。さて、喪服の絲の疏細を間違へる時は、禮に中らざること禮に明文あり。檀弓云衰與其不當物也。寧無衰。此文にて疏細を間違へたる喪服は著ざるを可とすること明らか也、禮學の人は國俗にも違ひて如此ことをなし、又禮文にも違ふに至る。惡むべき事ならずや、笑ふべき事ならずや。

室一つま

一王制には、春秋教以禮樂、冬夏教以詩書とあり。文王世子には、春誦(詩也)夏絃(樂也)秋學禮、冬學書とあり。是も異同なり。春絃夏誦と云はど王制と符合すべし。班固十五入大學、學先聖禮樂と云ふ。内則には、二十始學禮とあり。是も異同なり。禮記にては、男子三十有室、女子二十而嫁すとあり。家語にては、

歸一の論
一定の論

嚙語―たは
こと

禮言其極也とありて、三十までに娶り、二十までに嫁すとせり。是は王肅が拵へたる處なれども、禮記鄭立にはまさされり。婚姻の時も、鄭立は周禮の媒氏を據として、二月なりとす。王肅は荀子家語毛萇に因りて冬月とす。國風の士如歸妻、逮氷未泮と云ふに因れば、是も、王肅をまさされりとす。されども、制度の事は一致に出づる故、法則となる。今の三禮は、戰國西漢の人の各々聞傳へを記せる者なれば、紛然として歸一の論なし。夫を孔子の舊などと思ふは笑ふべき事なり。一檀弓に、孔子姉の喪ある故に、拱して右を尙にすれば、門人も拱して尙右とあり。孔門の弟子吉事尙左凶禮尙右を知らざれば、不學の甚しきなり。夫を甚矣哉。二三子之好學也と、孔子の嘆賞したまふ。誠に夢中の嚙語なり。左傳、晋の范獻子、趙簡子、中行文子、魯に來りて、范子は上卿ゆる羔を贄とし、趙子、中行子は次卿ゆる雁を贄とす。此よりして、魯人始て羔を尙ふと云ふことを載せたり。(定公八年)二生一死贄は、舜典に出でて、卿は羔、大夫は雁、士は雉と云ふ事は、小兒も知りたること也。魯猶秉周禮(閔元年)周禮盡在魯(昭二年)左傳にも頻繁に云へり。禮記にも、有禮之國也(明堂位)とあり。然るに是等の次第をも辨せずして、

末造—末年

科斗の古文
—古代の文
字、竹簡に
漆を以て書

何等の禮を傳ふべしや。是も亦夢中の嚙語なり。總て禮の事は、夢中の嚙語のみ多しと知るべし。孟子の諸侯惡其害己皆去其籍軻也嘗聞其畧とのたまへる、誠に得實の言なり。然るを周禮の如き精細の書あらば、孟子の知り給はざることはなきなり。其書の戰國の末造たる事明々了々たり。

一 論語に、博文約禮と云ひ、約之、以禮と云ふ。三千三百、約なる者に非ず。されば論語の禮と云へるは、三千三百の外に出づるや。不審なる事に非ずや。

一 制度を好む人は、我邦の有職故實、武家の弓馬の法式、當時の御法令を學ぶべし、周禮を悦んで天下を亂敗せるには遙にまさりて、且は今日の實學とも云ふべし。三代の禮文を論ずるは、茶器の僉議にて、無用の學と知るべし。

一 予少時より、漢宋の舊説に従つて、仁を愛人なりと解説せり。中庸以下の仁義と對言せる類は、愛人にて明々亮々なり。唯論語にては、愛人の義通ぜず合せず。戰國の愛人を以て孔子の仁の字を説くは、漢隸の字を以て科斗の古文と爲すに同じ。苦心數十年にして、始て其解を得たり。今論列すること左の如し。

一 樊遲問仁。子曰。愛人。問知。曰。知人。と。知人は知の一端なり。去れば、愛人

きたる爲頭
大に尾小
く、其形科
斗(へおたま
じやくし)
に似たるよ
りいふ
旁義—弟二
義

關涉—あつ
かる

も仁の一端にて、仁を解して愛人とは爲難し。且諸子問仁に種々の答ありて、愛人のみ仁の正義ならば、孔子諸子へは旁義のみを教へ給うて、樊遲に而已正義を教へ給ふにや。これ不通の論なり。門人の最第一たる顔淵には、克己復禮と宣へり。一向に愛人の事にはあらず、仲弓には、出門如見大賓、使民如承大祭と宣へり。二句敬の事にて、一向に愛人のことに非ず。樊遲に恭敬忠と云ふ。是も愛人の事に非ず。子張に恭、寬、信、敏、惠と云ふ。是も愛人の事に非ず。其最不通なるは、司馬牛には、訥言と宣ふ。愛人にて通すべきの理なし。曰。無終、食之間、違仁。造次於是、顛沛於是。顛沛は下駄の鼻緒を踏切りて、臥轉ぶの時なり。此時愛人するも、虐人るも有べき時ならず。愛人にて通すべきや。曰。欲仁、斯仁、至と。間居獨坐せんに愛人は至らざるなり。是は間居獨坐の時、眼前に來り至るの事に非れば、此語意に叶はざるなり。伯夷、叔齊、讓國餓死せり。曰。求仁而得仁。愛人に關涉する事なし。微子去之。箕子爲之奴。是亦愛人に關涉することなし。愛人安民。濟世利民など云ふことにて、論語の仁の字毫も通すべきの理なきことなり。是にて先漢宋儒氏の疎謬を斷知すべきことなり。

疎謬—そま
つにしてあ
やまりの多
きこと

強解—こじ
つけて解釋
する也

出_レ門_レとは居_レ家の反對にて、居_レ不_レ容_レ子_レ之_レ燕_レ居_レ伸_レ々_レ如_レ天_レ々_レ如_レとある故、出_レ門_レの時は威儀容貌を齊整にし、敬肅不_レ苟_レこと大賓に接見する如くにするなり。使_レ民は役_レ使_レ庶_レ民_レすることにて、是亦敬慎不_レ慢_レこと大祭に承事するが如くにすることなり。左傳に、鮑叔論_レ襄_レ公_レ曰_レ君使_レ民_レ慢_レ亂_レ將_レ作_レ矣_レ（僖八年）と云ふにて、使_レ民の敬すべきを知るべし。二語共に敬の事なりと、古註集註ともに言うたり。間然すべからず。左傳に、臼季が冀缺夫妻敬_レ相待_レ如_レ賓_レを論じて、敬_レ德_レ之_レ聚_レ也_レ能_レ敬_レ必_レ有_レ德_レ臣_レ聞_レ之_レ出_レ門_レ如_レ賓_レ承_レ事_レ如_レ祭_レ仁_レ之_レ則_レ也_レ（僖三十三年）とあるにて、二語ともに敬の事たるを知るべし。

近時愛人を以て仁を説くものあり。出_レ門_レの語を強解して、視_レ民_レ若_レ傷_レの事とす。可_レ晒_レの甚しき也。孔子樊遲問_レ仁_レにも、執_レ事_レ敬_レと仰せられたり。此敬の義を無理に愛人に爲しおほせたりとも、克己復禮に愛人の義あるべきや。論語の仁の字、愛を以て通すべきの理は斷じて無き事なり。

一論語の仁の字に、一の大疑あり。令尹子文は楚國の良大夫なり。愛人の徳も有るべし、長人安民の徳もありたる人なり。されども、夫子曰_レ焉_レ得_レ仁_レとあり。冉雍、

孰れの所—
源本「の」を
脱す

仲弓は徳行の一人にて、可_レ使_レ南_レ面_レと仰せらる。南面は諸侯王の事なり。諸侯王となるも宜しき人なれば、愛人の徳も有るべし。長人安民の徳も有るべし。人を愛する心も無く、人の長となり、民を安んずる徳なきもの、可_レ使_レ南_レ面_レと仰せらるべきや。されども、夫子曰_レ不知_レ其_レ仁_レ也_レ是を古に求むれば、子文も仁者に非ず、是を今に求むれば、仲弓も仁者に非ず。孔子亦自言_レ若_レ聖_レ與_レ仁_レ則_レ吾_レ豈_レ敢_レせんやと。仁者は聖人と同格にて、夫子さへも謙して自居り給はず。是故に、禮記にも中心安_レ仁_レ者_レ天_レ下_レ一_レ人_レ而已_レ（表記）とあり。此意を以て推す時は、天下に仁者は無きものなり。金の草鞋を著けて尋ねたりとも、逢ふべきものに非ず。聖人と同格の者なればなり。

一然るに。論語の初に、不學の子弟に、汎_レ愛_レ衆_レ而_レ親_レ仁_レとあり。孰れの所に親むべき仁者あるぞ。又子貢に教へ給うて、居_レ是_レ邦_レ也_レ事_レ其_レ大_レ夫_レ之_レ賢_レ者_レ友_レ其_レ士_レ之_レ仁_レ者_レ孰_レれ_レの所に友とすべき仁者あるぞ。郷黨にも仁者あればこそ、子弟に是と親しめと仰せられ。諸侯の國にも仁者あればこそ、子貢に朋友とせよと仰せらる。先の仁の字は聖と同格にて、孔子さへ當り給はず、後の仁の字は、郷黨にも侯國にも多くあり

支離矛盾一
はなれど
にしてつじ
つまの合は
ぬこと

て、賢者よりは下等の者なり。先後支離矛盾して通すべきの義なり。是論語の一大疑
なり。

一孔子の仁の字は、如何にぞと云へば、衆善行の總名にて、善の字と同じ。孔子曰。道
二。仁與不仁而已矣。此仁の字を愛人などと解して、知仁と並び、知仁勇と並
び、仁義と並び、仁義禮知と並ぶ仁とせば、孔子の此言不通なり。道は二のみなら
んや。義不義もあり、禮無禮もあり、知不知もありて、道は百條なり。仁の字善と
同じと云ふ事を知れば、道二善與不善而已矣と云ふことにて、目下に瞭然たり。
是より眞智を開くべし。

一道も諸道の總名なり。徳も諸徳の總名なり。善も衆善行の總名なり。論語の仁の字
衆善行の總名たる故に、道德の字と通用せり。曰。孝弟者也。其爲仁之本與。孝經
云。夫孝。徳之本也。仁と徳と通用せり。曰。仁遠乎哉。中庸云。道不遠人。と
仁と道と通用せり。曰。仁者安仁。知者利仁。中庸五者。天下之達道也。或安
而行之。或利而行之。二の之の字、指達道。仁と道と通用せり。曰。仁者安
仁。知者利仁。大戴に、仁者樂道。智者利道。(會子立事)と。仁と道と通用せり。

互換通用一
双方入換へ
或は共通に
用ふるこ

さて、是は論語と它書とにて云ふ。論語に本立而道生。孝弟也者。其爲仁之本歟と。
本は孝弟なり、道は仁なり。仁と道と互換通用すること、論語の開卷よりこれ有れ
ば、論語の仁の字は道德と同じく衆善行の總名と云ふことに心付くべき事なるに、是
まで心付なきは、蒙昧の甚しき事なり。

一仁の字、衆善行の總名故に、論語には、行の字の換りにも用ふ。曰。君子以文會
友。以友輔仁。これ文行相對するの例にて、朋友の忠告善導にて、己の德行を輔
くるなり。愛人を輔く、安民を輔くにて通すべきや。曰。博學篤志。切問近思。仁在
其中矣。中庸にて、博學審問。慎思明辨。次に篤行と云ふ處を、論語には仁とあり。
善行の學問より生ずるを云ふ。愛人在其中。安民在其中。にて通すべきや。

一古の仁の字は、善の字なり。故に古人は仁と善とを通用せり。論語に、我欲仁斯
仁至矣。又云。欲仁而得仁。皆善道を行はんと願欲して、善道の眼前に至り、善道
を得るを云ふ。孟子に、可欲之謂善とあり。仁善の通可見。論語に、舜舉皋陶。
不仁者遠矣。湯舉伊尹。不仁者遠矣。左傳に、禹稱善人。不善人遠矣(宣十六年)
仁善の通可見。大學に、堯舜率天下以仁而民從之。桀紂率天下以暴

殊異一ことなる

而民從之。孟子には、文武興則民好善。幽厲興則民好暴。仁暴對用。善暴對用。仁善の通可見。表記に、仁者安仁。知者利仁。畏罪者強仁。大戴には、太上樂善。其次安之。其下亦能強之。(會子立事) 仁善の通可見。偽書、天道福善禍淫。(湯誥) 左傳には、神福仁而禍淫。(成二年) 仁善の通可見。如此に古人は仁と善とを互換通用したり。仁とは善のことと云ふを了知すべきことなり。一何を以て仁の字、善の字と同うして、衆善行の總名となるや。中庸、孟子表記に皆云ふ。仁者人也。これ義者我也(繁露)と云ふに對して、我に非ず人もと云ふことなり。仁者接人之道也と云ふことなり。さて、其爲字、从人从二。二人爲仁。凡聖人の道は、人と人と、すれ合ふ處よりして此道を生ずる者なり。父子之親、君臣之義、夫婦之別、長幼之序、朋友之信、五常五倫、孰れか人と人とすれ合ふ處より生ぜざる者あらんや。是皆仁なり。是故に、仁の字諸行を兼ねべく、又衆善を總ぶべし。論語の仁を説くは、多く此義を言ひたる者なり。四端六徳など對言せるの仁とは、判然として殊異なり。

一何を以て中庸孟子以下、又は孔子の言にも、仁を愛人の事に用ふるや。人と人とすれ

邢疏一邢曷の論語の疏徹底して一奥底までのみこみて

合ふ處には、愛人の發動を以て第一の事となす。人々相愛するの心なければ、五倫も孰れ人道も滅す。是故に、仁之爲人也。爲接人之道也。愛を以て上頭第一義となす。故に古來相傳して、愛を以て仁を説けり。されども、論語の仁の字を愛人の事なると心得ては、毫も通ぜざる事なり。

一さて仁の字、衆善行の總名たること、予が言出せる新奇の説には非ず。程伊川曰。四徳之元。猶五常之仁。偏言則一事。專言則兼四者。(易傳) 是專に言へば、仁の一字仁義禮智を兼ねと云ふこと也。是仁の字道德の總名となる。されど、性中有仁義禮智四者。何曾有孝弟乎と云はれたるを見れば、仁は衆善の總名を能々知られたるには非ず。邢曷論語の疏云く、仁者善行之大名也。(里仁篇名疏) 是仁の總名たるを明言せり。されども、何の故に門人へ仁を許し給はずなど云ふ仔細の義理を知らざれば、邢疏にて論語の仁を吞込むべきに非ず。孔安國解、爲仁。由己而由人乎哉。云。行善在己。不在人者也。(顏淵問仁章) 仁之爲善は西漢の儒既已知之。されども、是は戰國以來、孔門の仁の字は善の事と云ふことは聞傳へて知りたるのみにて、實は徹底して其義理を盡せるには非ず。然し予が所説は、漢宋儒氏

巧言令色
言語を巧に
し、顔色を
よくし他の
意を迎ふる
こと
節文一序を
守り行をな
さめとるの
ふること

も畧知りたる事にて、新奇奇怪を言ふに非ることを知りたまふべし。
一論語の仁の字、善の字と同じと云ふことを知れば、曰。孝弟也者。其爲仁之本與。孝
以事親。弟以事兄。是修善行之初なり。曰。巧言令色。鮮矣有仁。巧言令色の
人實に善行ありと云ふこと、世間の所希なり。曰。汎愛衆而親仁。衆人は兼て
愛すべし。殊に善行のある人は、親近して薰陶の益を蒙るべきなり。曰。人而不仁。
如禮樂何。人として善心なきものは、禮の節文も樂の和樂も何用をかなさんや。曰。
里仁爲美。擇不處仁。焉得知。里は郷里の里、安居の謂なり。善行に安居す
るは美事の極なり。是真に仁者なり。善惡の分を明辨して、惡事を選び、去つて能善
行に處る者は、智者の事なり。否なるときは智者には非ず。曰。仁者安仁。智者利
仁。衆善を安行して、天性に出づるが如き者、これ真に仁者也。善には利あり、不善
には害ありと云ふことを明辨して、不善を捨て、善を取つて行ふものは、智者の事な
り。曰。一日用其力於仁。精力を出して善行を修するを云ふ。曰。無終食之
頃違仁。造次於是。仁。顛沛於是。仁。飯を食ふ程の間も善心を失はず、造次
の假初の間も善を離れず、顛沛のころび倒るゝの時も善を離れずと云ふこと。さて、

是は中庸に、道也者。不可須臾離也と云ふと同うして、論語には仁と云ふ、中庸
には道と云ふ。予先に論語の仁の字は衆善行の總名ゆゑに、論語の仁字を諸書には道
徳と云ふと言ひたること、相違あるまじ。眼を明にして讀みたまへ。仁の善たるを
知れば、論語の仁の字を解するには破竹の勢あるなり。
一論語に、問。孝は事親の方を問ふなり。問。政は治民の方を問ふなり。問。仁は
善行を修するの方を問ふなり。故に樊遲には、恭敬忠の三を教へ給ふ。子張には、恭
寛信敏惠の五を教へ給ふ。顔淵には、克己復禮。仲弓には、敬恕、司馬牛には、訥
言。子貢には、能近取譬。又事賢友。仁。樊遲に、又愛人。又先難後獲。可
見仁と云ふは、一徳一行に非ざることを、善行を問ふ故に、其人に應じて修すべき善
行を擧げ示し給ふこと如此。されども、皆々能々修すれば、安行の仁者に至るべし。
分け上る籠の路は多けれど同じ高峯の月を見るかな
と云へる和歌、論語諸子へ告げ給へる、仁の義に能々叶へりと知るべし。
一さて、此善行を行ふに、三等の別あり。善行を安じて行へば、仁者にて聖人の事なり。
利して行へば、智者にて賢人君子の事なり。勉強して行へば、勇者にて士人學者の事

矯揉造作—
むりにため
なほし又は
わざとつく
り出すこと

泥濘—どろ

なり。論語に、仁者安仁。智者利仁と云ふ、表記には、仁有三。仁者安仁。智者利仁。畏罪者強仁と云ひ、中庸に、或安而行之。或利而行之。或勉強而行之と云ふ。善行は一なれども、行ひやうに三等の區別ありて仁智勇と分れ、聖賢凡庸の隔を爲すことなり。

一安而行之とは、呂覽に、安之若性。(義賞)漢書に、安服若性。(谷永傳)とありて、善行を行ふ事天性自然の如くにして、矯揉造作を假らず、酒好の酒を飲むが如くなる者安行なり。善を行ふ心なくして、行ふ處自然と道と合する者安行なり。中庸に、誠者不勉而中。道不思而得。道從容中。道聖人也と云ふ。是安行なり。孟子には、堯舜性之と云ひ、舜由仁義行。非行仁義也と云ひ、動容周旋中禮盛德之至也と云ひ、孔子の七十從心所欲不踰矩と云ふ、皆安行の仁、至誠の聖なり。故に若聖與仁。吾豈敢せんや。聖仁と並べて仰せらるゝも此故なり。是安行を眞の仁者とするなり。利行の利は、解知する者少し。利は利害の利にて、知者は、善の利ある、不善の害あるを明知する故不善をすて善を行ふ。今人路を行くに右は泥濘なり、左は乾けり。夫へ向へば必泥の方を避けて乾ける方を行く。如何

物茂卿—萩
生徂徠江戸
の人、名は
雙松字は茂
卿、通稱總
右衛門、學
を以て柳澤
吉保に仕ふ
復古の學
を唱へ名聲
甚だ高し。
享保十三年

にとなれば、泥を踏み陥れば足袋を汚し、足履を濕すの害あればなり。何も、勉強することには無けれども、己と善と未だ一致の境界へ至らず、善の利あるを知つてこれを行ふ。安行の性のまよにするに比すれば下れり。是知者のことなり、賢者のことなり。勉行は、心内に邪なる情欲多くして、心のまよに行ふ時は、不善無道に陥入すべきを、情を揉め欲を忍へて、勵精發憤して善行を勉強して行ふ者なり。利行に比すれば、又下れり、是勇者の事なり。士人學者の事なり。

物茂卿が論語徴に、利仁を勉強と解せり。義理に盲昧なる而已ならず、中庸表記を知らざるなり。此三行は吾道の緊要の事なるに、夫をも辨知せざる程の者なり。其經學其道義を奉ずる者は、盲目に均しき者なり。

一擇處仁。知者利仁とは、人欲利に走つて今不善をなせば、己の身に大益ありとも、此は後に巨害あり。不善にして利あるは、甘き毒を食ふに同じ。又盜賊の財を得るに同じ。今は利ありとも、後に大害を受くると云ふことを知り、又不善にして利を得れば、己は無事なりとも、子孫其惡報を蒙ると云ふことを知り、今善を行ひて利なし。

歿、年六十

己其利を得ずとも、子孫其善報を蒙ると云ふことを知り、天道を明辨する故に、善不善を擇んで不善を捨て善を行ひ、善を利なりとして行ふ、是智者の事なり。學者安行には至り難し。天道を明知して、利行には至るべき事なり。

一仁は善行なり。孔門諸子善行を修せざる者なく、善行の一端を得ざる者なし。何故に諸子には不知其仁也と仰せられ、子文、陳子には焉得仁と仰せられたるぞ。是所論語中第一の要義にて、此義を知れば、論語の義解すべし。知らざれば、論語解すべからず。仁の善行たるまでは、漢宋の儒も知りたれども、此義は、二千年實に解し得たる者なし。今其義を明辨して、天下後世に傳へ示さん。仁は衆善の總名故、小徳微善も仁人仁者と云ふべし。親仁友仁などは、唯善行ある人の事を云故に、賢者より下に仁者と仰せられたり。扱眞の仁者は、安行の人を云ふ。安行ならざれば、眞の仁者には非ず。安行は中庸にても、生知と同格にて、聖人の事なり。故に仁の難きなり。然るに、仲弓之簡、子路之果、冉有之藝、公西赤之禮容、令尹子文之忠、陳文子之清、皆善行の一端を得て、利行勉行に出で、安行自然の境に造れる人に非ず。自然の境界に造れば、性之の誠聖なり。其企及ばざる事明白なり。故に不知其仁也焉

路脈一みちすぢ

得仁と仰せられたり。

面命提耳「面命」は直接に向つて命ずること。「換耳」は教誨の詳且切なること。即ちまのあたりよく誨ふる意詩經に出づ

一さて、此事突然として是あらんには、可レ知の路脈もなく、可レ解の道理も無きに、論語を編集せる時、里仁の篇に、仁者安仁。知者利仁と云ふ語を載せて、安而行善者は仁者なり、利而行善者は知者なりと云ふことを辨明に知らしめて、其次の篇公治長に、不知其仁也。焉得仁と、條々を擧げて、仁者は安行なりと云ふことを明白に知らしむ。若聖與仁と仰せられたるも、安行のことなりと云ふ事まで、明白に分る様に編集せり。古人用意の委曲詳悉なる、面命と云ふべきか、提耳と云ふべきか、手携と云ふべきか。實は今云把手て引くと云ふやうなるを、二千年夫に心付かざる故、焉得仁。不知其仁也と云ふを、皆無理なる注解而已を爲たるは、如何なる蒙昧ぞや。

夫子曰、若聖與仁 吾豈敢せんやと、安行の仁を云ふ。表記云、中心安仁。天下一人而已矣。安行の難きを云ふ。諸子の仁を許したまはざるは、其所行の善、皆利行勉行にて、安而行之ものに非ざるが故なること明々亮々なり。

一説卦に、立天之道。曰陰與陽。立人之道。曰仁與義。とありて、天地に在りて

は陰陽なり、人に在ては仁義なり、人愛念を生ずれば、身體暢然として解緩なり。仁は是春夏の陽氣なり。敬心を生ずれば、身體凜然として畏縮す。義は是秋冬の陰氣なり。天地の陰陽に同じき仁義なれば、堯舜の時よりして、此事尙書に見えたり。去ども、仁義と云ふ字面はなし。論語にも、仁義の字は無くして、其事は二條まで出たり。さて、孟子は開卷に仁義を説出せり。仁は愛親を以て云ふ、義は敬君を以て云ふ。又曰。親親仁也。敬長義也。是愛親の孝を仁とし、敬長の弟を義となす。尤至極の事なり。然るに論語には、孝弟也者。其爲仁之本與とありて、孟子の仁義と分けらるる者を、論語にては、總て仁となせり。仁義の二端は、聖道の大綱なり。夫さへも、引括て仁となす時は、論語にては衆善諸行仁に非ること無し。されば、張南軒が五十三條のみ仁と思へるは、論語の仁を不知にて、論語は言々句々仁を説きたる者なりと、古人の言ひたるは識者の妙言なり。孟子は仁義經なり。中庸は誠經なり。論語は仁經なりと知るべし。

一 孟子にも、仁則榮。不仁則辱。仁之勝不仁。仁在。熟之の類は、愛人の事に非ず、善行を云ふ。論語と同じ。

豪髮も少
机案一つく

一心の善に發動する者は仁なり。論語に其心不違仁と云ふ。孟子に、仁人心也と云ふ。善念善心を仁と云ふなり。論語の仁は、善心善行の事なりと知るべし。

一曰。我欲仁斯仁至矣と。能々熟讀して語意を玩味すべし。愛人を欲すれば愛人至るなどと云ふことにては、努力あるまじ。一曰。依於仁。曰。顔子其心三月不違仁。餘子日月至焉。曰。造次於是。顛沛於。是。愛人安民など云ふことにて、毫髮も通すべき事に非ず。今學者家に在りて、父母を愛し、兄弟を愛し、妻子を愛し、奴婢を愛す。是愛人の仁にて、上もなき善行なり。去ども、これ愛人のみ仁なりとせば、机案へ向つて書を披けば、忽然として、愛人の心は消滅す。書を讀む中にも、愛妾の愛すべきを思ひ、愛妓の愛すべきを思はば、愛人の仁には叶ふべけれども、夫にては、書は一字も解し得まじ。さて、是は善心善行にもあるまじ。讀書の時は、愛人の念なくなる時は、終食の頃も無違の義に合せず、造次於是の義に合せず。夫にて、愛人にては通すべからざるを悟るべし。仁は善心善行と云ふことを知れば、机案に向つて書卷を披く、是仁なり。讀書明理は上もなき善心なり、善行なり。机案の塵を拂ふも仁なり。机案の歪めるを正すも仁なり。古人の言行を見るに、膝を崩すは